『魔術？　そんなことより筋肉だ！』 連載版

蜜柑ブタ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仮題名『魔術？　そんなことより筋肉だ！』の短編版の、連載版。

士郎が筋肉バカ。

『魔法？　そんなことより筋肉だ！』の主人公・ユーリとの出会いを経て、彼に憧れをもってしまった士郎が、筋肉魔法を極めようとして、筋肉バカになるネタです。

士郎×桜、前提。

ギャグ？

チート？
色々と理不尽かも。筋肉的な意味で。
それでもＯＫっという方だけどうぞ。

２０１９／０１／３０
感想欄にて、士郎が凛との同盟を断っているのに一緒に行動しすぎな点について構成しなおしてみました。
これでよろしいのかできたら、感想、または活動報告やメッセージなどでお伝えしていただければ助かります

２０１９／０２／０５
感想欄にて、素敵な固有結界詠唱を頂いたので、差し替えました。

目次

プロローグ　起源（オリジン）―― 1
SS1　養父の不安 ―― 6
SS2　凛と弓兵の憂鬱 ―― 10
SS3　槍兵の殺（や）る気 ―― 16
SS4　士郎と聖杯戦争 ―― 24
登場人物設定（変更あり） ―― 32
SS5　イリヤちゃんとバーサーカーさん ―― 37
SS6　士郎と壊れた日常 ―― 45
SS7　結界、破壊！ ―― 54
SS8　ライダーのマスター ―― 62
SS9　士郎と小次郎 ―― 73
SS10　慎二の愚行 ―― 81
SS11　必殺！ ―― 99
SS12　ラブラブ同棲？ ―― 109
SS13　ルールブレイカー ―― 116
SS14　アーチャーの離反 ―― 129
SS15　アーチャーとの一騎打ち 140
SS16　アーチャーの不運 ―― 156
SS17　士郎の魔力による変化？ 165
SS18　十二の試練（ゴッド・ハンド） ―― 171
SS19　アンリミテッド・ハードワー

クス（無限の筋トレ）―――― 182
ＳＳ２０　イリヤの死 ―――― 190
ＳＳ２１　散りゆく者達 ―――― 199
ＳＳ２２　ギルガメッシュとの戦い（？）
―――― 212
ＳＳ２３　未来のため ―――― 225
過去話　士郎と桜 ―――― 235
ＳＳ２４　苦難と幸多き未来と…
246
最終話　今（現在）を生きる ― 261
ＩＦ　もしも他のサーヴァント達が復活したら？　あと死人無し（臓現などは例外）―――― 270

プロローグ　起源（オリジン）

赤い…、赤い世界…。
人が焼ける悪臭に満ちた、灼熱の記憶。
それは、幼い子供の記憶を塗りつぶし、自身の名前すら忘れるには十分すぎた。
その地獄のような光景は、唐突に終わる。
それは、つかの間に見る死までの夢なのかは、その子供にとって理解することも出来なかった。
ともかく、灼熱はなく、代わりに若草の匂いと、吹き抜ける穏やかな風だけがあったが、皮膚が焼けたその子供には、痛みとしてしか感じられなかった。

「ーーーい！　おい！」

若い青年の声が聞こえた。
「おい！　しっかりしろ！　生きてるか!?」

「な、なんて、酷い火傷…！　ユーリさん、動かしちゃダメです！　私が今から治療しますから、水を！」

「おう！」

青年らしき声が遠ざかる。

灼熱で目が乾き、まともに物を見れない状態の子供は、霞んだ視界の中で、美しい少女の顔を見た気がした。

やがて、全身の痛みが急激に和らぎ、子供は安らぎに身を任せて眠った。

＊＊＊

「ピストル拳（こぶし）！」

次の瞬間、パアンッ！っと眼前の巨大なモンスターの体が爆散するようにバラバラに飛び散った。

「すごいすごーい！」

「おう、シロウ。すげぇだろ。俺の拳の圧は！」

「ほんとあり得ないくらいすごいですよね～。ユーリさんは。」

フィーリアが呆れた目で言った。

対して、子供…、士郎は、キラキラした目でユーリという青年を見上げていた。

ピストル拳なる恐ろしい一撃を放ったユーリの体は、まさに一言で言い現わすなら、筋肉の塊。

しかし、ただの筋肉に非ず。

リミッター解除なるユーリの意思にそって、自由自在に膨張するため、普段は、体躯の良い青年程度（それでも結構な筋肉ではあるが…）の体である。

その名も、筋肉魔法。

それは、ユーリが勝手に付けた肉体技（？）である。

士郎が二人に助けられて数日が経過した。

最初こそ、生気のなかった目をしていた士郎だったが、ユーリの常識外れ過ぎる筋肉の変化に興味を抱いて、すっかり子供らしい目を取り戻したのだった。

子供で、しかも全身大火傷で、草原のど真ん中で倒れていた士郎。

フィーリアの治療魔法で火傷を治してから、事情を聞こうとしたが、子供であり、そしてあの大災害の衝撃のため記憶が飛んでいる士郎には、事情を説明する力が無かった。

冒険者ギルドのある町で、知っている人間がいないか、また迷子の依頼に士郎がいないか探したりもしたが、見つかるはずもない……。

なぜなら、士郎はこの世界の住人ではないからだ。そのことを、士郎はなんとなく理解はしていたものの、あえて言わないし、説明する能力が無かった。

心優しい二人は、あんな人気の無い場所に重傷で放り出されていた身寄りの無い士郎を放っておくことなどできなかった。そのため、二人で士郎の面倒を見ている。

しかし、そんな日々は唐突に終わる……。

「ユーリ兄ちゃんのソレって魔法？」

「そう、筋肉魔法だ！」

「魔法じゃありません。」

「僕も使えるかな？」

「影響されちゃいけませんよ、シロウくん。」

「シロウ…、まずは鍛えるんだ。」

「きたえる？」

「そうだ。全ての筋肉に感謝し、全身全霊をもって鍛え上げれば筋肉は必ず応えてくれる。」

「ほんとう？」

「ああ、もちろんさ！　俺の筋肉を見ろ！　これが答えだ!!」
「わあ…！　僕も…、ユーリ兄ちゃんみたいに…。」
そこで士郎の目の前が暗くなった。

そして、全身を再び焼く、煉獄の炎の先に、一人の痩せた男がいて、抱き起こされて、なぜか「ありがとう」っと言われた。
しかし、再び煉獄に投げ出された士郎が思い浮かべたのは、ユーリの勇姿だった……。それは決して、煉獄のごとき災禍でも焼けることなく、記憶に焼き付き、災禍にすべてを奪われた少年を支える起源（オリジン）となる。
……ついでに、その後周りを大きく巻き込む、台風にもなるのだが、士郎がそのことを知ることも、理解することもなかった。

ＳＳ１　養父の不安

士郎の朝は早い。
どれぐらい早いかって言うと、簡単言えば、朝日も昇る前に起きる。
そして、自己に課している朝の鍛錬をし、それからシャワーを浴びて、朝ごはんの支度をする。
「爺さーん。朝飯できたぞー。」
衛宮切嗣は、その実年齢に反して、すっかりと老け込んでしまった。
かって、魔術師殺しなどという二つ名を持っていた強い魔術師は、なりを潜め、すっかりと、老人のように弱り、落ち着いてしまった。
切嗣は、自分の命がおそらく長くないことを悟っていたが……。
「…おはよう。士郎。今日も早いね。」
「当たり前だろ？　朝の鍛錬のためなんだから。」
「士郎…。」
「なにさ？」

「ちゃんと…、魔術を教えてあげるから、朝練、その他諸々…、やめないか？」
「なんでさ？　それよりさ、爺さん！　こないだやってくれた雷バリバリのやつ！　またやってくれよ！　あの時は体痺れて倒れたけど、今度は防げる自信があるんだ！」
「あのな…士郎…。」
「なあ、やってよ！」
「……。」
残る命もいくばかり……、だが切嗣は、猛烈に養子の息子の将来が不安でたまらなくて、死にたくなかった。こんなに、誰かのために死ねないと思ったのは、いつぐらいだろう？
攻撃魔術を自分に向けて放ってくれと言われたのは、つい一ヶ月前ほどだ…。
いきなり言われて、最初こそ困惑したものの、魔術師になることの厳しさと痛みを体で分からせて、魔術師になることを諦めさせる機会と思い、苦痛を訴える体にムチ打って、攻撃魔術を使ったのが、運の尽き。
殺さない程度にやったものの、士郎は痛がるとかそういうことより……。
『防げなかったーーー！』。っと、絶叫したのだった。
どうやら、己の肉体のみで魔術を防ごうとしたらしかった。
それからというもの、士郎の鍛錬の内容はますます重度のものとなり、最近じゃ

握った小石を砕くどころか、砂状の塵にする程度にはパワーアップしていた。

切嗣は、どこで教育を間違えてしまったんだ!?っと頭を抱えて悶々としたが、士郎がそんな風になる心当たりが全くないのである。

そりゃそうだ。

士郎の人格…そしてすべてを形作る支柱である起源（オリジン）は、切嗣ではないからだ。

筋肉魔法の使い手、ユーリ

この世界の何処を探しても見つかるはずのない、その人物こそが士郎を形作っているのだから。

切嗣は、ユーリの名前だけは士郎の口から聞いていた。助けた当初、うわごとのようにユーリの名を呼んでいたのである。

切嗣は、その名前が士郎にとって、兄弟とかそういう身近にいた人物の名前だろうと思っていたが…、その後、切嗣が亡くなる数ヶ月前に、士郎が終始目指している筋肉魔法なるデタラメな筋力を使った力業の元凶であることが判明した。

そりゃもう…、世界中探し回ってでもユーリに報復したいほど恨んだものだ。可愛い義理の息子がデタラメかつ、メチャクチャ過ぎる筋肉魔法なる力業に人生を捧げているのだから。

だが、残念無念。第四次聖杯戦争でボロボロになっていた切嗣は、この世界のどこにもいない人物であるユーリを恨みながら、この世を去るのであった。

そして、切嗣というストッパー（あまり意味はなかったが）がいなくなったことで、これまで以上に己を鍛え始めた士郎は、約１７歳の頃、ついに、自身の記憶にあるユーリの勇姿に近い、筋肉魔法を手に入れたのであった。

ＳＳ２　凛と弓兵の憂鬱

遠坂凛は、魔術師だ。
それも一流の。
五大元素使いという、希少な魔術師としての才能もあり、その能力は凄まじい。
十にもならない歳で、悲劇の運命により魔術師の家系である遠坂の家の家督を継ぎ、父と母を亡くし、そして養子に出された妹・桜と離ればなれでありながらも、父の教えを守って、魔術師として己を律し、魔術師として己を磨き続けてきた。
そんな彼女であるが……最近、これまでの己を価値観をひっくり返すどころか、ひっくり返しすぎて捻れまくりそうな輩に出くわすこととなった。
高校生になり、同級生となったひとり男子……、衛宮士郎。
小中高と同じ学校に行っていた学生は知らぬ者はいないというほどの、筋肉バカだ。
しかし、単なる筋肉好きのバカではない。
彼は、なんと魔術師でもあるのだ。

自称、筋肉魔法だと言う常識を越える筋肉には、明らかに魔力がある。それは、遠坂ほどの魔術師でなければ分からない微々たる程度であり、変人と関わりたくない凛としては、本当は関わりたくなかったが、放っておくわけにもいかなかった。

なぜなら……。

「先輩。手作りドリンクの新作です。」

「ありがとな、桜。うん、美味い。腕あげたか？」

「ありがとうございます！　これで、いつでも先輩のお嫁さんになれますよね…？」

「ああ、もちろんだ。」

「先輩…。」

「桜…。」

「だあああああああああああああ!!」

「おう、遠坂。おはよう。今日も元気だな。」

そう、この衛宮士郎。凛の妹である間桐桜と恋人同士なのだ。

知った当初は、なぜ!?　どうして!?　なぜそうなった!?っと、士郎に掴みかかって揺さぶったものだ。

小中が凛と違う桜であるが、その引っ込み思案な性格故に虐められていたところを、士郎に助けられ、また料理を教えて貰うなどして仲を深めたらしい。

事情を聞いたところで、許せるわけがない凛は、あろうことか士郎に勝負を挑んだ。
士郎は、魔術師だ。自分も魔術師だ。だから魔術で戦うことになった。
そして、半ば殺す気で自慢の宝石魔術を使ったものの……。
「おお！　いい一撃だったぜ、もっと来いよ！」
っと、なけなしの宝石による攻撃をあり得ないほど膨張させた筋肉で防いだのだ。
しかも無傷。
なけなしの貯金で手に入れた宝石を失った凛は、怒りのままガンドを放ちまくったが、これも無傷で防がれてしまった。
「なあ、遠坂。さっきの一撃の方がいいぜ。もっとやれよ。」
つまらなさそうに言われ、凛は、魔力切れで膝をついたのだった。
こうして、凛は、士郎に敗北した。
凛は、これまでいかなる状況でも優位に立ち続けてきた。
あかい悪魔などという同級生からの呼び名通り、勝つためならどんなことでもやってきた。
だが、士郎にはまったく勝てない。自分の命に等しい自慢の魔術を、筋肉魔法なる非常識でことごとく防がれ、心が折れてしまった……。
こんな屈辱を受けて黙っている凛ではない。

それ以来、凛は、ことあるごとに士郎に突っかかり、暇さえあれば勝負を挑んだりもした。

しかし、結果はいつも惨敗……。

士郎の筋肉魔法を前に打ち砕かれた。

しかし、転機は訪れる。

それは、第五次聖杯戦争の開催であった。

数多の強力な英霊を召喚し、戦い抜き、そして万能な願いを叶える聖杯を手に入れる戦い。

凛にとっては、このうえない機会だった。

これならば、士郎に勝てると！　そして遠坂の悲願である、根源へ至り、平行世界へ通じる強大な魔法を手に入れられると。

そして、儀式を行うのだが…、うっかりという父・時臣からのいらん属性を色濃く受け継いでいた凛は、うっかりをやらかし、召喚予定だったセイバークラスのサーヴァントではなく、アーチャークラスの謎の英霊を喚ぶに至った。

言うことを聞かない彼に、業を煮やした凛は、三回しか使えない貴重な令呪を、一回使ってアーチャーを従わせた。結果、アーチャーは凛を認めた。

「アーチャー、私…どうしても倒したい敵がいるの。」

「ほう？　どんな奴だ？」
「一言で言えば…、筋肉バカよ。」
「きんに…？」
「よりもよって私の同級生なんだけど…、衛宮士郎っていうのよ。」
「!?」
「？　どうしたの？」
「いや、なんでもない…。しかし、単なる同級生というわけではあるまい？」
「そうね。何しろ、ああ見えて魔術師なのよ。」
「そうか…。」
「ただの魔術師だったなら、どんなによかったか!!」
「凛？」
「聞いてよ、もう!!」
凛は、アーチャーの胸をポカポカと叩きながら、これまでの敗戦歴を語った。
凛の愚痴を聞きながら、アーチャーは…思った。

それは、自分が知る衛宮士郎なのかと…。

アーチャーは、凛に悟られぬようそう考えつつ、落ち着いた凛と共に、最初の聖杯戦争の戦いに赴いた。

そして、アーチャーは、凛の言っていたことが現実であること、そして自分が知る衛宮士郎とは、だいぶ……かけ離れた存在となっていることを目の当たりにする。

「危なかった…。この鍛え抜いた大胸筋がなかったら、心臓一発だった……。」

「大胸筋、鍛えたぐらいで俺の槍を防げるかよ!!」

ランサーの叫びは正論だ。

気合いと共にありえないほど膨張し、上半身の服を軽く破った鋼のような筋肉。

必ず敵の心臓を穿つとされるランサーのゲイボルグを、その胸板（大胸筋）で簡単に防いだ士郎。

「気にしちゃダメよ、ランサー…。アイツの筋肉は非常識だから。」

アーチャーは、凛のその言葉を聞きながら、めまいを覚え、そのまま意識を手放したのだった。

ＳＳ３　槍兵の殺（や）る気

因果を逆転させる呪いの槍。
その名は、ゲイボルク。
死という結果を導くため、あらゆる事象をねじ曲げる魔槍だ。
なのだが……。

「悪いな坊主！　死んで貰うぜ！」
ゲイボルクの持ち主であるランサークラスこと、クー・フーリンがその赤き槍を、衛宮士郎に突き出した。
しかし。
「ふんっ！」
ガキンっ！
瞬間。上半身の服が破れるほど膨張した筋肉が、心臓めがけて突き出された槍の先端を弾いた。

「なっ!?」
「危なかった…。この鍛え抜いた大胸筋がなかったら、心臓一発だった……。」
「大胸筋、鍛えたぐらいで俺の槍を防げるかよ!!」
たまらずツッコミを入れてしまった。
槍を握っていた手が、ジーンッとちょっと痺れている。それだけで、あの士郎の筋肉の強度が分かる。そしてイヤでもこれが現実なのだと知らしめる。信じたくないが、現実だ。もう一度言う…現実だ。
ゲイボルクは、必ず、心臓を穿つという呪いを持つ槍だ。もう一度言う、〝必ず、心臓を穿つ呪いを持つ槍〟だ。
そんな伝説のある槍を大胸筋だけで防いだのだ。
「おーい、そこにいるの遠坂だよな?　これ、どういうことだ?」
「えっと…、その…。って、アーチャー!?　なに、倒れてんの!?」
慌てる凛の横では、アーチャーがうつ伏せで倒れていた。別に攻撃されて倒れたのではない。めまいを起こして自分で倒れたのだ。
「はあっ!」
「っ、フンっ!!」
再度ランサーが槍を突き出し、士郎の心臓を狙ったが、気づいた士郎が再度気合い

を入れて槍を防いだ。
「つきしょう…！　なんつー硬さだ!?　おまえ、英霊か？」
「なんでさ？　人間だけど？」
「嘘吐け。」
　否定する士郎を、逆にランサーが否定した。
「ホントに人間だって。なあ、遠坂。」
「アーチャー！　ちょっと、起きなさいよぉ！」
「おーい…。」
「すげぇな、坊主。…例え人間だとしても、その筋肉はどうしたよ？」
「鍛えたんだ！」
「鍛え…。それだけか？」
「ああ。」
「嘘吐け。」
「本当だ。」
「……マジか？」
「マジだ。」
「フーーーーン…、そうか…そうか。」

「なにさ?」
「それなら、俺を楽しませてくれよ!」
　ランサーが槍を構えて切っ先を士郎に向けた。
「なんだなんだ?」
「お前の筋肉と俺の槍…、勝負と行こうぜ!」
「はっ?　…まあ、いいけど。でも、おまえ強いのか?」
「あったり前よ!　クランの猛犬たる、このクー・フーリン!　押して参る!!」
「なっ!　クー・フーリン!?」
「行くぜ、坊主!」
「うりゃ。」
　バチンッ
「んぎゃっ!!」
　槍を手に士郎に襲いかかったランサーだったが…、デコピン一発で弾き飛ばされ、何度もバウンドして倒れた。
「クー・フーリンったって…、こんなやせっぽちなはずないよなぁ……。自称か?」
　尻を突き出す形でうつ伏せで倒れているランサーと、アーチャーを起こそうと揺さぶっている遠坂を残し、士郎は鞄を担いで帰ったのだった。

その頃には、膨張していた筋肉は元の大きさに戻っていた。

＊＊＊

士郎は、誰もいない家の玄関の電気を付けて、ただいまーっと言って靴を脱ぎ、家に上がった。

そして、晩ご飯は何にしようかな～っと、暢気に独り言を呟きながら家の中を歩いていると、ふいに立ち止まった。

「！　ーーふんっ！」

「チッ!!」

背後から槍を突かれたが、背筋に力を入れて防いだ。

「おまえ！」

「背中からでもダメか…。」

「土足で上がるな！」

「ツッコミどころそこかよ!?」

ランサーが思わずそうツッコミ返した。
「何しに来た!?」
「俺と勝負しやがれ、坊主!」
「もう勝負はついただろ!」
「リベンジだ!」
「そうか…。なら、納得するまで戦ってやる、表出ろ!」
「おう!」
二人は、表に出た。
そして、戦いが始まった。
ランサーが、その機動性を生かして槍を連続で突き出す。
それを士郎は、すべて避ける。
「おめぇ…、パワーだけじゃないのか…!　すげぇな!　ほんとすげぇ!」
「どういたしまして!」
「オラオラ!　避けてばっかじゃ終わらないぞ!」
「おらぁ!」
「あぶねっ!」
突きのような蹴りが来たので、ランサーは、間一髪で避けた。

その瞬間だった。

カッと光が発生し、そこに一人の美しい少女が現れた。

「ーーー問おう。貴方が私のマス…。」

「ほげぇ!!」

「俺の勝ちだ。」

発生した光で一瞬止まったランサーが、再び士郎のデコピン一発で吹っ飛びバウンドして倒れた。

「……えっ?」

「誰だ?」

「あの…、これは?」

「何って…、俺に挑んできたやつを撃退しただけだけど?」

M字に足を開脚状態で倒れているランサーを指さし、士郎がそう言った。

「! サーヴァント! 下がってください。」

「いや…、もう倒したから…。それより、君は?」

「あ…、私のことはセイバーと…。」

「じゃあ、セイバー。今、サーヴァントって言ったけど、アイツのこと…。あれ?」

「逃げましたね。」

ふと見ると、ランサーの姿が消えていた。
「ま、いっか。」
「!?」
セイバーは、縮んでいった士郎の筋肉を見て驚いた。
「どうした?」
「あの…失礼ですが、貴方は…、何者なのですか?」
「俺?　俺は衛宮士郎。筋肉魔法の使い手だ。」
「きんにくまほう?」
「っと言っても、まだまだ修行中なんだけどな。ユーリ兄ちゃんには、まだまだ届かない。」
「はあ…。」
セイバーは、どう反応すれば良いのか分からず困ったのだった。
セイバーは、知らない。これから自分の身に降りかかる、筋肉という名の理不尽に……。

ＳＳ４　士郎と聖杯戦争

セイバーを居間に通し、お茶を出した士郎。
そしてセイバーから、サーヴァントのことを聞いた。
「なるほど、サーヴァントってのは、英霊ってやつで、それを使役するのがマスターってわけか。」
「そうです。私は、貴方の呼びかけに答えて参じました。」
「俺、喚んだ覚えは無いんだけどな…。」
「しかし、実際に喚ばれたので…。」
「それで、聖杯っていう、なんでも叶えてくれるモノを巡って、戦う。そういう戦争か。」
「大まかに言えばそうです。」
「ふ～ん…。」
士郎は、ずず…っと茶をすすった。
「あの……。シロウ殿。」

「なに？　シロウでいいぜ。」
「興味は無いのですか？」
「なんていうか…、漠然としてるなって思って。なんか現実味が無いって言うか。」
「しかし、貴方は魔術師でしょう？　こういう超常的なことには…。」
「俺が使うのは、筋肉魔法だ。」
「あのとてつもない筋肉ですね。あれも一種の魔術なのですか？」
「いや、違う。」
「えっ？」
「筋肉魔法は、筋肉魔法だ。」
「は、…はあ。」
ムキッと腕の握りこぶしを見せる士郎に、セイバーは少し困惑した。
茶をすすっていた士郎だが、ふいに顔をしかめた。
「どうしました？」
「誰か来る。さっきの奴と、セイバーに似た気配だ。」
「！　サーヴァント!?」
「ごめんくださーい。」
その声が玄関から聞こえた。

「なんだ、遠坂か。」
「いえ…、あと一人…、これはサーヴァントの気配です。」
「いま出る。」
「あ、シロウ、いけません！」
セイバーを無視して、玄関に行く士郎を、セイバーが慌てて追いかけた。
そして、凛と、アーチャーを士郎が家に上げた。
「あー……、悪い予感が当たったわ…。」
凛がセイバーを見て頭を押さえた。
「まさかあんたが最後のマスターになるとはね…。」
「さっきセイバーから聞いたけど、遠坂も聖杯戦争に？」
「ええ。こっちにいるのが、私のサーヴァントのアーチャーよ。」
「……さっきから、俺のことすげー睨んでるけど？」
「ちょっと、アーチャー、私達は戦いに来たんじゃないのよ。」
「ああ…。」
「それで、なんだ？　戦いに来たのか？」
「さっき言ったでしょ？　戦いに来たんじゃないの。ただの確認よ。」
「俺さ、別に喚んでもいないのに、セイバーを喚んじまったよ。どうしたらいい？」

「呆れた…。あんたってば、どこまでもデタラメね…。」
「それがどうしたんだよ?」
「ほんと、筋肉バカ!　事の重大さをまったく理解してない!」
「えっ?」
「あんたは、この聖杯戦争っていう、魔術師同士の殺し合いに巻き込まれてんのよ!」
「はあ…。」
「あーーー!　なんであんたみたいなのが、セイバーを引き当てちゃったのよ!」
「そこまで欲しいもんなのか?」
「欲しいに決まってるじゃない!　セイバークラスは、最優のサーヴァントなのよ!」
「そっか…。どうするセイバー?　お前、俺といても仕方ないだろ?　遠坂のところに行けよ。」
「な…、シロウ!」
「ちょっと、そんな簡単に投げ出す!?　あんた分かってるの?」
「だって、俺、別に聖杯なんて欲しくないし…、殺し合いなんてしたくないし…。」
「あっきれた…。そうはいかないのよ。」
「?」
「いまから出るわよ。」

「はっ？」
「ほら、セイバーも連れて行くわよ。」
「どこに？」
「言峰教会よ。丘の上のね。」

＊＊＊

そして、やってきました、教会。
「綺礼。いるでしょう？　7人目のマスターを連れてきたわ。」
「おお…、そうか。」
そして現れた神父。
途端、士郎は身構えた。
「どうしたのかね？　そんな身構えて…。」
「あなた…。」
「ちょっと、士郎！」

「相当、強いですね？」
「ほう？」
「ちょっと、待って、待って！　あんた殺し合いなんてしたくないって言ってたじゃない!?」
「殺しはイヤだが、喧嘩は嫌いじゃない。単なる力比べの試合ならなおさらな。」
「ふむ…。君はその年にしては、相当な手練れとみた。機会があれば一試合ぐらいしてやってもいいが…、いまは…、用事を済ませるべきではないかね？」
「そうよ。お願いだから落ち着いて。」
「分かった。いつかお願いします。」
「では、用件を言いたまえ。」
　そして凛が、綺礼に説明した。
「ふむ…。君は、マスターであることを放棄したいということかね？　衛宮士郎くん。」
「なったつもりがそもそもないからな…。」
「君は、聖杯で叶えたい願いは、何もないと？」
「……そうだな。なにも……。あっ。」
「どうした？」

「あのさ…。聖杯って、この世界にはいない人に会いに行くってこと出来るのか？」
「ほう？　それはつまり…？」
「俺、会いたい人がいるんだ。でも、この世界にはいないんだ。だから、諦めてた…。」
「だが、聖杯を手に入れれば…それも叶うだろう。」
「士郎…、あんた…。」
「遠坂、悪い。聖杯が欲しくないって言ったのは取り消すよ。」
「そう……。分かったわ。なら…。」
「ああ。悪いな。」
「では、決まりだ。君達はこれより先、敵同士となる。せいぜい頑張りたまえ。」
綺礼はそう言い残し教会の奥へ去って行った。

＊＊＊

教会の外で待っていたセイバーとアーチャーのところに、二人が戻ってきた。
「セイバー。」

「はい。シロウ。」
「悪いな…。俺、聖杯が欲しくなった。」
「！」
「どうしても、会いたい人がいるんだ。でも、この世界にはいないんだ。だから…。」
「戦うのですね？」
「ああ。」
「では、ここに誓いを…立てます。」
「いや、そんな堅苦しいことはいい。とにかく、この聖杯戦争だけの間だけど、よろしくな。」
「はい、マスター！」
士郎が差し出した手を、セイバーは顔を輝かせて握った。

こうして、衛宮士郎は、聖杯戦争に参加することを決めた。

登場人物設定（変更あり）

◇登場人物設定

・衛宮士郎

主人公。高校生。

七歳くらいの時に起こった冬木の大災害を生き残り、衛宮切嗣の養子となった少年。

切嗣に発見される前に、謎の時空転移でユーリとフィーリアに出会い、ユーリの筋肉魔法に憧れ、魅了され、自身も鍛えて筋肉魔法を身につけた魔術師。

常識はあるが、マイペースで、筋肉魔法の異常性には極端に疎い。

普段は、原作よりちょっと骨太ぐらいの体格だが、リミッター解除をすると途端にユーリばりに筋肉を膨張させられる。

ユーリと違い、生まれつき魔術師としての才能である、魔術回路があるため、本人は知らず知らずのうちに筋肉魔法に魔力が付与された状態で発動している。そのため、神秘の攻撃しか通じないサーヴァントに対して筋肉魔法が通じる、またその攻撃を逆に防ぐことも可能。

武器は使えんことはないが、肉弾戦の方が得意。なお、部活動は弓道ではなく、筋肉同好会という同好会を独自に作っている。

・間桐桜
ヒロイン。高校生。
士郎とは、先輩後輩であり、恋人同士。
筋肉フェチではないが、士郎の全てが好き。

・セイバー
士郎のサーヴァント。苦労人。
ランサーと戦っていた士郎の気合いに呼応した鞘で、うっかり呼ばれてしまった大英霊。
ことごとく戦う機会と見せ場を士郎に取られるため、自分がいる意味の無さに悩むことになる……。
唯一の楽しみは、士郎のご飯。

・遠坂凛
高校生。苦労人。
遠坂家の家督の魔術師。
筋肉魔法に染まる士郎を見ていられず、弟子になるよう誘うもずっと断られ続けている。
なお、自慢の宝石魔法を筋肉魔法で防がれてしまっており、一方的に因縁を持っている。

・アーチャー
凛のサーヴァント。苦労人。
その正体は、未来の衛宮士郎だが、自分が来た時間軸の士郎と自分との違いようにめまいを感じて倒れたほど。
そして自分が未来の士郎であることは、サーヴァントとして死ぬまで隠し通したいと考えている。同一人物だと知れて、筋肉強化に付き合わされる可能性が高いのと、一

緒にされるのがイヤなので。

・ランサー

士郎を殺そうとしたサーヴァント。

必ず心臓を穿つ槍・ゲイボルクを持つが、士郎の大胸筋で防がれてしまった。

しかし、それで火が付いて、絶対殺すと息巻いて士郎に挑み続ける。その都度デコピンで撃退されている。

・バーサーカー

イリヤのサーヴァント。

十二回殺さないと死なない体で、なおかつ一度通った攻撃に対して耐性が出来る性質であるため、士郎からは、筋肉魔法をより強いものへと昇華するため戦いに付き合わされる。

・ユーリ
『魔法？そんなことより筋肉だ！』の主人公。
士郎の起源（オリジン）にして、元凶。

・
・
・

※話が増えると、増えたり変更したりします。

ＳＳ５　イリヤちゃんとバーサーカーさん

教会をあとにし、帰る途中だった。
「もう、帰っちゃうの？」
「ん？」
可愛らしい少女の声が聞こえてそちらを見ると、美しい美少女がいた。
ロシアン帽を被っており、どこか異国情緒を感じさせる格好で、小柄だ。
「君、こんな夜更けに一人じゃ危ないぞ。」
「あら？　心配してくれてるの？」
すると、少女は、長いコートの両端を両手で摘まみあげ、どこかの令嬢のような上品にお辞儀をした。
「はじめまして。私は、イリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンです。」
「な、なんですって!?」
「知ってるのか、遠坂？」
「アインツベルンって言ったら、聖杯の入手を宿願とする魔術師の家系。毎回この戦

いにマスターを送り込んできている奴らよ。」
「へ～。じゃあ、この子が今回のマスターってことか。」
「そうだよ。お兄ちゃん。だけどね…、わたし、聖杯より楽しみにしていたことがあるの。それはね……。お兄ちゃんを殺すこと。」
イリヤが無邪気に恐ろしいことを言った。
「俺を？　どうしてだ？　君とは初対面のはずだ。」
「そうだね。私が一方的に知ってるだけだもんね。悪いけど、私この日を本当に待ち焦がれてたの。だから…念入りに殺してあげる！　おいで、バーサーカー！」
次の瞬間、イリヤの背後に大きな人影が現れた。
「なっ！」
それは、巨人のごとき筋肉と巨体を持つサーヴァントだった。
「ふふ。驚いた？　ボーッとしてるとすぐ…、バーサーカー？」
「ふ……ふふふふ。」
「？　お兄ちゃん？　何がおかしいの？」
「こいつは……、とんでもない強敵だぜ！　あんた、俺が言うのも何だが、すごい英雄だろ？」
「ええ。そうよ。」

「なんで、君が答えるんだ？」
「バーサーカーはね。狂化で、言語が喋れないのよ。」
「なるほど…。その強者の力！　ぜひ！　俺にぶつけてくれないか！」
次の瞬間、士郎は自身のリミッターを解除した。筋肉がありえないほど膨張し上半身の服が破れる。
「！　すごい……。」
一瞬驚いて目を見開いたイリヤだったが、すぐに感動したように声を漏らした。
「ちょ、ちょっと、士郎!?」
「ダメです、相手は…！」
「行け、バーサーカー！　お望み通り相手をしてあげなさい！」
イリヤの命を受け、バーサーカーが咆吼し、突撃してきた。
セイバーが剣を抜いて構えるよりも早く、士郎が動き、振り下ろされる斧剣を回避して懐に飛び込み、バーサーカーの腹にタックルをかました。
バーサーカーの巨体がわずかに浮き、後ろに飛んだ。
体制を整えたバーサーカーが再度、斧剣を振り下ろした。
「はあああ!!」
士郎が右手の拳に気合いを込めて振ると、斧剣が砕け、そのまま右手の拳がバー

サーカーの顔にめり込み、吹っ飛んでいった。
「ば…、バーサーカー!!」
「っっ、てぇーー、ちょっと切れた。斬れ味悪くないんだな、見た目に反して。」
「ちょっと切れただけですまないわよ、普通は!!」
プラプラとちょっと表面が切れて、流血している右手をプラプラさせる士郎に、凛がツッコミを入れた。
少し間を置いて、バーサーカーがムクリッと起き上がった。それと同時に根元近くまで砕けていた斧剣が元通りに治った。
「あれ？　なんで直るんだ？」
「あれは、おそらく宝具です！」
「あー、なるほど、セイバーの剣と同じか。どうりで、斬れ味半端ないわけだ。」
「いやいやいやいや！　その斬れ味で、ちょっとだけの怪我ですませてる、あんたがおかしいのよ!!」
「シロウ！　下がってください！　ここは私が！」
「いいや！　これは、俺の挑戦なんだ！　おまえが下がれ、セイバー！」
「うっ…。」
その瞬間令呪が発動してしまい、セイバーが後ろへ飛び退いた。

士郎は、セイバーが下がるやいなや、再び突撃してきたバーサーカーと衝突した。
「おおおおおおおおお!!」
バーサーカーが斧剣を捨て、素手で士郎とやり合う。大きさの違う拳がぶつかり、時に殴り、殴り返し、いつ終わるか分からない喧嘩だった。
「すごい…、すごい、すごいすごーい！　お兄ちゃん、すごいんだね！　私のバーサーカーと真っ正面から戦えるなんて！　…気が変わったわ。バーサーカー。引きましょう。」
「えっ？　あ、ちょっ、ま…。」
バーサーカーが急に止まり、イリヤの傍に行ってイリヤを抱き上げた。
「お兄ちゃんのこと見直した！　だから、殺さないでいてあげる。また、次会おうね！」
「待てよ！　まだ勝負は！」
「ごめんね…。さっき連絡が入ったの。帰ってきなさいって…。だから本当にごめんね。」
「…次…、また戦ってくれるのか？」
「もちろんよ。バーサーカーもいいよね？」
イリヤが聞くと、バーサーカーは、静かに頷いた。

「ありがとう、バーサーカー！」
「じゃあね、お兄ちゃん。」
士郎は、バーサーカーにお礼を言い、イリヤはバーサーカーと共に去って行った。
そして静寂がおとずれた。
「信じらんない……。」
「なにが？」
「真っ向からバーサーカーとかち合うなんて……、あんたいよいよ人間止めたわね…。」
「俺は人間だぜ？」
「あーーーー！　もう！　あんたに常識を求めた私が悪かったわ！　この非常識筋肉!!　あとついでに貴重令呪も使っちゃって……。もう！」
「はっ？」
「右手見なさいよ！　甲の方を！」
「あ…、ちょっと消えてる。」
「いい？　令呪は、三回までサーヴァントを絶対服従させられるマスターの特権なの。それが全部無くなったら、それで終わり。サーヴァントとの繋がりが無くなって、聖杯戦争から脱落よ。」

「なんでそれを早く言わないんだよ！」
「あんたが勝手に使っちゃったんじゃない！」
「使った覚えはない！」
「いいえ…、無意識ですが使ってしまいました。自分が相手をするから、下がれと。」
「そんなことでもかよ。」
「普通はね…。サーヴァント同士の戦いは、サーヴァントに任せるの。それをマスター自身が前に出て戦うなんてあり得ないのよ。聖杯が欲しいなら気をつけなさい。」
「…でも。」
「でももだってもじゃないわ！　これは、魔術師が英霊を使ってやる戦いなのよ。」
「けど、俺…、アイツ（バーサーカー）とはもっと戦いたい！　筋肉魔法を極めるためにも！」
「……もう、勝手にしなさい。」
士郎が話を聞かないと理解した凛は、ため息と共にそう言って手を振った。
「私では、力不足なのか……。」
セイバーがひっそりと項垂れていた。
「いやいや、別にセイバーに頼ってないわけじゃないぞ？　けど、これから先、バーサーカーとは俺が戦うからさ。ところで、さっきから遠坂のとこのアーチャーって奴

が、俺を狙ってるんだけど？」
「えっ？　あ、ほんとだ！　アーチャー!!」

「な……なぜ気づいたんだ？」
離れたビルの上にいたアーチャーが驚いて手にしていた弓矢を下ろした。
殺気は隠していた。だが気づかれた。
その理由について士郎は……。
「目も鍛えているからな!!」
っと、言った。（※実際、目にも筋肉はある。まぶた、外眼筋、内眼筋など）
「こ、この…非常識筋肉バカ…。」
凛が、クッ…と余所を見て泣いた。

ＳＳ６　士郎と壊れた日常

「おらぁ、行くぜ坊主！」
「えい。」
「ゴヘ!?」
ランサーが、士郎のデコピン一発で吹っ飛んでバウンドして倒れた。
ぷしゅ～っという感じで、額から煙を出して白目を剥いて倒れているランサー。
「もう、お前の動きは見切ったっての。これで三回目だぞ？　いい加減諦めろよな。」
「三回も…？」
「ああ、コレ（デコピン）で。」
ランサーが倒れたので筋肉を収縮させながら、士郎は自分の指をセイバーに見せた。
「…普通の人間なら死んでますよ。この指力（ゆびぢから）は…。」
「そうだな。ランサーって、英霊だろ？」
「そうですが…。しかしこの力で何度もやられてなおシロウに挑むとは…。」

「けど、ランサーにしてもアーチャーにしても、英霊って、あんなやせっぽちばっかなのか？　バーサーカーが特殊だったのか？」
「！　シロウ…、確かに私は女の身です…。ですが…。」
「あ、すまん。傷つけるつもりはなかったんだ。ごめん。」
　英霊が貧弱だと言われ、ショックを受けたセイバーがチワワみたいにプルプル震えながら言うので、士郎は慌てて謝った。
「先輩。おはようございます。」
「おう、おはよう。桜。」
「あれ？　先輩その人…。それに…そこで倒れてる人…。」
「あーあー、気にすんな。倒れてる方は放っておいていいからな。」
「いいんですか？」
「いいんだよ。」
「先輩がそういうなら…。」
「あの、シロウ…。」
「あ、セイバー、紹介するよ。俺の恋人の桜だ。」
「ま、間桐桜です。」
　士郎の紹介を受け、セイバーに向けて桜が慌てて背筋を伸ばしペコリッと頭を下げ

た。
「初めまして。セイバーとお呼びください。」
「せいばー…さん？」
「ああ、ちょっと色々とあってな。」
「……先輩。」
「だいじょうぶだ、桜。俺はだいじょうぶだから。」
そう言って微笑みを浮かべた士郎は、桜の頭を撫でた。
桜は何か言いかけ、思い詰めたように黙った。
「桜？」
「あ…、な、なんでもないです。それより、遅刻するので早く行きましょう。」
「ああ、そうだな。セイバー行ってくるよ。」
「あの、本当に護衛は必要ないのですか？」
「お前、霊体化できないんだろ？　甲冑姿で来ても悪目立ちするだけだし、来ちゃダメだ。」
「…分かりました。」
セイバーは、納得できない顔をしていたが、仕方がないという風にそう言ったのだった。

＊＊＊

学校に行く。教室に入ると、いつもの日常だ。
今、冬木市を舞台に聖杯戦争なる非現実的な戦いが行われているを誰も知らない。
一部を抜いて……。
「よお、遠坂、おはよう。」
鞄を机に置いてから、廊下を歩いてると凛に会ったのでいつも通り挨拶をした。
だが凛は、キッと睨んできただけでそのまま踵を返し、去って行った。
「俺なんかしたっけ？」
心当たりない士郎だった。
「あっ。」
すぐに思い当たったのが、聖杯戦争のことだ。
言峰綺礼からは、お互いに敵同士だと言われた。凛も凛で、聖杯を求めているのだ。
士郎が聖杯を求めているように…。だから馴れ合う気はないのだろう。

「それはそれで寂しいな…。」
　いつもの日常と思っていた日常も、裏で行われていることのせいで変わってしまった。それが酷く寂しかった。
　すると、そこへ。
「やあ、衛宮。」
「なんだ、慎二か。おはよう。」
「おはよう。やれやれ、君は暇でいいね。」
　間桐慎二。桜の兄である。
　っと言っても血は繋がっていないらしい。
「弓道部なんだろ？　朝練は？」
「聞いてなかったのか？　このところ頻発している殺人事件とかのせいで、部活動の時間が短縮されたんだよ。」
「そうなのか。」
「なあ。今日も弓道場の掃除頼むよ。いいだろ？　どうせお前の筋肉同好会という同好会、桜以外に誰もいないんだし…。」
「なあ、慎二。いい加減人を使わず自分でやれよな？」
「なんだよ？　友達の頼みが聞けないってのか？」

「いや、基礎からちゃんとできない奴がさ…。上にいけるわけないだろって思って。」
「なっ！」
「副部長になれなかったんだろ？　ちゃんと基礎をだな…。」
「う、うるさい!!　お前、部外者のくせに言うんじゃない！」
「じゃあ、自分で掃除やれよ。」
「あっ、おい！」
士郎は、チャイムが鳴ったので教室に入っていった。
残された慎二は、舌打ちした。

＊＊＊

そして、放課後。
「はあ～～～。」
「先輩。気を落とさないでください。」
「桜…。お前だけだ…、俺のことをこんなに想ってくれるのは…。」

「そんな…だ、だって…私は…。」
「嫌な顔せず、この同好会のマネージャーやってくれるなんて、こんな良い子、他にいないぜ？」
「周りの人が先輩の良さを分かっていないんですよ。きっと。」
「こんな筋肉バカって言われている俺に付き合ってくれるなんて…、俺は幸せ者だ。」
「先輩…。」
「桜…。」
「あーーーー！　はいはい、今日も絶好調ね、この筋肉バカ!!」
　士郎と桜の顔が近づいた直後、ドカーンっと、空き教室の戸が開かれて、凛が入って来た。
「おう、遠坂。まだいたのか？」
「それはこっちの台詞よ！　あんたらも早く帰りなさいよ。」
「そうだな。桜、帰ろうか。」
「はい、先輩。」
「ちょっと、待ちなさい。士郎をちょっと借りるわよ。」
「えっ？」
「えっ、あ…！」

凛が士郎の腕を掴んで引っ張っていった。桜は一人取り残された。
「あっきれた！　サーヴァントも連れずに、休みもせずに来るなんて…。」
「セイバーを連れてこれるわけないだろ？　それに急に休んだらそれこそ不自然だし…。」
「あのね…士郎…。」
「遠坂。分かってる。俺とお前は敵同士だ。」
「なんだ…分かってるんじゃない。だったら、……ここで退場しなさい。」
「悪いが…、そうはいかないぜ！」
腕に魔術の模様を浮かばせた凛が、魔力の弾丸を放ってきた。士郎はそれを筋肉を膨張させて防ぐ。
「悪いけど！　死ぬつもりでいなさい！」
「桜を残して逝けるかってんだ！　それに俺は、生きて聖杯を手に入れて、願いを叶えるんだ！」
「だったら、避けるぐらいしなさいよ！」
士郎は流れ弾もすべて身体で受け止めていた。
「それだと学校が壊れるだろうが！　税金が無駄になる！」
「民税を気にしてる場合じゃないでしょ!?」

「先輩！」
「桜！　来るな！」
　その時、グニャリッと空間が歪んだ気がした。
「これは…！」
「ッ…どうやら、この学校に結界を張った奴がいるみたいね。」
「結界…、しかもなんだこれ…、まるで身体が溶けるような…。」
「うっ…。」
「桜！」
「桜、魔力を全身に巡らせるのよ。」
「…で、できない……。」
「っ…、間桐は何をやってるのよ！」
「桜…、桜、ちょっと我慢してろよ…。すぐにこの結界をぶっ壊してくるからな！」
「はい…。」
　桜は、士郎に安心したように微笑み、意識を失った。
　士郎は、桜を床に寝かせると、走り出した。
「私達も、行くわよ。」
　凛の後ろにアーチャーが現れ、士郎とは逆方向の、屋上へと向かった。

ＳＳ７　結界、破壊！

士郎は、走っていた。
しかし、ただ闇雲に走っているのではない。
「結界の中心……、匂いが濃くなってきたぞ！」
なんと、嗅覚で結界の中心を辿っていたのだ。
まあ、もっとも士郎はそれだけを頼りにはしていない。士郎には、物の本質を解析するずば抜けた能力がある。それは生まれついてのものだった。
ゆえに、匂いなどただの確認に過ぎない。
そして……。
「ここだ…。」
そこは、学校の敷地の中の林の中。
「驚きました……。」
妖艶な女性の声が聞こえた。
「誰だ！」

「貴方には、この基点が分かるのですね。」
「ああ…。ここから匂うからな。この結界の中心だって、匂いが。」
「におい？　ずぶんと変わっていますね。」
　すると、木の陰から長身の女性が現れた。
　目を奇妙なベルトのようなものでを覆った、美しい妖艶な肢体を持つ女性だった。
「おまえが、この結界を作ったサーヴァントだな?」
「そういう貴方は、マスターなのですね？　この基点を見つけられるのも頷ける。」
「いますぐこの結界を解け。じゃないと……。」
「じゃないと？　このライダーたる、私をどうこうできるとでも?」
「ふんっ!!」
「!?」
　次の瞬間、士郎は自らの筋肉を膨張させた。
「はあああああ!!」
　そして気合いと共に、地面を殴った。
　その瞬間、ビシッと音を立てて結界が割れ始めた。
「なっ!?」
「ここが中心と分かれば…、そしてここに本体のお前がいれば、この程度容易い!!」

「馬鹿な…。こんな力業で、我が『ブラッドフォート・アンドロメダ（他者封印・鮮血の神殿）』を破壊するなんて!?　うぐっ！」
「そして、結界を強引に破壊した反動は、本体のお前に行く！」
「う、ぐぁぁぁぁあ!!」
バチバチと、暴走する魔力に妖艶なサーヴァント、ライダーが膝をついた。
「シロウ！」
「士郎！」
そこへ、セイバーと凛が駆けつけてきた。
「ぐぅぅぅぅ！　……侮りました。今回は、私の負けです。」
ニヤッと笑ったライダーが高く跳躍し、木から木へ跳んで逃げた。
「あっ、待ちなさい！」
「深追いしなくていい。」
「しかし！」
「それより、桜が心配だ…。っ!?」
次の瞬間、アーチャーが剣を振るってきた。
「ふんっ！」
「っ！」

剣を背筋で弾かれ、アーチャーは、手が痺れた。
「どういうつもりだ？　遠坂？」
「わ、私じゃないわよ！　何をやってるのよ、アーチャー！」
「……チッ。」
「殺気がダダ漏れだぞ？」
「ふん…。敵に背中を易々と見せぬ事だな。」
「ああ。そうだな。」
士郎はそう言いつつ、アーチャーからの睨みを感じながら筋肉を収縮させた。

＊＊＊

学校をあとにし、とりあえず桜を士郎の家に運んで寝かせた。
「桜…。水、いるか？」
「ありがとうございます…、先輩。」
「しかし…、まさか魔力の魔の字も操れないだなんてね…。」

「ごめんなさい…。」
「桜。あなた間桐の家で何も教わっていないの？」
「それは……。」
「遠坂。今、桜は体調が悪いんだ。責めないでやってくれ。」
「…まったく。いい？　私はね、あんた達の仲…、認めたわけじゃないからね！」
凛はそう言って出て行った。
「ごめんなさい、先輩…。」
「いいんだ。桜。あんなこと……話せるわけないだろ？」
士郎はそう言って桜の頭を撫でた。
桜は気持ちよさそうに目を細めた。
「でも…、いつか…伝えなきゃ…。」
「その時は、俺も一緒だからな。」
「はい…。」
それは、桜と士郎の間の秘密。凛も知らないことだ。
二人を結びつける絆は、虐めから桜を救い、そして料理を教え合うだけではないのだということを……。
いつか、凛に話して、二人の仲を認めて貰おう。そう誓い合ったのだ。

「ずっと、一緒だぞ。桜。」
「はい……!」
　すると、士郎が、ずいっと身を乗り出し、桜の顔に顔を近づけた。
　桜は目を閉じて、待った。
「士郎。悪いけど、これからの、……。」
「あ…。」
「み……、認めないわよおおおおお!!」
　凛が怒り爆発した。

＊＊＊

　そして居間。
　ムスッとした凛が士郎を睨んでいる。
「あの…、話を進めませんか?」
「そうね…。」

セイバーがそう言ったことで、表情をあらためた凛が、士郎を見て言った。
「士郎。私と同盟を組みなさい。」
「えっ？」
「聖杯戦争はね、駆け引きなのよ。時に同盟を組み、お互いに休戦する。そういうこともザラじゃないのよ。」
「どうして、俺なんだ？」
「あんな形で結界を破壊したんだもの…。ライダーとそのマスターがあんたを真っ先に狙うって考えられない？」
「そう、だな…。」
「だから、同盟を組むのよ。そしたら、私はあなたを守ってあげるわ。そして最終的にお互いが生き残ったら、その時は、聖杯を巡って戦えばいいわ。まあ…その過程でお互いにサーヴァントを失うって可能性もあるけどね。」
「断る。」
「そう、良い返事ね。……えっ？」
「シロウ。いいのですか？」
「俺は、俺の理由で聖杯が欲しいんだ。背後から剣で狙ってくるような相手とは同盟を組めない。もし、あの時、俺じゃなく、セイバーが首をはねられてたらどうだ？」

「それは…。」
「そうなれば俺は脱落者だ。その時点で聖杯の所有権を失うんだ。だから…、悪いな。遠坂。」
「……分かったわ。でも、それなら、私は遠慮なく、あんたを殺すわよ？　こっちには、アーチャーがいるんだからね。」
「分かってる。」
「じゃあ、話は以上よ。…じゃあね。」
そう言い残して、凛は帰って行った。
「よかったのですか？」
「ああ。」
「私もそれでいいと思いました。背後から狙う相手に背中を預けられません。」
「ありがとな。」
士郎はそう言って微笑んだ。

SS8　ライダーのマスター

凛が帰った後、士郎はセイバーから、ライダーが使った結界について聞いていた。
「おそらく、アレが、ライダーの宝具のひとつでしょう。」
「ほうぐって？」
「英霊とは、過去の英雄です。宝具とは、その武勇で使われた武器や、逸話です。」
「なるほど。例えば、セイバーは、剣とか？」
「はい。」
「けど、学校丸ごと飲み込むような宝具か……。あっ、そうか宝具が分かれば、サーヴァントの正体が分かって、攻略もしやすくなるってことか。」
「その通りです。自身の真名を知られること…、それは諸刃の剣です。」
「相手にとって脅威にもなるが、逆に対策を取られて負ける可能性もある。」
「そうです。」
「セイバーって何の英霊だ？　不可視の剣なんて聞いたことない…、イヤ違うな…隠してるんだな？」

「よく分かりましたね。その通りです。」
「剣を見ればそれだけで正体が分かるほどの有名どころか…。例えば、アーサー王とか？」
「そうです。」
「あっ。当てちまった…。」
「いいえ。いいのです。マスターは、サーヴァントを使う上でその性質と宝具を知っておく必要がありますので。」
「けど、アーサー王って男だったはずじゃ…。」
「史実ではそうでしょうが…、私の真名は、アルトリア・ペンドラゴン。生まれた時から女であり、男として性別を偽っていました。」
「は～。なるほどなぁ。遠坂の奴が必死になってたのも分かるわ。そんな有名どころの英霊なら喉から手が出るほど欲しいだろうな。」
　士郎は、納得したと頷いた。
「けど、今の問題は、ライダーだ。あんな宝具使えそうな英霊ってなんだ？」
「すみません…。心当たりはありません。」
「俺もない。」
　話は固着してしまった。

「もっと…他のヒントとなる宝具を使わせれば、分かるかもしれません。」
「ライダーを見つけないことには、意味ないだろ？」
「それは、そうですね…。」
そしてまたシーンっとなる。
「俺が囮になるか？」
「ダメです！　そんな危険なこと、できません！」
「だけど、このままじゃ埒があかないだろ？」
「あの……先輩。」
そこへ桜が入って来た。
「どうした、桜？　もう身体はだいじょうぶなのか？」
「はい…。あの、ライダーのことで、話が……。」
「桜？」
「桜…、あなた、初めから知っていたのですね？」
「！」
「ごめんなさい！」
桜が深く頭を下げた。
「…桜。そこに座って、話を聞かせてくれ。」

「はい…。」
桜が座り、話し始めた。
ライダーは、触媒もなしに召喚したサーヴァントであり、本来は自分がマスターであったことを。
「つまり、あなたがライダーのマスター？　本来は？　では、今は別の人間が？」
「はい…。」
「桜。だいじょうぶだ。俺は怒ってるわけじゃないんだ。怖がらせてごめんな。」
「先輩…。本当に…ごめんなさい！」
桜の目からポロポロと涙がこぼれ落ちた。
「……では、今はいったいが誰が？　それを教えてください。」
「……兄です。」
「慎二が？」
士郎は、あり得ないと思った。
なぜなら、慎二には、魔術の才能が無いからだ。それは、直感だ。
「いいえ。兄です。兄は、ある方法でマスターになりました。その方法を使えば、魔術の才能がなくても魔術を行使できるのです。」
「その方法って？」

「間桐には、魔術の書があります。その中に、偽臣の書という秘伝があって…、他者の契約下にある従僕を一時的に従わせることができるんです。しかも、それを使えばライダーの魔力を使って魔術を行使することも……。」

「なるほど……。つまり、慎二は、桜を生け贄にしてライダーを召喚させて、この聖杯戦争に参加したってわけか？」

「そうです…。」

「慎二…あいつ……、一回絞める。」

ゴッ！っと、士郎が拳と拳をぶつけた。

「しかし、そうと分かれば慎二とやらを止めることができます。」

「そうだな。」

「あの…先輩。」

「だいじょうぶだ、桜。ちょっとお仕置きをするだけだから…。」

「は、はい…。」

ニッコリとそれはそれは良い笑顔で親指を立てた士郎に、桜は、兄・慎二の末路を想像して青ざめた。

「セイバー、行くぞ。桜はここにいろよ。いいな？」

「…はい。」

「じゃあ、行くぞ。」
「はい、シロウ。」
士郎とセイバーは、準備をして出発した。

＊＊＊

間桐邸に行く途中だった……。
「セイバー。」
「ええ。何かがいます。」
「誘ってるな…。」
「えっ？　シロウ！」
「こっちだ！」
そう言って士郎が駆け出す。セイバーは慌てて追いかけた。
そしてやってきたのは、公園だ。
周囲に木々が生えているが、そこだけ開けた場所となっていて芝生が生えている。

「ここは？」
「ここで……昔でかい火災があったが。ここはその時の跡地を改装して公園にした場所だ。そして…、俺が切嗣爺さんに助けて貰った場所でもある。」
「！」
「来るぞ！」
　すると、周囲から骨の兵隊が現れ襲いかかってきた。
「シロウ！　さが…。」
「おおおお!!」
　シロウが拳を振るい、蹴りを繰り出し、脆いそれらの敵を粉砕していった。あまりの速さにセイバーはポッカーンとしてしまった。
　その時。
「セイバー!!」
「あっ！」
　セイバーが腕を掴まれて引かれ、爆発が士郎を包んだ。
「シローーーウ!!」
「おやおや……、まさかサーヴァントを庇うなんて…。ずいぶんと変わったマスターですこと。」

「貴様は！」
　そこに現れたのは、紺色のローブをまとった女性だった。その手にしている杖と、その周りに控えている骨の兵隊達を見れば、彼女が普通ではないことは明らかだ。
「あー、びっくりした。」
「なっ!?」
「シロウ、さすが…無事ですね…。」
「おう！　鍛えたからな！」
　士郎は爆発を防ぐために膨張させた筋肉でポージングを取った。
「ひ、ひ…ひいいいい！」
「ん？　どうしたんだ？」
「様子が変です…。」
「筋肉ーーーー!?」
　魔術師クラス、キャスターが悲鳴を上げながら魔術を放ってきた。
　しかしそれを筋肉を膨張させていた士郎が難なく防ぐ。
「なあ…、どうした？」
「ひっ！　こ、来ないで、来ないで来ないで！」
　キャスターが攻撃を乱発してくる。しかし流れ弾を含めて、全部喰らっても士郎は

倒れない。むしろ無傷だ。
「遠坂のガンドよりは強いな。けど、俺の筋肉魔法を破るにはほど遠い！　さあ、殺るならもっとこいやぁぁ!!」
「いぃいやあああああああああ!!」
「あ…、消えた。」
「逃げましたね。」
　キャスターが消えると同時に、骨の兵隊達も消えた。
「何しに来たんだろ？　アイツ…。」
「あれは、おそらくキャスターですね。」
「きゃすたー？」
「魔術師クラスのサーヴァントです。魔力を行使する能力に最も長けたサーヴァントです。」
「士郎！　あんたもいたの？」
「遠坂。お前こそどうしたんだ？」
「やられたわね…。そっちも傀儡だったなんて。」
「どういうことだ？」
「ほら、あそこ。」

「あっ。」
　そこには、宝石のような石が落ちていた。
「これは、キャスターが作った分身よ。どうやら、キャスターのやつ、私とあんたに同時に攻撃を仕掛けたようね。」
「あ、そうだ俺…。」
「最近のガス事件とかって覚えてる?」
「ああ、最近頻発してるらしいな。」
「それって、明らかに魔術の痕跡がある。つまり……何者かがサーヴァントに魂食いをさせた証拠。」
「つまり、キャスターが?」
「おそらくわね。ライダーのあの魂食いの結界は肉体もろとも溶かすものだったけど、キャスターは違う。…今、アーチャーが、魔力の動きを見てくれたわ。魂食いしても、その流れた魔力をどうやった運ぶ?　簡単に言えば、この冬木市の土地の霊脈を使えばいいのよ。この冬木市には、霊脈が集まる霊格が高い土地がいくつかあるわ。」
「それを辿っていけば…。」
「ええ。キャスター本体にたどり着けるはずよ。アーチャーが今、向かっている場所がそこよ。行くわよ!」

「ちょっと待て。俺は協力するなんて言っていないぞ？」
「じゃあ、あんたは、関係の無い人達が死んでいくかも知れないのを見過ごしていくつもり？　あんたって非道ね？」
「……分かった。その代わり、貸し一つだからな。」
「分かってるわよ。」
「セイバー、変更だ。行くぞ。」
「はい！」
そして一行は、柳洞寺へ向かった

ＳＳ９　士郎と小次郎

柳洞寺の鳥居の前で、アーチャーと待ち合わせ、合流した。
「結界が張られてるわね…。真っ正面以外は…。」
「なら、正面から行くしかないってことか？」
「そうね。」
「じゃあ、俺が結界を…。」
「そんなことしたら、確実に罠が発動するわよ。どんなしっぺ返しが来るか分かったものじゃないわ。」
「それはそれで…。」
「あーーーー！　はいはい、あんたの筋肉魔法とやらのために受けて巻き込まれるなんてごめんよ！」
「どういうことですか？」
「士郎はね…。筋肉の強度を上げるために、あえて自分から攻撃を受けに行くのよ。」
「そうさ！　その甲斐あって、この通り！」

「見せなくていい！」
ムキャッと筋肉を見せびらかす士郎に、凛は怒った。
「自分のためにならば他人を巻き込むのか、貴様は…？」
「俺一人ならともかく、遠坂達全員を巻き込みたくはないな。やめとく。」
アーチャーがギロッと睨む。しかし士郎はマイペースに振る舞い、筋肉を収縮させた。
「けど、じゃあ、どうする？」
「……あー。ここまで来といてなんだけど、相手が魔術師クラスだってことを見越して対策を立ててから来るんだったわ。」
「遠坂の恒例の、うっかり属性か。」
「うるさい！」
「仕方ないな…。」
「ちょ、士郎！」
「上になんか気配がある。キャスターじゃないな。結構な強さだぞ！」
そう言って士郎は嬉しそうに石階段を駆け上がっていった。
「そこを往くのは、サーヴァントか？」

「いや、人間だけど？」
「それは失礼した。」
　石階段の最上階に座っている人物がゆっくりと立ち上がった。
「誰だ？　サーヴァントだろ？」
「その通り。私はアサシンのサーヴァント。佐々木小次郎！」
「！　自分から真の名前を名乗るとは恐れ入る！」
「貴殿は、相当な手練れと見た。ぜひ、名前を聞きたい。」
「士郎だ。衛宮士郎。」
「良い名だ。しかと聞いた。して、士郎殿。なにゆえ、この山に立ち入った？」
「ここにキャスターって奴がいるんだろ？　って、言っても…俺が真っ正面から入ったのは、あんたの気配を感じたからだ。強い奴の気配をな。」
「ほう。それは光栄だ。……つまり貴殿は、私との試合をお望みか？」
「そうだな。出来たらの話だが…。」
「私は、この山の守りを託された者。だが少々暇を持て余していたのだ。貴殿からの挑戦は願ってもないこと。」
「じゃあ…。」
「士郎殿。試合を受けまする。」

「よっしゃあああ！」
　士郎はガッツポーズを取った。
「では……。」
　アサシンの手に、長刀が現れた。
「試合開始！」
　士郎は、リミッター解除をして筋肉を膨張させた。
「むっ！　やはり、ただ者ではない！」
「はっ！」
「ふっ！」
　見た目からは想像も出来ないスピードで迫ってきた士郎を、アサシンは長刀で迎え撃つ。
「見てくれだけの肉ではないのですね？」
「ああ！　この十年以上で、鍛えに鍛えた、筋肉魔法だ！」
「きんにくまほう？　ずいぶんと…変わった御方だ。」
「けど、まだまだだ…。ユーリ兄ちゃんには、まだほど遠い！」
「ほう……。士郎どの以上の方がいると…？」
「ああ！　俺は聖杯を手に入れたい！　そしてユーリ兄ちゃんに会いに行きたいんだ

！」
「それが貴殿の聖杯にかける望みか！」
「そうだ！」
「では…、私も士郎殿の本気に応えなければなりませんな。」
「むっ…、来るか…、なら俺も…。」
「秘剣…。」
「……トル…。」
「燕返し!!」
「拳（こぶし）!!」
　凄まじい速度で振られた剣から放たれた一撃と、士郎の拳から放たれた拳の圧がぶつかり、拳の圧が真っ二つに横に切れて飛んでいって、下に飛んでいった圧が石段の一部を破壊した。
「俺の拳の圧を切るとはな…。」
「今の一撃…、防がなければこちらがやられていました…。」
「すごいな、おまえ。ほんと強いな。」
「士郎殿こそ…。」
「オラオラ!!　てめぇ、坊主！」

「な、ランサー!?」
「そいつとはまともに相手にして、俺とは本気でやりあわねぇってないわー!」
「ジャマすんな!」
「そんなアサシン野郎より、俺の相手をしろ!」
「おりゃっ。」
「ぶげっ!?」
「お前の動きは見切ってんだよ。」
デコピン一発でまた沈められるランサーだった。
それを見たアサシンは、ダクッと汗をかいた。
「どうした?」
「士郎殿は…、そこな御方の動きを見切っていると?」
「? ああ。」
「それは困った…。」
「なんだよ?」
「この勝負、士郎殿の勝ちだ。」
「はあ? なんでさ?」
「私は、そこの御方を下回る力しか持ち合わせておらぬ。動きを全て見切られれば、そ

れまでだ。士郎殿の期待に添えぬ…。」
「本気でやってもいないのに、諦めるのか?」
「私は本気を出しましたよ。先ほど、士郎殿の拳の圧を切った。それがせいぜいです。」
「おまえ…。」
「申し訳ない、キャスター殿…。ぐっ!!」
「おい!?」
突然アサシンが胸を押さえて膝をついた。
『失望しました、小次郎。』
そこにキャスターの声がどこからともなく聞こえた。
「キャスター!? アサシンになにを!?」
『令呪をもって仕置きをしているのですよ。門番としての役目を果たせぬのですから。』
「ぐ…あああああ!」
「てめ…、出てこい!」
『出てこいと言われて、出るバカはいません。』
「士郎、どの…!」

「うわっ！」

次の瞬間、アサシンに突き飛ばされた。

そして士郎がいた石階段に、凄まじい雷撃が落ちて破壊した。

士郎は転がり落ち、上を見上げた。

そこには、倒れているアサシンと、キャスターが立っていた。

「ここは私の領域…、死ね!!」

「ちっ！」

士郎は、その場から飛び退く、するとさっきまでいた場所に先ほどより強い攻撃が直撃した。

「士郎！　逃げるわよ！」

「いや、まだだ！」

「いい加減にしてよ！　このままじゃ私達まで巻き込まれるわ！」

「…分かった。」

士郎は、仕方なく凛達と共に退却した。

ＳＳ１０　慎二の愚行

衛宮家に戻り、士郎は、ムスッとしていた。
「士郎……、期待通りの強敵じゃなかったからって、機嫌を損ねないでよ。」
「そうじゃない…。邪魔されたうえに、アサシンがあんな形で負けたせいで、酷い目に遭うのをとめられなかったからだ。」
「…そのことだけど、驚きよね。キャスター自身がマスターとしてアサシンを使役しているなんて…。」
凛は、そのことに驚いていた。
凛が言うには、本来アサシンクラスで喚ばれるのは、ハサン・サッバーハという、代々名を継いできた暗殺者だけが喚ばれるはずなのだが、なぜか佐々木小次郎という人物が代わりにアサシンとして収まっていたのだ。おそらくは、本来の正式なサーヴァントではないためにそんなことになっているのだろうと凛は分析していた。
「アサシンクラスって、誰が喚ばれるのか決まってるのか。」
「アサシンだけはね。それと……。」

凛がジロッと桜を見た。

桜は、ビクッと震えた。

「桜…、あなたは聖杯戦争に関係ないって思ってたけど…。まさか自分自身を生け贄にライダーを召喚していたなんて…、しかも慎二なんかに譲るなんて…。バカじゃないの?」

「ご、ごめんなさい…。」

「しかも! 令呪二つ使って、慎二の命令に従うこと、そして、慎二の命を最優先に守ることって命令するなんて!」

「桜を責めないでやってくれよ。慎二に脅されただけなんだ。」

「甘いわね。そのせいで人死にが出たらどう責任を取るつもり?」

「それは…。」

「ごめんなさい…、ごめんなさい…。」

グスグスっと泣く桜。

「とにかく! 慎二のバカなんかに、これ以上聖杯戦争を引っかき回されても困るわ。あのバカのことだもの、またライダーにあの結界を使わせる可能性が高いわ。」

「やっぱり、慎二は魔術師じゃないのか…。」

「ええ。間桐の家系は、枯れた家系よ。慎二の父親でその魔術回路も途絶えてるから、

その子供の慎二には魔術師の才能はないはずなの。」
「うぅぅ…。」
「ほら！　いつまでも泣かないでよ。」
「お前が泣かしたんだろうが。」
　士郎は、ずっと泣いている桜を抱きしめた。
「いい？　明日、慎二からライダーを奪い返すわよ。出来なければライダーを倒すわ。」
「遠坂、そんなこと…。」
「できるわよ。偽臣の書なんてもので一時的にライダーを使役しているだけなら、その本を燃やせばお終い。それぐらい分かるでしょ？」
「あ…。」
「ほんと、バカね…。」
「けど、仮に取り返したらどうするのです？　桜にも聖杯戦争をやらせるのですか？」
「それは、桜の意思次第よ。どうするの、桜？」
「わ、私は…。」
「いいんだ、桜。戦いたくないなら、戦っちゃダメだ。」
「先輩…。でも、私…。」

「ははーん…、さては士郎の手助けをしたいって思い直しはじめてるわね？」
「っ…。」
「だったら、なおさらライダーが必要じゃない？」
「……うん。」
「桜、おまえ…。」
「先輩…。私、私なりに先輩と肩を並べられるよう頑張りたいです！　それに、私が勝っても、聖杯を先輩に渡せるし…。そしたら先輩の会いたい人に会える確率もグッと上がると思うんです。」
「……そっか。」
「では、決まりですね。」
「ああ。ライダーを取り返すぞ！」
目標は決まった。

＊＊＊

翌朝、いつも通り登校する。
　下手に妙な動きをすれば、こちらのことを悟られかねないので…、相手が本物の魔術師でなくても油断はできない。
　しかし、やるべきことはやる。
「ここだ。」
「さすが、早いわね。」
　士郎が学校の周囲に付けられた、ライダーの結界の仕掛けを見つけて、それを凛が破壊した。
「あー、もう何個あるのよ…、面倒くさいわね。」
「面倒くさがるなよ。これで、せめて学校内であの結界を使われないための予防になるんだから。」
「分かってるわよ。」
「あ、向こうにもある。」
「待って！」
　次の仕掛けを見つけて足早に進む士郎を、凛が追いかけた。
「ちっ！」

二人が去った後、慎二が、壊された魔方陣を踏みつけて舌打ちをした。
「ここもかよ！　クソ！　おい、ライダー！」
すると、ライダーが現れた。
「これ、どういうことなわけ!?　おまえの魔方陣ってさあ、あんな奴らに消されちゃう程度のもんなのか!?」
「……彼らの魔術は中々に強力です。特にあのアーチャーのマスター…。魔方陣の消去は防ぎようがありません。」
「ふん！　たいしたことないんだな、サーヴァントってのもさ。」
「ですが、それでも結界発動のためには、魔力は着実に集めています。あと4，5日もすれば完全に準備は整います。」
「はあ！　4，5日だって!?　ふざけんのかお前！　それじゃあ、あいつらに先を越されるじゃないか！」
慎二はライダーを殴った。
「…兄さん?」
「っ…桜か。いや…待てよ…。」
「兄さん…。お願いがあります。」
「なんだ?」

「こんなこと…やめて。」
「はっ？　何言うかと思えばそんなことか？　お前、見てたのか？　なあ、ライダー。見られたからには口封じしないといけないよなぁ？」
「っ…。」
先ほどまでずっと冷静だったライダーが僅かにためらいを見せた。
「兄さん…？」
「悪いな。桜。お前にはまだ利用価値がありそうだ。」
「……申し訳ありません。桜。」
「あ…！」
次の瞬間、桜の後ろに回り込んだライダーが桜に当て身をして気絶させた。
桜の体を受け止めライダーが抱え上げた。
「さてと……。」
慎二はニヤリと笑う。

＊＊＊

「遠坂！」
「どうしたの？」
放課後、下校する生徒達をかき分けて士郎が凛を捕まえた。
「これ…。」
「！　アイツ…。」
それは、ボロボロに引き裂かれた桜のリボンと手紙だった。
「なるふり構わずってことね…。ここまで堕ちてるなんて…。」
手紙の内容は、明日までにすべての準備を整える、邪魔をするなら桜の命はないっと書かれていた。
「明日までですって？　結界の仕掛けもあらかた破壊したし…、っとなると、魔力を使って強引に発動させるしかないわね。でもその魔力は……。あっ。」
「遠坂？」
「なるほどね…。手っ取り早い方法があるわ。魔力をかき集める方法。」
「それは？」
「吸血よ。もっと言えば魂食い。血は、命を宿す魂の象徴。それを直接、大量に吸い取れば、あるいは……。」

「今度は、吸血か…。桜…。」
「桜も危ないかもしれないわよ。」
「なっ!?」
「今のライダーは、一時的とはいえ慎二の手元にある。おそらく魔力のパスだけは繋がってる状態なはず。なら、本来のマスターである桜から大量にギリギリまで魔力を吸い取れば……。あとは、結界を発動していっきに魔力を集めれば桜が回復するまで十分すぎるほどもつわ。今のライダーは、二つの令呪の強制力で慎二に逆らえないんだもの。」
「そんな…。」
「けど、桜を殺すことはないでしょうね。なにせライダーを保つには、桜が不可欠なはずよ。魂食いし続ければ、いずれ教会が黙ってはいないし、乱用は出来ないはずよ。」
「…くそぉ！　俺は…。俺は何のために力を付けたんだ！　恋人一人守れないで…。」
「士郎…。」
「くそっ！」
士郎は壁を殴った。するとミシッと拳が壁にめり込んだ。
もちろん…先生に怒られた。

＊＊＊

翌日。

士郎は眠れぬまま夜を過ごし、朝を迎えた。

「シロウ…。心配なのは分かります。」

「行ってくる…。」

「シロウ、私も…。」

「いや、お前は目立つからな。」

「っ…。」

「…けど、もし何かあったら危ないから、近くの公園にでも待機しててくれ。ちゃんと私服でな。」

「！　分かりました。」

そして、士郎は、学校に行った。

授業は滞りなく始まり……。

別のクラスで、凛も警戒していた。

慎二は来ていなかった。
そして……。
あの時同様に、突然それは来た。
バタバタと倒れていく生徒や教師達。放課後と違い、たくさんの人間達が一斉に影響を受けた。
「遠坂！　来たぞ！」
教室を飛び出した士郎は、凛と合流した。
「ええ、分かってるわ！」
「屋上だ！」
「分かったわ！」
二人は屋上へ急いだ。

そして、屋上の扉を開けた。

「ハハハハ…、遅いじゃないか。」
「慎二!!」
士郎が怒りを露わにする。

慎二は一瞬、士郎の睨みと迫力にたじろくが、すぐに笑みを浮かべ直した。
「桜は、どこだ?」
「桜? ああ、あの絞りかすか。残念だったな、ここにはいないぞ?」
「桜を…返せ。」
「っ…、桜、桜、桜っておまえ…、他はどうでもいいのかよ! こうしてる間にもどんどん溶けていってるんだぞ!? もしかしたらもう誰か死んだかもな!」
「慎二…。」
ユラリッと士郎が一歩前へ踏み出した。
それだけで、ズシンッという音が聞こえるような錯覚がし、慎二はヒュッと喉がなり、思わず一歩下がった。
「ら、ライダーー!!」
「はい。」
「どけ!」
ライダーが両の短剣を握り迫る。すると士郎が筋肉のリミッターを解除し膨張させた。
「その筋肉…、確かにすごいですが。だが所詮は見てくれだけの筋肉。私のスピードには…。グハッ!」

「ライダー!?」
　ライダーが、士郎の腕になぎ払われ、屋上のフェンスに衝突した。
「慎二……。」
「はっ…、え、衛宮…。ら、らら、ライダー！　は、早くしろ！　コイツを殺せ!!」
　ズンズンと慎二に迫ってくる士郎に、怯えきった慎二が必死にライダーを呼んだ。
「させると思ってるの?」
「ハッ！」
「アーチャー！」
　フェンスから起き上がり、飛びかかろうとしたライダーと双剣を手にしたアーチャーが衝突した。
「あ、ああ、あああぁぁぁ…。」
「士郎。殺さない程度にね。」
「分かってる。桜の居場所を吐かさないとな。」
「さ、桜は…、間桐の家だ！　そこの地下にいる！」
「…本当か?」
「本当だ！　本当だから…！　だから、許してくれ！　頼む…、頼むよぉ！」
　慎二が両手を組んで拝み倒すように頭を下げてきた。

士郎が止まる。
「……フッ、隙だらけだぞ！」
「！」
次の瞬間、パシンッと音を立てて、黒いかまいたちのようなモノが慎二の周囲に発生し、士郎を襲った。
黒い煙が舞う。
「は、ハハハハ！　僕のか…。っ!?」
だが煙の中から、士郎の手が伸び、慎二の顔を掴んだ。
「ぎゃあああああああああああ!!」
ギリギリメリメリと、指が少し食い込み、アイアンクローによる激痛が慎二を襲い、慎二は、必死に士郎の腕をタップした。
「慎二…。誰かを殺す覚悟があるのなら…、殺される覚悟もあるんだろうな?」
「ひぎゃあああああああああ！」
「おら?　どうした?　さっきの威勢はどうした?　この程度の痛み…男なら耐えろよ。」
「じぬ…、じじじじ、ししし、死ぬ…！」
「シンジ！」

「隙を見せるな。」
「くっ！」
悲鳴を上げる慎二に気を取られたライダーの足を、アーチャーが切りつけた。
ライダーは、後方に跳び、そして、目を覆っていたベルトのような封じを外した。
「魔眼!?　士郎！」
「ん?」
「見ちゃダメ！」
「私を見なさい。」
「……。」
「?　なぜ…効かない?」
士郎は、慎二を掴んだまま振り向く。そしてライダーの顔を見たが、まるで影響を受けていなかった。
「気をつけて！　そいつの目は、石化の魔眼よ！」
「まがん?」
「そう、私は、メドゥーサ。呪われし、眼を持つ者。ゆえに、この目で見たモノすべては、石となる。……はずなのですがね。」
「そりゃ、目も鍛えているからな。」

「…諦めなさい、ライダー…。ソイツ…目の筋肉も非常識だから…。」
凛は、石化の魔眼に抵抗しながら、泣きたくなりながらそう言ったのだった。
「仕方ありませんね…。ならば…。」
するとライダーが短剣を手にして、そして…自らの首に刺した。
大量の血があふれ出て、その血が宙に浮き、魔方陣が描かれる。
「士郎！　マズい！　避けて！」
「！」
士郎は、慎二を離し、フェンスの端に投げて避難させた。その直後、魔方陣の中心から巨大な眼球のような力の塊が放出された。
士郎はそれを胴体で受け止めたが、屋上の床をめくれ上がらせながら、後ろに後退させられ、やがて軌道が上へとそれて、目玉は空の彼方へ飛んでいき、士郎は後ろへ飛ばされて倒れた。
「…ちきしょう。防ぎきれなかった。」
「アレを身体で防ごうって方がおかしいのよ…。」
アーチャーによって庇われた凛はとりあえずツッコミを入れた。
士郎の胴体の中心は、目玉を受け止めた跡が僅かに残っていただけで大きな怪我はなかった。

ライダーは、先ほどの目玉を発射した隙に、慎二を拾って逃げたようだった。
そして結界も、消えていた。
「なんとかなったわね。」
「桜を…迎えにいかなきゃ…。」
「無駄よ。」
「えっ?」
「きっと今頃、桜を運び出して場所を変えたでしょうね。」
「なっ…。」
「あんたが桜に固執していることは、イヤでも分かったでしょうから、向こうはなりふり構わず来るはずよ。例え、桜の命を盾にしてでもね。」
「!」
「いい?　学校の魂食いに失敗した今、次に魂食いをさせる場所は限られているわ。そこを目指せばいいのよ。」
「……ああ。」
「それより、怪我は?　まあ…あんたならなんともないでしょうけど。念のためよ。」
「この程度…、桜の苦しみに比べればなんともない。」
「そう…。じゃあ、行きましょう。セイバーも連れてね。」

「ああ！」

そして、公園で待機していたセイバーと合流して、慎二を追うことにした。

ＳＳ１１　必殺!

なんとかとバカは、高いところが好き…。
「まさにその通りね。」
凛と士郎は、慎二が次に狙うであろう場所。
高層建造物が集まる、学校以上に人が集まる地域に来た。
「…いる。」
士郎は、その中の一番高い建造物の屋上に慎二がいるのを見つけた。
士郎は、ギリッと拳を握りしめた。
「気をつけなさい。桜を人質に取られてる。ここで冷静に対処しないと…。」
「分かってる…。」
士郎の声が僅かに震えていた。
それが怒りによるものなのか、桜を失うかもしれない恐怖によるもんのかは分からない。
だが、このまま行かせれば、慎二もライダーも無事では済まないだろう。
「シロウ。落ち着いてください。」

セイバーが言った。
「……筋…。」
「シロウ。」
「三角筋、小円筋、大円筋、ヒラメ筋、上腕筋、上腕二頭筋大胸筋、上腕三頭筋、円回筋、烏口腕筋、棘上筋、棘下筋、棘腕筋…。」
ブツブツっと、あらゆる筋肉の種類を念仏のように呟く士郎。
「し、シロウ?」
「あー、だいじょうぶよ。これ、士郎が精神を落ち着かせるときにいっつもやってることだから。」
「そうなのですか?」
「フーーー…。」
精神を落ち着かせた士郎が息を深く吐いた。
「じゃあ、行くか。」
「そうね。」
「……! 来ます!」
その時、高所からライダーが飛び降りてきた。
「士郎! 行きなさい!」

「遠坂、セイバー!」
「慎二さえなんとかすれば勝ちよ!　ライダーは私達で足止めするわ!」
「…分かった。貸し、二つだからな。」
「分かってるわよ。いちいちうるさいわね。」
そう言い合ってから、士郎は慎二がいるビルに入って行った。
ライダーが飛び降り、鎖の付いた短剣を無数飛ばしてきた。

＊＊＊

「慎二!」
「やあ、衛宮。遅かったな。」
「桜!」
「安心しろよ。まだ生きてる。」
慎二の傍には、意識のない桜が寝かされていた。
その首筋に、二つ、まるで吸血鬼にでも噛まれたような歯形が付いていた。

「慎二いぃ!!」
「死ねぇ!」
慎二が偽臣の書を取り出して開き、黒いかまいたちのようなモノを飛ばした。
「僕は、聖杯を手に入れる! そして、僕の本来の力を手に入れるんだ!」
「それがお前の願いか?」
士郎は、筋肉を膨張させずに黒いかまいたちのようなモノを受けながら言った。
「そうさ! 間桐の家は魔術の家系だった! だけど、父さんの代でそれが絶たれてしまった…。だから僕は、本来僕の物であったはずの力を手に入れる! 僕はそのためにも聖杯を使い魔術師になるんだ!」
「それは、間桐の意思か? それともお前の意思か?」
「僕の意思さ!」
「……可哀想な奴だ。」
「なっ!?」
「俺のように努力することもせず、ただただ力を渇望して、妹の桜まで犠牲にして……、そんなことで魔術師の素質を手にれたとして使いこなせると思っているのか? 桜のように、望まずして魔道を押しつけられたような存在すらいるのに。」
「さ…桜さえいなければ…、僕は、僕は!」

「俺は、お前を許さないぞ。慎二。」
「く…、来るなぁぁぁぁ!!」
　士郎が攻撃を受けながら進んできたため、慎二はより多くの黒いかまいたちのようなモノを飛ばした。
　バシン、バシンっと、士郎の身体に黒いかまいたちのようなモノが当たる。だが士郎は止まらない。
「ぐ…、グハァっ。」
「もうよせ。魔術の才能も無いのに急には激しい魔術を使ったんだ。それ以上やれば、お前の命は…。」
「だまれぇぇぇ!!」
「慎二…。」
　目の前まで来た士郎が拳を振りかぶった。
　その時。
　ライダーが横から飛んできて、その拳を蹴りで弾いた。
「ら、ライダー…。」
「無事ですか?」
　ライダーは、ボロボロだった。

「ライダー…、そいつを、殺せ！」
「…はい。」
「衛宮、動くな！」
「桜！」
「うぅ……。」
慎二が桜を掴んで持ち上げた。
「動けば、桜の命は無いぞ？」
「慎二…。」
士郎の目に怒りの炎が湧いた。
「…申し訳ありません。桜…。」
「おまえ…。」
「……令呪に従うのは、サーヴァントの定めです。」
ライダーが短剣を手にし、動けない士郎に躍りかかった。
「ハハハハ！　僕のか…、っ、ぎゃあああ！」
「シンジ!?」
慎二が桜を掴んでいた手に、一本の矢が刺さった。そして桜を離し、慎二は腕を押さえてのたうった。

「ふん、たわけが。」
「アーチャー!!」
　アーチャーが、反対側の建物の上から弓を構えていた。
「い、痛い!　痛い、痛い痛い痛い痛い!!　なんで、どうして、僕がこんな目に!?」
「バカだな慎二。これは、聖杯戦争だぞ?　痛いに決まってるじゃないか。」
「助けて衛宮…。血…血が止まらないんだ…。」
「桜はそれ以上に血を吸われてるんだぞ?」
「ひぅ…。ごめんなさい…、ごめんなさい…。許して…許してくれ…よぉ!」
「どうする、ライダー?　こんな奴にまだ従うのか?」
「私は全力をもって今のマスターに従うだけです…。しかし、真っ正面からやりあったとしてあなたには勝てないことは明白。ならば……。」
　ライダーが、魔方陣を召喚し、そこから天馬を出現させて跨がった。
「この子を使うことになりますが、全力をもって、あなたに当たります!」
「そうか…。なら俺も相応に本気を出さなきゃな!」
　士郎は、リミッター解除をし、筋肉を膨張させた。
「シロウ!」
「士郎!　無事?　無事よね…。」

そこへセイバーと、凛が駆けつけてきた。
天馬に跨がったライダーが天へと舞い上がる。
そして、照準を合わせ、光の塊となって突撃してきた。
「シロウ！　さが…。」
「必殺……、ピストル拳!!」
時速７００キロというスピードで迫ってくるライダーに向け、士郎が放った拳の巨大な圧が、ライダーが跨がる天馬を貫き、粉々にした。
「ば…馬鹿な…。この子が負けるなんて……。」
ライダーは、地上へと堕ちていった。
あまりのことに、誰も彼もが言葉を失った。
「あれ？　これ…私の見せ場が…。」
セイバーは、なぜかそう呟き、膝を付いた。
「俺の勝ちだ。慎二。」
「うぅぅ…。」
「兄さん……。」
「さ、桜…？」
「もう、終わりにしましょう…。」

意識を取り戻した桜が、慎二に手を伸ばし、その手に触れていた。
その手の冷たさに、慎二は驚く。当たり前だ、失血と魔力が不足しているのだ。
「慎二、おわ…。」
その瞬間だった。
慎二の身体が潰された。
「えっ…?」
桜の顔に慎二の血が大量にかかった。
「にい、さん…、兄さん?　兄さん…!」
「あーあ、私の出番なかったなぁ。」
「イリヤ!」
慎二を潰したのは、バーサーカーだった。
「だいじょうぶだよ。お兄ちゃん。これでライダーは、自由。偽りのマスターに従う通りは、もうないんだよ。」
「イリヤ…。」
「どうしてそんな顔するの?　そうしないとライダーは、令呪で一生さっきの雑魚に従わなきゃいけなかったんだよ?」
慎二が死んだことで、偽臣の書がボロボロと崩れていった。

「にいさん…。」
「あなたが、お兄ちゃんの恋人なんだって？　可愛いね。」
「桜から離れろ！」
「もー、怒らないでよ。せっかく邪魔な雑魚を潰してあげたのに…。」
イリヤは、ぷうっと頬を膨らませた。
「……イリヤ…、さっさとどっか行け。」
「えー？」
「いいから…。じゃないと俺は…。」
「…分かった。」
イリヤは、仕方なくそう言い、バーサーカーと共に去って行った。
あとには静寂。
そして、血の匂いが風に乗ってきた。
「慎二…。」
慎二はもはや形すらとどめていなかった。
桜は、ぼう然と顔を血で汚して座り込んでいた。

慎二との戦いは、バーサーカーの乱入による慎二の死で終わりと告げた……。

ＳＳ１２　ラブラブ同棲?

間桐慎二は、死んだ。
その死は、事故死とされ、本来の死因は公になることはない。
それは、表沙汰にならない魔術師という存在が戦い、殺し合う、この聖杯戦争では決して珍しいことではないのだと凛は言った。
件の連続多発ガス漏れ事故や、殺人事件などもそうだ。そうやって情報を歪められて伝えられ、真実は大衆には伝えられない。
「ごめんな、桜…。目の前にいたのに、慎二を助けられなかった…。」
「いいんです…。もう…。」
慎二の葬儀は、簡素な形で済まされた。
一応学校のクラスメイトが葬儀に参列したが、その死を悼む者は少ない。その理由は生前の慎二の行いのせいだろう。
慎二のいない日常は、すぐに当たり前のことになるだろう。そう…初めからそこにいなかったように。

士郎はボーッと、空き教室の窓から空を見上げていた。
「……まーだ気にしてるの？」
「遠坂…。」
「仕方ないわよ。って…言うしかないわ。」
「分かってる…。そう納得するしかないんだって…。」
「で？　これからどうするわけ？　桜がライダーを取り戻した今、桜はあんたのために聖杯を求める。そしてライダーのことだから、桜の命令に従ってあんたに従うでしょうね。」
「俺は、俺の戦いを続けるよ。遠坂も、そうだろ？」
「ええ。ところで、私と同盟を組む気はないわよね？」
「ああ。」
「そう…。」
「遠坂には遠坂の願いがあって。俺には俺の願いがある。それは、きっと同じ願いになることはない。」
「そうね。じゃあ、これからも敵同士よ。」
「貸しのこと忘れるなよ。」

「まったく、がめついわね。」
「お前に言われたかないな。守銭奴。」
「仕方ないじゃない！　宝石って値が張るのよ！」
「…ふ、ふふふ。」
「あ、やっと笑ったわね。」
「そうか?」
「だって、ずっと湿気た顔してんだもん。」
「…ありがとな。」
「礼なんていらないわ。」
そして、お互いに笑った。

＊＊＊

「桜?　本当にいいのか?」
「はい…。心細くって…。」

慎二の葬儀後、桜は荷物を抱えて、衛宮家にしばらく泊まることにした。
桜からしたら、血のつながりはないものの、兄の慎二がいなくなったことで、ただでさえ広い間桐邸に一人で住むのは心細すぎたのだ。
「それに…、これからはライダーがいます。すぐに先輩の力になりたいから…。」
「これまでの非礼をお詫びします。そして、これからよろしくおねがいします。」
私服姿で、眼鏡のライダーがそう言って深く頭を下げた。
「いや、そのことはもういいんだ。よろしくな、ライダー。」
「はい。」
「しろーーーう!」
そこへ、藤村大河が走ってきた。
「ちょっと、とうとう同棲!? それなら式ぐらいあげなさいよ!」
「いや、まだ気が早いって。」
「あら〜、予定はあるのね?」
ぷくくっと、大河が笑った。
桜は、カ〜ッと顔を真っ赤にした。
「俺…聖杯戦争を無事に勝ち抜いたら…、絶対にユーリ兄ちゃんに桜を紹介したいんだ。」

「先輩が会いたいって人ですよね?」
「なになに?　何の話?」
「こっちの話だ。俺、もしかしたらユーリ兄ちゃんに会えるかもしれないから。」
「前々から気になってたけど…、あんたが言うユーリって、男?　女?」
「!」
「男だけど?」
ギョッとする桜とは裏腹に、マイペースに答える士郎だった。
「なーんだ。もし女だったら、修羅場かもって心配したじゃない。」
「なんでだよ?」
大河の言葉に士郎は首を傾げ、桜はホッと胸をなで下ろした。
「ユーリ兄ちゃんは俺の尊敬する人だけど。俺が桜以外の異性を恋人として好きになるわけないだろ?」
「!」
士郎の言葉に、ボンッと桜が顔を真っ赤にした。
「桜。しっかり。」
「う、嬉しい…嬉しい…。」
ライダーに支えられ、顔を両手で覆った桜がブツブツと呟いた。

こうして、桜の同棲（お泊まり）が決まった。
だが。

「認めないわよぉおおおおおおおおおおおお!!」
ドドドドドっと、凛が走ってきた。
隣にいるアーチャーが大きな鞄を抱えていた。
「遠坂？」
「私も住むわ！」
「なんでさ？　おまえとは同盟も組んでないのに。」
「いいえ！　これは決定事項よ！　せいぜい、邪魔させて貰うからね。」
「これ、お土産です。つまらないものですが。」
「あら～、わざわざありがとうね。」
アーチャーが手土産を大河に渡していた。
「そ、そんなぁ…。せっかくの先輩とのラブラブ同棲が…。」
「桜！」
凛の乱入に、桜は、フウッ…っと立ちくらみを起こし、ライダーに支えられたのだっ

た。

ＳＳ１３　ルールブレイカー

学校が臨時休校した朝。
「桜、どうだ？」
「うーん…、あと、お砂糖を少し欲しいですね。」
「じゃあ、ちょっと甘めにするか。」
「うふふ…。」
「どうした？」
「もし…、先輩と結婚したら、毎日こんな日を過ごせるのかもって…。」
「桜…。」
「先輩…。」
「しろーう、私、朝はパンだからねー。」
「今準備をしている。待て。」
アーチャーがそう言った。
ところで、アーチャーもエプロン姿だ。この男、見た目に似合わず、料理をたしな

むらしい。凛曰わく、主夫。
三人で並んで料理しているため、ちょっと台所が狭かった。
せっかくのラブラブな雰囲気を壊され、桜は持っていたお玉をギリッと握りしめた。
そして、朝ごはんが出来た。
トースト、コーンスープ、ベーコンエッグ、サラダ。いつも和食だが、今日は洋風にした。
「あら？　このコーンスープ美味しい。」
「味付けは桜がした。」
「ふ～ん。やるじゃない。」
「先輩のおかげですから。」
「へ～…。」
「姉さんには家があるんですから、無理にこの家に来なくていいと思うんですよね？」
「あ～ら、姉がせっかく心配してあげてるのになに？　その態度は。」
「心配ご無用です。私は先輩のお嫁さんになるんですから。」
「認めないわよぉ？」
ゴゴゴゴ…っという感じで、桜と凛の背後に黒いオーラのような物が燃え上がって

いた。

あまりの空気の悪さに、マイペースにトーストを噛んでいる士郎以外は、ゲッソリだ。

ちなみに士郎は、身体作りのため他の者達の倍以上食べる。もちろんプロテインも忘れていない。

「あの……、シロウ？」

「ん？」

「止めなくていいんですか？」

「なんでさ？」

「ダメだ、セイバー。そいつの鈍感さはレベルを逸している。」

アーチャーが机に両肘を置き、頭を支えてため息を吐いた。

「シロウは、マイペースですね…。なんというか、ドッシリとしている。」

ライダーは、桜の隣で士郎の様子を見ながらそう言った。

「筋肉がだろ？」

「いいえ、精神的にもです。」

うんざりしたように言うアーチャーに、ライダーがそう言った。

アーチャーは、額部分を机に置いた肘と組んだ両手で支えながら、その下で歯を食

いしばった。
　この世界線の士郎は、何もかもが、自分を超えているかもしれない。それが何より歯がゆいのだ。
　アーチャーは、悟られぬよう凛をチラリと見る。そして思う。
　絶対に……、自分がエミヤシロウだということを知られてはいけないと。
　もし知られたならば、同一人物だとまず思われないし、この世界線の士郎と比べてなぜこうも弱いのかと言われかねない。それだけは！なんとしてでも避けたかった……。
　血反吐を吐いて吐いて…、それを遙かに超える苦難を乗り越えて、やっとの思いで抑止の守護者になったというのに、それを平然と越えるようなのが、筋肉バカという思考回路をした別次元の自分だとという現実を受け入れたくないし、認めなくない！っと……アーチャーこと、エミヤは心の中で大泣きした。
「桜の夫となれば、素晴らしい家庭を築けるでしょうね。」
「認めないからねぇぇぇぇ!!」
　ライダーの言葉に凛が爆発した。

＊＊＊

食後、昨日のことで駆けずり回っていた大河は、お腹がいっぱいになってスピスピと机の上で寝てしまった。

凛は、冬木の管理者として仕事があるといってアーチャーと出て行った。

「ったく、食べたら牛になるぞ、藤ねえ。」

「ムニャムニャ…、もう食べられない…。」

「仕方ありませんよ。」

桜が薄い掛け布団を持ってきて、大河の上にかけた。

「先輩、ほんとうにすみません…私のせいで姉さんまで来ちゃって家が狭くなりましたね…。」

「いや、だいじょうぶだ。桜は気にしなくていい。あっ、そうだ、桜。コレ…。」

「これは？」

「できるだけ同じようなのを探したんだけど…。」

綺礼に包装されたそれを開けると、リボンが入っていた。

「前の奴…ボロボロになっちまっただろ？」

「先輩。ありがとうございます。」
「ほら、付けてやるから、こっち来い。」
「は、はい！」
桜は、膝立ちで士郎に近づき、目の前にちょこんっと座った。
士郎は、透明なプラスチックの箱に入っていたリボンを取り出し、髪ブラシを片手に桜の髪の毛を触った。
桜は、ピクッと反応しつつ、されるがままになった。
サラサラと指通りのいい髪の毛を丹念にブラシですきながら、整え、リボンを巻く。
「ほら。できたぞ。」
そう言って士郎は、手鏡を渡した。
「わあ…。ありがとうございます。」
「なあ、桜。」
「はい？」
「それ買った店…、いろんなの売ってたんだ。今度、見に行かないか？」
「えっ？」
「イヤか？」
「そ、そんなことないです！　行きます！　行きたいです！」

桜の脳内に、凄まじい勢いで、士郎とのデート風景が妄想された。
お店を回って、喫茶店に行って、それから公園とか橋で良い雰囲気になって…それからそれから……っと、グルグル考えた。
「あぁ…。」
思わず恍惚の声が漏れてしまった。
士郎は、そんな桜を見つめて、ニコニコしていた。
「可愛いな。」
「えっ?」
「桜は、可愛いなぁ、って思ってな。」
「そ、そんな…。」
「なあ、抱きしめていいか?」
「えっ!」
「イヤだって言っても抱きしめるぞ?」
「よ、喜んで!」
「桜…。」
士郎のたくましい腕が、桜を抱きしめた。
桜は、身を任せ、士郎の胸に手を置き、顔を寄せた。

「先輩…、私……、幸せです。」
「俺もだ、桜。」
「先輩…。」
「桜…。」
お互いに目を閉じ、顔を近づけようとした。
ガシャーーーン！
その時、居間の窓ガラスが突き破られた。
ハッとして見ると、そこから骨の兵隊達が入り込んできた。
「キャスターか！」
「あら？　よく分かったわね。」
「藤ねえ！」
見ると、キャスターがいつの間にか、寝ていた大河を抱えて首を掴んでいた。
「シロウ！　キャスター、貴様！」
駆けつけてきたセイバーが叫んだ。
「この女の命が惜しければ、動かないことね。」
「てめぇ…。」
「だいじょうぶです、先輩。」

「桜？」
「隙だらけですよ。」
キャスターの背後に回ったライダーが、キャスターを背後から殴り、大河を奪い返した。
「よくやったな、ライダー！」
「これくらい…、っ！　セイバー、後ろです！」
「えっ？」
ライダーの近くにいたはずのキャスターが、セイバーの後ろにもいた。
次の瞬間、セイバーに向けて、キャスターが、奇妙な形の刃を突き刺した。
「ぐっ…!?」
「ルールブレイカー。」
「セイバー！」
「ホホホ…。これで、セイバーは私の物よ。」
キャスターは、そう言い、自身の手に移った令呪を見せびらかした。それと同時にライダーの傍にいたキャスターが消えた。
「なっ！」
士郎は、自分の右手の甲を確認し、令呪が奪われたことを知った。

「我、令呪をもって命じる。セイバー。我が傀儡となりなさい。」
「あああぁ!」
セイバーが令呪の強制力を受け、膝をついた。
「セイバー!」
「さあ、セイバー!　そこの筋肉ダルマを殺しなさい!」
「くっ…!」
令呪の強制力に操られたセイバーが剣を出現させて、士郎に斬りかかった。
「ふんっ!」
士郎は腕の筋肉を膨張させて防いだ。
「し、シロウ…、逃げ…。」
「馬鹿野郎!　そんなことできるか!」
「ならば…、セイバー!　宝具をもって、殺しなさい!」
「う、ぐ…、うぁあああ!」
セイバーの剣に光が集まりだした。
「うおおおお!」
「ご、ほっ…!!」
「なっ!?」

セイバーの鳩尾に士郎が拳をめり込ませ、気絶させた。
「キャスター!!　令呪を返せ!」
「ちっ…!!　こんな狭いところじゃなければ…。」
「ライダー!!」
「はい、桜。」
「おまえは、邪魔よ。」
キャスターが周囲に光の球を出現させ、ライダーと士郎に放った。
ライダーは、機動性を生かして避け、士郎は筋肉を膨張させて桜の盾になり、防いだ。
「ガンド!」
「っ!」
魔力の弾丸を受け、キャスターが膝をついた。
「遠坂!」
「逃げるわよ!」
「セイバーが!!」
「仕方ないのよ!　今は逃げることを優先しなさい!」
「逃がさないわ…。」

キャスターが魔力をほとばしらせ、大きな一撃を放とうとした。
「ピストル拳（こぶし）！」
「はああ！」
小さめに撃ち込まれた士郎の拳の圧を、キャスターが魔術で相殺した。
そのすきに、士郎達は家から逃げ出した。
キャスターは、すぐさま霊体化して、外に飛び出し、ローブを翼のように広げて周りを見回し、逃げる士郎達を見つけた。
「逃がさないわよ！」
「令呪を返せぇぇぇぇ!!」
「えっ…？」
宙を舞っていたキャスターのところに、士郎が空気を蹴って、宙を跳び、キャスターがいる高さまで来た。
「ピストル…。」
「ひっ！」
「拳（こぶし）！」
「いやあああああああ!!」
放たれた拳の圧が直撃する直後、キャスターは、消えた。というか、逃げた。

「マジで…？」
凛は、空気を蹴って空を跳ぶという離れ業をやった士郎の姿に呆気にとられた。
地上に降りた士郎は、悔しそうに地団駄を踏んだ。
「ちくしょう！　令呪を取られた！」
「士郎…、残念だけど、あんたは脱落よ。」
「まだだ！　令呪を取り返せれば…。」
「じゃあ、どうやって令呪を奪い返せるか、方法を知ってるの？」
「それは…。」
「いいえ！　まだです！」
桜が叫んだ。
「私とライダーがいますから！　私が勝ち上がって、聖杯を先輩に渡します！」
そう力強く宣言する桜。
「桜…。」
「だいじょうぶですよ。先輩。」
「そう…せいぜい頑張りなさい。」
凛は、そう言って手を振った。
アーチャーは、黙ったまま、キャスターが消えた空を見上げていた。

ＳＳ１４　アーチャーの離反

グチャグチャになった家の中を片付けながら、士郎と桜とライダーは、これからのことを話し合った。

凛は、凛で、アーチャーと共にキャスター討伐を考え、一旦家に帰っていった。

「間桐の魔術書を解読すれば…、もしかしたら令呪を剥がす方法が見つかるかもしれません。」

「その間に、セイバーが消えたら意味はないけどな…。それに解読たって、俺は魔術書の読み方を知らないし…。」

「あ…、ごめんなさい…。」

「謝るなよ。それも良い考えだと思うから、頭の隅に置いとくよ。」

「気がかりですね…。」

「なにが？」

「アーチャーのことです。」

「アーチャーが？」

「彼…何か嫌なことを考えていなければ良いのですが…。」
「それは、同じサーヴァントとしての直感か？」
「ええ。」
「ライダー。おまえがキャスターに勝てる確率ってどれくらいだ？」
「正直…セイバーが向こうにいる以上、かなり厳しいですね。」
「じゃあ、先輩が戦いに加わったら？」
「１００％勝てます。」
「なんでさ。」
キッパリと言うライダーに、思わずそう言ってしまった士郎だった。
「キャスターは、筋肉マッチョが嫌いみたいなので、うまく筋肉を見せびらかせば、消耗を誘えるかと…。」
「ですが、相手は魔術師のクラスよ？　とんでもない大きな魔術を使われたら……。」
「その分隙も大きくなるでしょう。その瞬間を狙えば、私が……。」
「いや、俺もやる。」
「先輩、でも…。」
「あの時、逃がさなければ、令呪を奪い返せたかもしれないんだ。それに…、あの武器が気になる。」

「セイバーさんを刺して、令呪を取った、あの変なナイフですか？」
「そうだ。確かルールブレイカーとか言ってたな。あれを……奪えば、もしかしたら……。」
「ですが、アレは、おそらく宝具である可能性が高いですよ。」
「つまり？」
「宝具は、使い手にしか使えませんから。」
「ダメか……。」
　良い考えだと思ったんだが…っと士郎は頭を捻った。
「……あー、もうここで考えてても仕方ない！」
「どうするんですか？」
「先手必勝だ！　キャスターのねぐらに殴り込むぞ！」
「柳洞寺ですね！」
「分かりました。」
　そして、士郎達は、柳洞寺へ向かった。

＊＊＊

柳洞寺に向かうと、何やら様子がおかしいことに気づいた。
「これは…？」
「もしかして…姉さんがもう？」
「急ぐぞ！」
「はい！」
士郎達は、柳洞寺の石階段を駆け上がった。
「止まれ。」
「アサシン！」
「……このまま行くつもりか？」
「ああ。セイバーを取り戻す。」
「そうか…。ならば、行け。」
「おまえ…。」
「私は、お前に負けた。ならば道を空けるのが道理。さあ、早く行け。遠坂の魔術師がすでに行っている。」
「遠坂が…。分かった、サンキュ。」

「ご武運を。」
　士郎達は、アサシンの横を通り過ぎ、柳洞寺の境内に入った。
　寺は恐ろしく静まりかえっており、境内の一部が壊れていた。
「この匂い…、バーサーカーか?」
「もしかして、バーサーカーが攻めてきたんでしょうか?」
「なるほど、だからセイバーを奪ったのか…。バーサーカーをぶっ倒すための戦力を手に入れるために…。」
「どうします?」
　その時、山の中で、ドカンッ!っという音が聞こえた。
「あっちだ!」
　士郎達は急いだ。

＊＊＊

　士郎達が駆けつけた現場では、キャスターがセイバーを使って凛とアーチャーと戦っ

ていた。
「キャスター!!」
「チッ！　小次郎め…何をしていたのですか…。」
「アイツを責めないでやってくれよ。悪いの勝った俺なんだからな。」
「来るんじゃないわよ！」
　士郎が近づこうとするとキャスターが威嚇してきた。
「よっぽど士郎がイヤなのね？　ならこっちのものよ。」
「……。」
「…アーチャー？」
「キャスター。物は相談だ。」
「なにかしら？」
　するとアーチャーが双剣を下ろして、凛の傍から前へ踏み出した。
「アーチャー!?　なにをしてるの!?」
「魔力の空きはまだあるか？」
「あら？　もしかして私の下に来たいのかしら？」
「ああ。おまえに従うのはしゃくだが、私には私の目的を達せするために確実な方を選ぶ。」

「アーチャー!?」
「……すまないな。凛。」
キャスターの前に来たアーチャーを、キャスターがルールブレイカーで、刺した。
「っ…!」
凛の腕に痛みが走り、令呪が奪われた。
そして、アーチャーは、剣の先を士郎に向けた。
「目的は、俺か。」
「そうだ。初めからな。」
「俺は別にあんたに怨みを買うようなことはしてないけどな?」
「恨むのなら、エミヤシロウとして生まれたことを恨め。」
「そんな、無茶な…。」
「姉さん、下がって!　ライダー!」
「はい。桜。」
「この…、馬鹿サーヴァント!」
凛は、アーチャーを睨んで叫んだ。
「ホホホ…。この布陣を、ライダーひとりで突破できると?」
「俺を忘れてないか?　セイバーのみならず、アーチャーまで…!」

「ひっ！　セイバー、アーチャー！　アイツを殺しなさい!!」
「承知した。」
「っ…し、ろう…。」
リミッター解除をして筋肉を膨張させた士郎に恐れをなしたキャスターが、アーチャーとセイバーに命じた。
二人が襲いかかってくる。
「ふんっ!」
二人の武器が筋肉で弾かれる。
「くっ、なんという強度だ！　デタラメ筋肉め!!」
「シロウ…逃げて……。」
「歯ぁ…、食いしばれよ?」
「ハッ!?」
次の瞬間、アーチャーの横っ面に、士郎の拳がめり込み、アーチャーの身体が遙か彼方へ吹っ飛んでいった。
「ひぃ！　ひぃ！　ひいいいいい!!」
キャスターは、アーチャーがいなくなったことで、ひきつけを起こしながら悲鳴を上げた。

「セイバー…。」
「シロウ…。」
「セイバー！　宝具を！」
「隙がでけぇんだよ!!」
「す、ストライク・エア!!」
「っ!!」
突風の一撃が士郎の胴体を襲い、数メートル後ろへと飛ばされた。
しかし士郎はすぐに体勢を整え、立ち直る。しかし無傷。
その直後、アーチャーの剣が、数本、矢のような速度で飛んできた。
『ブロークン・ファンタズム』
そういう詠唱がどこからか聞こえた直後、士郎の目の前でその数本の剣が大爆発した。
「せんぱーーーーい!!」
「シローーーウ!!」
桜とセイバーが叫んだ。
「ほ…ホホホ…、まさかこんな手をアイツ…持ってたなんて…。勝った…勝ったわ！」
「おおおおおおおおおおおお!!」

「えっ？」

爆発による煙の中を、士郎が飛び出してきた。

あちこち焦げ、頭から血を僅かに垂らしていて、無傷とは言いがたいが、ほとんど怪我をしていない。

一瞬ぼう然としたキャスターに向け、士郎が拳を振りかぶろうとした。

しかし、キャスターの身体を、庇い、一緒に転がって士郎の拳から逃れた人物がいた。

「葛木！」

「宗一郎様！」

「逃げるぞ、キャスター。」

「は、はい！」

葛木が冷静な声でそういうと、キャスターが杖を振って、凄まじい光を放ち、セイバーと共に消えた。おそらく遠くに吹っ飛ばされたアーチャーもいないだろう。

「くっそおおおおおおおおお!!」

「先輩…。」

悔しさに地面を殴る士郎。

アーチャーの離反による、士郎達の敗北だった。

ＳＳ１５　アーチャーとの一騎打ち

キャスター達が逃げた後、士郎の怪我の手当のため、一旦退却した。
「まさか、あんたが怪我をするなんて…。」
「さすがにあの一撃は効いた…。」
士郎は、頭に包帯を巻いて、身体のあちこちにうけた火傷と軽い裂けた傷を手当てしてもらっていた。
「なんなんですか？　剣が爆発したように見えたんですけど？」
「おそらく…、アーチャーの宝具ね。」
「凛も把握していないのですか？」
「アイツ…真名が分からないのよ。」
「えっ？」
「私がメチャクチャな形で召喚したせいで記憶が混濁していて、真名が分からないって言ってね……。まさか本当の目的が士郎を殺すことだったなんて…。そりゃ、真名を知られるわけにはいかないわけだわ。」
「彼は、一体なぜ、士郎を？」

「それは分からない。」
「許せない…。」
「桜？」
「先輩を殺そうとするなんて、許せない…！」
「桜…。ありがとな。」
「先輩…。私…私…。」
「ほら、泣くな。俺は生きてるから。」
泣き出す桜を士郎が抱きしめて慰めた。
「はあ……。あら？」
「ん？」
「あんた、傷が……。」
ちょっと目を離した時、士郎の身体の表面の傷が無くなっていた。
「ん？　ああ…そういうや、俺、昔から傷の治りが早いんだよな。」
「えっ？　普通そんなのおかしいわよ？」
「そうなのか？　これが普通だと思ってたけど。」
「はあ…、ほんとデタラメね…。」
アーチャーから受けた傷は、すべて癒えていた。包帯を外してみても、そこには傷

跡ひとつ残っていなかった。
「まあ、とにかく……、アーチャーが裏切った以上、遠坂も脱落ってわけか…。」
「笑いたきゃ笑いなさいよ…。」
「笑うかよ。」
「けど、諦めてないから。」
「っと言うと？」
「私は、令呪を引っぺがす方法を知ってるわ。」
「姉さん！　どうしてそのことを…。」
「馬鹿ね。敵に塩を送るようなことするわけないでしょ？」
「では、あなたならば奪われた令呪を取り返せると？」
「ええ。」
「先輩！　聞きましたか！」
「ああ。……頼めないか？　遠坂。」
「……あんたには貸しがあるものね。協力してあげるわよ。」
「ありがとな。」
「礼なんていらないわ。」

「オーっす。」

「ランサー。また勝負か?」

そこへランサーが実体化して現れた。

「ちげぇよ。そうしたいのは山々なんだが…、悪い知らせだ。」

「なんだ?」

「キャスターが言峰教会を襲撃した。言峰綺礼は行方不明。生死不明だ。」

「なんですって!」

ランサーからの言葉に凛が声を上げた。

「で、お前らどうするよ? 聞いた話じゃ、アーチャーの野郎も離反してキャスターの傘下に入ったらしいな。ライダーひとりしかいない状況で、どうやって突破する気だ?」

「お前には関係ない話だろ?」

「俺にしてみりゃ、坊主が脱落するのは見てらんねぇの。坊主をぶっ殺すのは俺なんだからな。」

「殺されてやる気はないぞ。」

「いいや。必ず殺すからな。…じゃあな。」

そう言い残すとランサーは消えた。
「って…ことは、今、キャスターは、教会にいるってことか。」
「そうみたいね。どうする?」
「決まってるだろ? 今度こそぶっ飛ばして、令呪を取り返す。。」
「ええ。そうね。そう言うと思ったわ。」
「でも先輩…怪我は?」
「もう治った。」
士郎は、ストレッチをした。
そして一行は、キャスターがいるであろう、言峰教会へ向かった。

＊＊＊

言峰教会に来てみると、不気味な静けさがたちこめていた。
「見張りも立ててないなんてね…。」
「とにかく、今のうちに行くぞ。」

「待ってください。」
「どうしたの、ライダー?」
「来ます。」
その時、教会の屋根の上から何かが飛び降りてきた。
「セイバー!?」
士郎達の前に、セイバーが飛び降り、剣を向けてきた。
その顔は、無表情だ。
「どうやら…、令呪の強制力に堕ちてるわね。」
「セイバー…。」
「ライダー…、悪いけど、セイバーの相手をしてくれる? その間に、私達がキャスターから令呪を奪い返すから、それまで頑張って。」
「頼めるか? ライダー。」
「分かりました。」
「桜。頼むわよ。」
「ええ。先輩…、頑張って!」
「行ってくる、桜。」
凛と士郎が言峰教会に向かって走る。

それを阻もうとしたセイバーを、ライダーが阻んだ。
「貴女の相手は、私です。」
「……っ…。」
「セイバー。辛いでしょうが、もう少しの辛抱です。」
セイバーとライダーの戦いが始まった。

＊＊＊

凛と士郎が言峰教会の奥へと進む。
そして、奥の方の開けた場所に出た。
そこには、アーチャーが一人、立っていた。
「待っていたぞ。」
「アーチャー…。」
「キャスターは、どこ?」
「知りたければ、私を倒してからだ。ただし、衛宮士郎。お前と1対1でだ。」

「なんですって?」
「いいだろう。」
「士郎。」
「遠坂、お前は下がってろ。」
「……勝ちなさいよ。」
「分かってる。」
そう言葉を交わしてから、士郎は前へ出た。
そして、アーチャーと真っ向から対峙する。
「正直な話…、お前に勝つビジョンが見えなかった…。だが…、あの時の、アレ（ブロークン・ファンタズム）で分かった。私はお前に勝てんことはないとな。」
「ああ。すげぇ一撃だったぜ。アレは。」
「ならば、私…いや、俺は全てを使い、お前を殺す!!」
「来るか!?」
士郎がリミッター解除をして筋肉を膨張させた。
「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ.
Ｓｔｅｅｌ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｏｄｙ,　ａｎｄ　ｆｉｒｅ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｌｏｏｄ.

I have created over a thousand blades.
Unknown to Death.
Nor known to Life.
Have withstood pain to create many weapons.
Yet, those hands will never hold anything.
So as I pray, unlimited blade works!!」

長い詠唱を行い、そして空間が変わった。

それは、赤土の光景、しかし空に歯車が回る、地平線の彼方まで様々な武器が刺さった奇妙な世界。

「こ、固有結界!?」

「それが、おまえの全力か？」

「これは、私の世界だ。そして、これは同時にお前の世界でもある。」

「俺の？」

「しかし、お前はそれを知ることはない。」

「なに？」

「ここで死ぬのだからな。」
アーチャーが、刺さっている武器を抜いた。
それは、伝説上にしか存在しないはずの武具。
しかし士郎には分かった。それが本物ではないことを。
そして漠然とだが理解した。
この世界は、アーチャーが解析・構築し、そして貯蔵してきた武器が収まった世界なのだと。
アーチャーが動いた。
「ふんっ！」
「確かに貴様の筋肉はあり得ないほどの強度を誇る！　だが…。」
アーチャーが次々に武器を手にして攻撃する。
「贋作とはいえ、必ず傷を付ける逸話を持つ武器にどこまで耐えられる!?」
「ぐっ！」
いくつかの武器の攻撃を受けたとき、表面の皮膚が切れた。
「ふ…、いかなる硬度を誇る石といえど、亀裂が入れば脆い！」
アーチャーが口元を釣り上げて笑い、士郎に傷を付けた武器で連続攻撃をした。士郎は腕を組んでガードするが、士郎の身体のあちこちに切り傷ができる。

アーチャーは、贋作のゲイボルクを手にし、士郎に向けて投擲した。
士郎はそれを白羽取りで止めた。その隙に接近したアーチャーが、士郎が脇腹に負った傷口を狙った。
「やっぱりな。」
「っ!?」
「筋肉ぅうううう!!」
刃が傷口に刺さった直後、筋肉を固め、刃を筋肉で挟んで止めた。
「で、デタラメな…!」
「捕まえた!」
「ぐっ!」
抜くことも押すことも出来なくなったアーチャーの手を士郎が掴んだ。
士郎がアーチャーを殴る。あまりの威力に、掴まれていたアーチャーの腕が千切れ、アーチャーは血を飛ばしながら吹っ飛んでいった。
「ごほ…、は、ぁ…!」
「トドメだ!!」
「っ!」
士郎が追撃する。

迫ってきた士郎に向け、アーチャーが口から喉からこみ上げていた血を吹き出して士郎の視界を奪った。

「うっ！」

「ブロー…クン……ファン、タズムⅡ！」

百数本に及ぶ武器がいっぺんに投影され、士郎の周りに集まるや否や、爆発した。

その爆発の威力に、戦いを見ていた凛が吹っ飛び転がった。

そして、爆発が終わったあと、世界が戻った。

ボタボタと全身から千切れた腕と口から血を出すアーチャーが、煙がもうもうと舞う光景を見つめた。

「く、はは、ハハハハ…。」

そして狂ったように、宙を見上げ、どこか晴れやかに笑った。

アーチャーが宙を見上げていた時だった。煙が揺らいだ。

「……はっ？」

ボンッと士郎が飛び出し、アーチャーに向けて拳を振りかぶったのを、アーチャーは、ぼう然とただ突っ立って見ているしか出来なかった。

そして、腹に大きな衝撃。そして思いっきり喉からこみ上げてきた大量の血を、吐き出した。

「確かに、お前の攻撃は効いた。けどな…、同じ手が何度も通じると思うなよ？　攻撃が通じた頃の俺は、過去の物だ!!」
「…あ……ぁ…。」
アーチャーの腹を貫通するのは、士郎の右腕。
「なぁ、アーチャー。聞かせてくれ。お前は、どうして俺を狙った？　お前はなんだ？」
「…ぅ…あ…、さっ…し…の悪い…奴め……。俺は……、お前…だ…。」
「？　お前が、俺？」
「あとは……じぶん…で…かん…が、えろ…。」
フッと笑ったアーチャーが目を閉じた。

＊＊＊

アーチャーは、ふと目を覚ました。
終わった…。っとまず思った。

自分の戦いは、これで終わったのだと。
結局、思考回路が違うだけで、まったく違う可能性へと到達した自分自身（エミヤシロウ）には、勝てなかった。
……勝ちたいと思った。それは素直な気持ちだ。
もし……もし、自分がどこかで思考回路があの士郎のように違えていたなら、違った未来を得ていたかもしれない。自分の消滅という自殺のため、別世界の自分自身を殺そうという暴挙に出ることもなかっただろう。
もしかしたら、羨ましかったのかもしれない……。
「おーい。生きてるかー？」
「……っ？」
「だいじょうぶよ。令呪はちゃんと手にあるでしょ？　それがある限りは死んでないから。」
アーチャーは、感じた。
明らかに魔力の質がおかしいと。
なんというか……、マッスル！っという感じで異様に生気に満ちあふれた力強すぎる魔力だ。
「しかし…、本当によかったのですか、シロウ？」

「ああ。」
「まったく…自分を殺そうとしたサーヴァント…、それも未来の自分を自分のサーヴァントにするなんて、馬鹿じゃないの?」
「凛……、どういうことだね?」
「あっ。起きた。どう、調子は? 魔力はちゃんと通ってる?」
「なんだね…この、なんというか……マッスル…という感じの…妙な魔力は…?」
「あー…、やっぱりそうなのね。」
「確かに、生命力の満ち方は、凛とは比べものにならないでしょう。」
「先輩…、本当にいいんですか? アーチャーを自分のサーヴァントにするなんて…。」
「またあなたを殺そうとするかもしれませんよ?」
「いや、それはそれでいい。それよりも……。」
士郎が、アーチャーの、千切られたはずの腕を掴んだ。
「こんな細っこいのが自分の未来だなんて考えたくないんだ! 鍛え方がまるで足りない! それが我慢ならないんだ! せめて…聖杯戦争の間だけでも鍛えに鍛えて、座に帰った後も鍛えるように躾ける!!」
「あ〜らら。大変ね〜〜〜。」

「な……。」

アーチャーは、士郎達の言葉を聞いて、ガタガタと震えた。

そして見てしまった。

士郎の右手に、凛の手にあったはずの令呪があり、逆に凛の方には、士郎の手にあったセイバーの令呪が移っていた。

つまり……。

「な……、なんでさあああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

それは、かつて自分の口癖だった言葉だった。

SS16　アーチャーの不運

アーチャーは、部屋の隅で、丸まっていた。
キノコ生えそうなほど、暗くなっていて、とてもじゃないが……声をかけられ…。
「ほら、いつまでも現実逃避してても無意味よ。士郎に、あんたの令呪があるんだから、令呪を使い切るか、士郎が死ぬかでもしないと座に帰れないわよ?」
いや、いた。少し前までアーチャーのマスターだった、凛だ。
「それにしても面白いわね。時空がちょっと違えば、こういう未来もあり得たのね。」
「俺は考えたくなかったぞ。」
「どうするの?　このままじゃ、自殺しかねないわよ?」
「よし、じゃあ、令呪で…。」
「それだけはあああああああああああああああああ!!」
アーチャーが転がってきて、そのまま綺麗に土下座して号泣した。
「なあ、アーチャー……、そんなに鍛えるのがイヤか?」
「勘弁してください、勘弁してください勘弁してください…。こんなマッスルな魔力

をこのまま吸ってたら、俺…壊れちゃうぅぅ…。」
「こりゃ、重傷ね…。」
ガクガクガタガタと震えて、祈るように両手を組んで泣きまくり、更に声まで裏返るアーチャーに、凛が同情を隠せなかった。
「あの…先輩。」
「なんだ、桜?」
「提案なんですが…、アーチャーとセイバーをもう一度交換しませんか? なんか、アーチャーが可哀想で…。」
「うーん…。」
「ぜひ、ぜひ、ぜひぜひぜひぜひぜひぜひ! そうしてくれぇぇぇぇぇ!!」
「いやよ。」
「なぜ!?」
「前のマスターを裏切るようなやつを誰が…。」
「謝ります。なんでもします。だからお願いします凛様!!」
「あんたプライドもへったくれもないわね。そこまでイヤなの? で、セイバー的にはどうなの? もしかして今の状態に異論ある?」
「そうですね…。強いて言うなら、ちょっと魔力が物足りなく感じて…。」

「これが普通なの。士郎の方に慣れちゃダメよ。」
「私としては、マッス…。」
「それだけはダメェェェェェェェェ!!」
マッスルなセイバーなど見たくないと凛が叫んだ。
凛が自分を拒絶していて、そして己の早計に、アーチャーは、ますます涙を増して泣いた。
「おバカですね。」
「本当ですよ。先輩の未来なら、先輩より強くないといけません。」
ライダーが呆れ、桜がプンッと怒った。
自分に味方はいないのか…っと、アーチャーは絶望した。
その時。
「おらぁ！　坊主、勝負だぁ!!」
「！　ランサーぁぁぁぁあああああ!!」
「うお!?　どうした弓兵!?」
「頼む！　衛宮士郎を殺してくれぇえええ!!　もしくは、俺を殺してくれえええええ!!」
「ど、どうしたよ…？」

「実は…。」
セイバーが説明した。
「あー…、そりゃおめぇ…運がなかったなぁ？　ダハハハハハ！」
「笑うな!!」
「しっかし、キャスターの奴も、おまえの技で爆発に巻き込まれてお陀仏するなんてな。アイツも運ねぇな。」
実は、キャスター、凛を始末しようとしてあの戦場に入り込んで、アーチャーが最後に放った百数本の贋作武器によるブロークン・ファンタズムに巻き込まれて死んでいた。
しかも爆散して……。
ハッキリ言ってお見せできない有様だったらしいが、そのおかげで、凛は、セイバーとアーチャーの令呪を取り返すことができたのである。
なお、葛木は、キャスターの死を確認すると、自ら命を絶ったのだった……。
「で？　坊主は、この弓兵野郎を手に入れてどうすんだ？」
「鍛え直す。」
「おおっと…。そりゃ大変だ。がんばれよ。」
「見捨てないでぇぇぇぇぇぇぇぇ!!」

「こら、泣きつくな！」
　ランサーの足にしがみついて必死に泣きついて、懇願するアーチャーだった。
「よーし、アーチャー。今から筋トレすっぞ。」
「い…いいいいやだあああああああああああああ!!」
「ほれ、仮にも英霊なんだかよぉ。泣き言言うなって。ほら、離せって。」
「何ならランサーも…。」
「丁重に断る。」
「なら…、おまえも道連れだ!!」
「あっ、てめ、俺まで巻き込む気か!?」
「仕方ないな…。よし二人まとめて鍛えてやる。ほら、行くぞ。」
「てめぇえええ！　弓兵野郎!!」
「ハハハハハハハハハ！　ざまぁ！」
　ランサーとアーチャーが士郎に捕まり、引きずられて行った。
　その後、ご飯の支度をする時間になって、士郎が引きずって持って帰ってきた二人のサーヴァントは、ボロボロにやつれ、気絶していた。

＊＊＊

士郎と桜で、ご飯の支度をしていた時だった。
　家のチャイムが鳴った。
「はーい。」
「お兄ちゃーーーん！」
「イリヤ！」
「セイバーを取られたって本当!?」
「えっ、ああ…その話か…。」
「私が取り返してこようか？」
「私が…、なんですか？」
「あれ、セイバーいるじゃん！」
「今は私のサーヴァントよ。」
「リン！　私のって…、じゃあお兄ちゃんから取ったの!?」
「違うわよ。交換したのよ。アーチャーとね。」
「アーチャーと？」

「ああ。ちょっと色々とあってな。」
そして、イリヤを家に上げ、事情を説明した。
「ふーん。そこにいるアーチャーが、お兄ちゃんの未来の姿なの？　全然違うじゃん。」
「うっ…。」
ランサーと共に、ぐったり畳の上に倒れているアーチャーに、イリヤの言葉がグサリと刺さる。
「でも言われてみれば…、顔の骨格はお兄ちゃんに似てるかもね。髪の毛下ろしたせいかもしれないけど。目つき悪かったから全然気づかなかった。」
「私だって、この世界線の士郎と同一人物だったら、当たりだって思えたんだけどね。」
「うぐっ！」
凛の言葉がさらに追い打ちをかける。
「アーチャー殿…、泣いていいと思います…。」
背の高い身体を丸めてシクシクっと泣いているアーチャーに、セイバーが哀れむように言った。
「それより、良い匂いがするね！　私も食べたーい！」
「分かった分かった。イリヤの分も作るから待ってろ。」

「わーい！」
「はー…。」
「桜…。気を遣わなくて良いのですよ？」
「だいじょうぶよ、ライダー。」
「あっ…。」
　士郎は、ハッとした。
　慎二を殺した敵が目の前にいるのになぜ気づかなかったのだと。
「どっち道…、アイツ（慎二）は、いつか誰かに殺されていたでしょうね。」
　凛が冷たく言った。
「遠坂…。」
「引きずりすぎても、後に響くだけよ。でも…忘れることの方がもっと辛いでしょうね。」
「姉さん…。」
「いい？　桜。忘れちゃダメよ。でも、引きずり過ぎないようにね。」
「……うん。」
　桜は、コクリッと頷いた。
　その後、夕飯となったが。

その頃には回復したランサーと、アーチャーが士郎特製・筋肉増強食（？）を前に、再び気絶しかけるのはまた別の話である。

ＳＳ１７　士郎の魔力による変化?

「士郎特製の…筋肉増強食（?）…、美味しそうでしたね。」
「セイバー…、お願いだからそういうことに興味持たないで…。」
「味は保証できますよ?」
「食べたの!?」
「というか…、あの食事、私と先輩がレシピを考えて作ったから。味見はしてますよ?」
「あ、そういうことね…。っていうか、どこに売り出すつもりだったのよ?」
「文化祭で出そうかと…。」
「却下。」
「先生にも却下されました…。どうしてなのかなぁ?」
桜が不思議そうに首を傾げる姿に、凛は、ゲンナリしながら、グロッキー状態で突っ伏しているアーチャーとランサーを見た。
「味は…いいんだよ…味は…。」

ランサーがボソボソと言った。
「けどな……。俺達サーヴァントってのは、座から投影されたもんなんだよ…。だから記憶だけは持ち帰れても、鍛えた分は持ち帰れねぇよ…。」
「えっ、そうなの？　なんでそのことを早く言わないんですか？」
「いや…、言おうと思ったんだが…、聞かなくて…。」
「まあ、アイツ（士郎）は、筋肉がらみのことになると話を聞かないところがあるものね。」
「嬢ちゃんは知ってたろ…。なんで言わない？」
「だって、面白そうだったんだもの。」
「彼奴め…。筋肉はすべてを裏切らないだと…！　私の過去も知らぬくせに…！」
突っ伏していたアーチャーが起き上がって、机に脚を乗せて叫んだ。
「アレが、俺と同一人物なだとと、認めんぞおおおおおおおおお!!」
「でも、どう否定したって、別時空の同一人物なんでしょ？」
「認めんと言ったら認めん!!」
「あー、あー。うるさいうるさい。シローーウ。コイツ精神的にも軟弱っぽいわよ。」
「ハッ!?」
「アーチャー…。」

アーチャーの背後から、肩にポンッと士郎の手が置かれた。
アーチャーが、ドッと汗をかいた。
「そうかそうか。おまえに足りないのは、筋肉のみならず、精神的な面での修行だったか…。」
「いや…その……コレは…ただの…ま、まさ、摩擦…。」
ガタガタ、ガクガクっと震え上がるアーチャー。しかし士郎は、後ろでニッコリと笑う。
「飯も食ったし、励もうか?」
「いいいいやぁだあああああああああああ!!」
「……南無。」
アーチャーの悲鳴をＢＧＭに、ランサーが両手を合せた。

＊＊＊

「それで?　いっそ殺せと?」

その後、立ってるライダーの前に座り込んで、シクシク…っと両手で顔を覆って泣いているアーチャー。

「だって…、だって…、アイツ…きっと俺の記憶を共有しても、無意味だと思うと……。というか、単純に見られたくない…。」

身長１８０超の男が、超女々しくシクシクめそめそ泣いているのは、正直な話、結構な絵面だ。

「このまま、アイツのマッスル魔力まみれになって、座まで筋肉に汚染されるよりは、殺してもらって…、早くアイツと縁を切りたい…！」

「では、貴方は自分の消滅という目的を止めて、これまで通り座に座っておくということですね？」

「それは…。」

「仮に貴方が他のエミヤシロウを殺しても、この世界線の士郎が残っていたら、貴方の目的は達成されないのでは？」

「うぅぅ…。」

「ですが…。」

っと、ライダーが一息をおいて言った。

「この世界線の士郎は、貴方のようには決してならないでしょう。ですから、すでに道

は違えていて間違いないのでは?」
「!」
それは盲点だったとアーチャーが、光明が見えたと顔を輝かせた。
しかし…。
「しかし…、その代わり、筋肉の神の座にでもついてそうな新たなエミヤシロウができあがって、貴方が上書きされてしまう可能性も…。」
「うわあああああああああああああああ!!」
容易に想像できてしまい、アーチャーが頭を抱えて絶叫した。
「そして、その傍らには常に、桜が寄る辺として存在しているのです。桜にとってはこの上ない幸福。」
しかし、アーチャーは、聞いていない。それどころじゃなかった。
「確かに私は自らの消滅を願ったが、筋肉に上書きされるのは望んでない!」
「もしかしたらの話ですよ?」
「余計なことを言いおって、貴様ああアアアアアア!!」
「おっと。」
勢いで殴りかかってきたアーチャーを、ライダーがヒョイッと避けた。
そしてさらに足払いまでかける。

「うぉ！」

そうしたことで、当たり損ねたアーチャーの拳が、地面に当たった。

その瞬間、地面が砕け、そこそこ大きなクレーターが出来た。

「……えっ？」

「まあ？　これは…もしや…。」

ワナワナと震えるアーチャーは、自分のステータスを確認した。

筋力Ｄ　↓　Ａ＋＋。

耐久Ｃ　↓　Ａ。

敏捷Ｃ　↓　Ｂ。

魔力（変化無し）。

幸運Ｅ　↓　Ｅ―。

追加スキル　『筋肉魔法（初級）』。

アーチャーは、それを確認し終えると、フウッと白目を剥いて倒れた。

ＳＳ１８　十二の試練（ゴッド・ハンド）

燃え尽きたよ……。

っという台詞がバックにありそうなほど、アーチャーは、白くなっていた。

「どうしたのよ？」

「実は…、どうやら士郎の魔力を受けてステータスがかなりアップしていたようなのです。」

アーチャーの様子がおかしいことについて、アーチャーがそうなった原因を見ていたライダーが答えた。

「あら？　それならいいじゃない。」

「どうやら、スキルまで追加されていたらしく……。」

「ますますいいじゃない。何が気に入らないの？」

「……筋肉魔法…初級というのが…。」

「あらま……。影響あったのね。」

座からのコピーでしかないサーヴァントゆえに、マスターからの影響力も大。

逆に魔力の塊でしかない仮初めの肉体だったことが、悪かったらしい。

「先輩！　聞きましたか！　アーチャーが、先輩の魔法を使えるようなったんですよ！」
「おお！　そいつはめでたい！」
「今日は、お赤飯ですね！」
「やぁぁめぇぇてぇぇぇぇ…。」
真っ白になってたアーチャーが顔を両手で覆って、泣きながら叫んだ。
「おにーーちゃーーーん！」
そこへイリヤが来た。
「イリヤか。」
「えへへ。」
イリヤが士郎に抱きついた。
「ねえねえ、バーサーカーと戦う？」
「お？　いいのか？」
「うん！　バーサーカーも、戦いたいって！」
「よしゃあああ！　桜、ちょっと庭でバーサーカーと戦ってくるから！」
「頑張ってください、先輩！」

士郎は、嬉しそうに走って行った。

＊＊＊

バーサーカーは、斧剣を手放し、素手で士郎と対峙した。士郎相手には、武器がほとんど意味を成さないと分かったらしい。

士郎も士郎でリミッター解除をして筋肉を膨張させ、臨戦態勢だ。

「では…、試合開始！」

殺し合いではなく、あくまで試合なのだ。

「おおおおおおおお！」

両者が同時に動いた。

ゴガンッ！とお互いが振りかぶった拳がぶつかった。

それだけで空気が震える。

その後は、拳と拳の打ち合いだ。

時に殴り、殴られ、そして…。

「ピストル拳！」
至近距離から放たれた拳の圧が、バーサーカーの腹の横を大きく抉った。
しかし、瞬く間に再生する。
「おにいちゃーーん！　バーサーカーはね。１２回殺さないと死なない身体なの！」
「なにそれ!?」
「だからあと１０回までなら生き返るよ！　でもね…。」
イリヤが、自らの身体にある令呪を輝かせた。
「狂いなさい、バーサーカー！」
途端、バーサーカーが狂化された。
「おお！　すごい力を感じるぜ…！　それがおまえの全力か!?」
「そうよ！　死なないようあがきなさいシロウ！」
途端バーサーカーが巨体からは想像もできない速度で突撃してきた。
士郎は、その突進を、自身も突進することで止めた。だがあまりの馬力に数メートル後ろに下がらされた。
「ぐおおお！　す、すげぇえ！」
「これがバーサーカークラスの特性、狂化！　理性と引き換えに大幅にステータスをアップさせるのよ！」

「本当だ…、確かにすげぇ！」
「降参する？」
「いいや！」
むしろ生き生きと返事をする士郎。
振りかぶられたバーサーカーの拳を両手で受け止めた。
掴んだその大きな手を両手で握りしめ、潰す。
バーサーカーが苦悶の声を上げた瞬間、懐に入った士郎が下からアッパーカットを決めた。そのあまりの拳の威力によって、バーサーカーの頭部が粉砕された。
しかし、バーサーカーの失われた頭部が再生し、再び士郎に襲いかかる。
「すごいすごい！　今ので2回目…。」
イリヤが興奮しまくっていた。
「ピストル拳！」
再び放たれた拳の圧。だが…。
「ごめんね、お兄ちゃん。バーサーカーにはね。一度受けた攻撃に対して耐性ができる性質があるの。」
「なんて反則な宝具よ!?」
「私が戦っても、勝てる見込みは低い…！」

凛とセイバーが戦慄した。
「そいつは…すげぇ！　ちょうどいい！」
「つまりお兄ちゃんの今までの攻撃は…。」
「ピストル拳！」
「ねえ、聞いてないの～？」
「ピストル拳！」
「ねえってば～。」
「ピストル…拳!!」
三度目に放たれたピストル拳が、バーサーカーの胴体を半分以上を粉砕した。
「えっ！　うそ…。」
「ちょうどいいぜ…。これなら限界を超えられる……。これこそ、俺が求めていた境地に至られるための究極の壁だ！」
これまでの限界を超えて放ったピストル拳を放った握りこぶしから血が垂れていた。
「ったく……、とんでもねぇ坊主だな…。生き返る上に、耐性ができる相手を、サンドバックにするなんてよぉ…。」
「あんたまだいたの？」

「見物ぐらいいいだろ？」
そんな会話をランサーと凛がしていた。
その間に、限界を超える一撃を放ち続ける士郎は、身体のあちこちから血管が切れて血を流しながらバーサーカーの命の残りストックを削っていった。
「ば、バーサーカー!!」
このままでは、バーサーカーの命が完全に尽きると感じたイリヤが悲鳴じみた声を漏らした。
そして、とうとう、残る命がひとつだけとなった……。
そこで士郎は、攻撃を止めた。
「シロウお兄ちゃん…？」
「今回は、俺の勝ちだ。異論は無いな？」
「う、うん！」
「バーサーカー、おまえの力には驚かされた。また戦ってくれるか!?」
すると倒れていたバーサーカーが、起き上がり、頷いた。
「殺さないの？」
「なあ、イリヤ。バーサーカーの命の残りって回復しないのか？」
「ううん。時間が経てば回復するよ。」

「そっか。じゃあ、次に会うときは、全部回復させてからだな。」
「ちょ、士郎!?」
「先輩、さすがです!」
驚愕する凛とは裏腹に、尊敬のまなざしを向ける桜。
「ほ、本当に…いいの？　今度戦ったら、シロウ、死んじゃうかも…。」
「俺は死なん。桜を残して死ねるか。そして、俺はまだ至っていないんだ。」
「?」
「ユーリ兄ちゃんの境地に！　このままじゃダメだ！　だからバーサーカーとこれから戦い続けて限界を超え続けて、今（現在）の自分を超える!!　イリヤ!」
「は、ひぃ!?」
「協力してくれないか？　バーサーカーに。」
「…い、いいけど……。でも、私もアインツベルンのマスターとして聖杯を取らないといけないの…。」
「そっか…。」
つまり、士郎の願いを叶えるには、バーサーカーを殺すしかないのだ。
「あああああ！　俺はどうしたらいい？　バーサーカーを失うのは惜しい！　けどユーリ兄ちゃんに会うためには、聖杯が必要…。俺は…俺は!」

「先輩…。」
「桜…、俺は、どうしたらいいんだ？」
「それは…。」
「ごめんね。シロウ…。協力できなくて…。」
「いや、いいんだ。無理を言ったのはこっちなんだからな。」
「で、でも、聖杯戦争の間だけなら、協力はできるかも！」
「そっか…。ありがとな。」
「ねえ、シロウお兄ちゃん。」
「なんだ？」
「アインツベルンに来る気ない？」
「どうしてだ？」
「あのね…。」
　するとイリヤは、自分と士郎を育ててくれた衛宮切嗣が親子関係であることを語った。
　つまりイリヤは義理の姉であるのだと。
「はー、そうだったのか。だからイリヤは俺を知ってたのか。」
「そうだよ。だからね、最後の家族だから…一緒にいたいの…。」

「でもな…。」
「もちろん、そっちの可愛い恋人さんも一緒でいいよ。お姉ちゃんとして弟の恋人は大事にするよ!」
「そうか…。」
「先輩…。」
「桜…。」
「ダメよ。」
「どうしてだ、遠坂。」
「桜を連れていくなら、私はあんた達の仲を認めないわよ。」
「う…。」
「別にリンの公認なんていらないわ。」
「そうはいかないの。」
「あら? やる気?」
「こっちにはセイバーがいるのよ? 残り命のスットクがないバーサーカーしかいないあんたが勝てるとでも?」
「む…。」
「考えさせてくれ。すぐには返事はできない。」

「…分かった。」
　イリヤは残念そうに俯いた。
　そしてイリヤは、バーサーカーと共に去って行った。
「う…っ。」
「先輩！」
「あーもう、限界を１０回以上も超えるなんて馬鹿やるからよ！」
　イリヤがいなくなったあと、膝をつく士郎に桜が駆け寄り、凛が呆れたと声を漏らしたのだった。
「けど…。」
「けど？」
「この脈動…、筋肉の喜びを感じるぜ！」
「いや、それ勘違いだろ。」
　思わずツッコむランサーだった。

SS19　アンリミテッド・ハードワークス（無限の筋トレ）

「シロウは、私の鞘だったのですね。」
「……その台詞…。なんか妙な感じに感じちゃうわね。」
士郎の傷の治りの早さの異常性。
それをちょっと調べてみたら、セイバーのエクスカリバーの鞘が体内にあったことが判明した。
「なるほど。ですから、士郎は、肉体の限界を遙かに超える修行を行っても耐えることが出来たのです。肉体の限界による崩壊を鞘によって防いでいたのですから。」
「じゃあ、この馬鹿の非常識筋肉の元凶ってわけ？」
「…かもしれませんね。」
「けど、ユーリ兄ちゃんには、鞘なんてなかったけど？」
「そりゃ、そいつが異常よ。ある意味でね。」
「先輩？　どうしました？」
「……俺自身の力で筋肉魔法を手に入れたわけじゃなかったのか…。」

「いいえ。運も実力のうちって言いますよ？　先輩に鞘がなかったらとっくの昔に身体がダメになってたんです。つまり鞘という運が巡ってきたからこそ、先輩の筋肉魔法が手に入ったと考えませんか？」
「桜…。そうか。そうだな。」
　暗くなっていた士郎だったが、桜の励ましを受け、顔色を明るくした。
「私としては、鞘をセイバーが持つべきだと思うけど……。この状態じゃ…。」
「ええ…。シロウの筋肉に凄まじく癒着していて、摘出は困難です。」
「いや、取る方法はある。」
「あら、アーチャー。」
　そこへアーチャーが来て言った。
「投影魔術だ。」
「投影魔術？」
「そうだ。魔力を使い、無から有を創り出す魔術。それを使い、鞘を投影して再現すればいい。」
「そう言われたって、俺、鞘の形なんて知らないぞ？」
「貴様…、セイバーの記憶を見ていないのか？」
「ん？　ああ。なんか見たような気がするけど、別に気にしてなかったから覚えてな

い。」

「そこにヒントあったというのに！」

アーチャーが、ワーっと両手で顔を覆って泣き出した。

「あんたよく泣くわねぇ…。」

「これが泣かずにいられるか！　コイツの魔術回路は、本来は投影魔術と固有結界に特化した超特殊な特化型なんだ！　それが筋肉に塗りつぶされていると考えたら…。うぅぅ。」

「筋肉の何が悪いってんだ！」

「無駄よ。アーチャー…。この筋肉バカは、どこまで行っても筋肉しかないから。」

「では、試してみてはいかがですか？」

ライダーが言った。

「アーチャーの言うとおり、投影魔術に特化した体質ならば、教えてもらえばできるんじゃないですか？　試しに何か作ってみては？」

「うーん。……じゃあ、筋トレ道具でも作ってみるか。」

「やっぱそうくる？」

「アーチャー。やり方教えてくれ。」

士郎は、アーチャーに投影魔術のやり方を教えてもらった。

「では……。」
　士郎は意識を集中した。
「投影開始。」
　そして士郎の手の中に、ダンベルができあがった。
「おお！　ホントだ、できた!!」
「嘘でしょ!?　教えてもらってすぐじゃない！」
「でも…。」
　しかし、投影されたダンベルは、すぐにボロボロと崩れていった。
「所詮は幻想。本物には及ばんのだ。」
「なんだよそれ…。こんな脆いなら使い道ないじゃねーかよ。」
「鍛えれば、私のアンリミテッド・ブレード・ワークスのように、自分の世界に武器を貯蔵しておける。それが、私とお前の世界であり、力だ。」
「まてよ…。」
「ん?」
「確か、アーチャー、おまえ、あの世界を出すとき呪文を唱えてただろ?」
「ああ…、そうだが?」
「なら、呪文さえ分かれば、俺にも展開できるってことだろ?　今なんか思い付いた。」

「……えっ？」

そして土郎が詠唱を始めた。

『体は筋肉でできている』
「おい…？」
『血潮はタンパク質、心は不屈』
「おい！」
『幾たびの苦痛を超え強化』
「聞いているのか！」
『ただの一度の満足もなく』
「やめろ！」
『ただの一度の慢心もなし　』
「やめろと言っている！」
『担い手はここに1人極限の地へと至らんとする』
「やめろおおおお！」
『ならば、我が生涯に一片の悔いは残さず』
「やめろと言っているんだあああ！」

『この体は無限の筋肉でできていた！』
「うわあああ！」
『アンリミテッド＝ハードワークス（無限の筋トレ）』

その瞬間、世界が変わった。
赤土の色は同じだ。
だが……、問題は地平線の彼方まで並ぶ……。
「筋トレ道具うううう!?」
「ああ！　空に謎の筋肉の神のような存在が!!」
「うわあああああああああああああああああああああああああああああ!!」
「あらあら、とうとう至ったのですね。士郎。」
「これが…、先輩の世界…。」
「ああ！　桜、その姿は！」
「えっ？　あれ？　なにこれ？」
「なるほど…、おまけで桜が近くにいれば、桜が寄る辺として存在できるわけなのですね。その花嫁衣装がその証拠！」
「じゃ、じゃあ、私、先輩の…。」

桜は、自分の姿を見て、赤面した。（強いて言うなら、パールヴァティーのちょっと露出が多い版みたいな格好）

「ええ。自他共に花嫁として受け入れられているのですよ、桜。」

「せんぱーーーい！」

「桜！」

「認めないわよおおおおおおおお!!」

桜と士郎が抱き合おうとしたとき、凛が間に入って止めた。

「うっ。」

次の瞬間、世界が元に戻った。

「いきなり固有結界を展開したから、身体に負荷がかかったのですね。」

「ああ…よかった…。このままだったら、あの空にいた筋肉神に染め上げられてるところだったわ…。」

「桜、しっかり！」

ぐったりし、元の姿に戻った桜をライダーが支えた。

「固有結界のくせに、桜に影響を及ぼすなんて…。士郎！　二度と、絶対に使うんじゃないわよ！　士郎、聞いてるの!?」

「ダメです。力を使い果たして返事ができないみたいです。」

「魔力の濃度はすごくても、量は少ないのね。」
「いいえ。おそらくですが、筋肉に魔力が行きすぎてて、他に回せなくなっているのでは？」
筋肉魔法からは、微量ながら魔力が含まれている。おそらく魔術回路が筋肉魔法仕様にデタラメに構築されてしまって、他の魔術を使うのに適さなくなってしまったのではないか？
それがライダーの見解だった。

士郎は、『アンリミテッド・ハードワークス（無限の筋トレ）』を取得した。

「…お…俺の世界（無限の剣製）が、筋肉に汚染された……。」
アーチャーは、ひとり、ガクッと両膝と両手をついて、号泣した。

ＳＳ２０　イリヤの死

「どうします？　先輩…、アレ…。」
「放って置いた方が良いだろ。」
あれからアーチャーは、部屋の隅っこで身体を丸くして暗くなっていた。
そこだけキノコ生えそうなほどジメッとした雰囲気だ。
主夫アーチャーが使い物にならないので、っというわけで現在食事の支度を士郎と桜でしていた。
桜はようやく士郎と二人きりで台所に立てて、喜んでいた。
「はぁふうぅ…。」
「どうした、桜？」
「先輩…私、幸せです。」
「桜…。」
「先輩…。」
「はいはい、早くご飯の支度しましょうね。」

「姉さん……。」
「あら？　手伝ってあげてるのに、なに？」
「…いえ。」
凛も料理できたのだ。宝石魔法の都合上、金銭が常にピンチなため、自炊で節約しているのである。
「しっかし、意外よね～。まさか桜が最初の頃はおにぎりも作れないほどだったなんて。」
「悪いですか？」
「ううん。私だって最初の頃はそんなもんだったもの。妹の成長は素直に嬉しいわよ。」
「姉さん…。」
「桜はもうどこに嫁に出しても恥ずかしくないよ。」
「先輩。」
「もちろん貰うのは、俺…。」
「それとこれとは話は別よ。」
「ちぇ…。あっ、やべ、調味料が切れてる。買い物に行かないと。桜、行くか？」
「はい！」

「ちょっと、料理が途中よ？」
「遠坂が見といてくれよ。そこで煮てるの見ててくれればいいから。」
「…う…。」
自分が料理できることが思わぬ枷になり、士郎と桜が二人きりになるのを止められず、凛は少し呻いた。

＊＊＊

いつもの商店街で必要な物を買った。
その帰り道だった。
ふいに士郎が立ち止まった。
「先輩？」
「……誰だ？」
「？」
「ふっ。雑種は鼻が利くようだな。」

偉そうな口調の男の声が後ろから聞こえた。
二人が振り返ると、そこにいたのは、金髪と赤い瞳の男が一人立っていた。
「この感じ…、サーヴァントか？」
「えっ？」
桜が訝しんだ。
残るサーヴァントは、セイバー、ライダー、アーチャー、ランサー、バーサーカーだけだ。それ以外のサーヴァントはありえない。
しかし士郎は、警戒している。
美しい金色の男は、不敵に笑う。
「コレの匂いを感じたか？」
そう言って取り出したのは、小さな心臓だった。
それも本物だ。
しかもドクン、ドクンっと鼓動を刻んでいる。
それが人間の心臓の形状をしていることにすぐに気づいた。
「それ……。」
「どこぞの神話の集大成の英霊の飼い主のものよ。」
その言葉に、桜はすぐに察し、顔から血の気が失せた。

「知っていたか？　アインツベルンのホムンクルスは、聖杯の器。すなわち、コレ（心臓）は、未完成の聖杯。」
「てめぇ…!!」
「どこぞの雑種があの聖杯の器のペットの残る命をひとつだけにしていたから、実に簡単だったぞ。」
　それを聞いて今度は士郎が目を見開き、青ざめた。
「なんてことを…。」
　桜がブルブルと震えながら言った。
「それで…。てめぇは、イリヤの心臓を手にいれて何をする気だ!?」
「さてな？」
　相手の男はとぼけたように言った。
　士郎がリミッター解除をして筋肉を膨張させた。
「ほう？　面白い身体をしているな？」
「許さねぇ!!」
「今日は、コレを見せに来ただけだ。」
「逃がすかぁぁぁぁ!!」
「ふふふ。」

次の瞬間、士郎の周りに見えない空間から鎖が飛び出してきて士郎の身体を絡め取った。
「先輩！」
「こんな鎖…。」
士郎は強引に身体を振って、鎖を引きちぎった。
「ほう？　我がエルキドゥをその身だけで破るとは…。」
「えるきどぅ…？　まさか…おまえ…。」
「察したか？　では、な。」
「待て！」
男は、その場から消えた。
男が消えた後、士郎は身体を元に戻した。
「先輩…。」
「くそ……、くそおおおおおおおおおおおお!!」
アスファルトを殴りつけ、士郎は叫んだ。

＊＊＊

士郎と桜は悔しさと悲しみを引きずりながら帰った。
「！　どうしたのですか？」
「セイバー…。」
「うぅぅ…。」
出迎えたセイバーが聞くと、士郎は俯き、桜は泣いていた。
そして、全員を集め、何があったのか話した。
「イリヤが…、今回の聖杯戦争の器だったのね…。」
「知ってたのか？」
「ううん。けど、前の聖杯戦争でも、アインツベルンは、ホムンクルスを使って聖杯を完成させようとしていたっていうのは聞いてたわ。だから…、恐らく今回も同じ手を使ったのね。」
「そして、その謎のサーヴァントに……。」
「俺のせいだ…。」
「先輩。自分を責めないだください。」
「本当にサーヴァントだったのですか？」

「あの気配は間違いなく、セイバー達と同じだ。それよりも、なにかたちの悪い感じだったが…。」
「貴様は、何かヒントを得ているのだろう？」
　復帰したアーチャーが聞いた。
「ああ…、アイツ、どこからともなく出してきた鎖のことをエルキドゥって言ってた。つまり…たぶんだけど…。」
「もしや、ギルガメッシュ!?」
「知ってるのか？」
「ええ…。前の聖杯戦争で、アーチャークラスとして召喚されたサーヴァントです。なぜ、彼が…。」
「イリヤの心臓を俺達に見せびらかしに来ただけだったらしいが…。」
「ってことは、前のギルガメッシュのマスターがいるってことよね？　教会は何をしているのかしら？」
　凛が言うには、教会は、聖杯戦争の監督役であり、前のサーヴァントが生き残って次の聖杯戦争に介入してくるなどというイレギュラーは、許さないはずだということだ。
「確認する必要があるわね。」

「言峰教会に行くのか？　俺も行く。」
「先輩…。」
「桜は留守しててくれるか？」
「でも…。」
「だいじょうぶだ。」
心配する桜の頭を、士郎は撫で、微笑んだ。
しかし、それでも桜の悪い予感は拭えなかった。

ＳＳ２１　散りゆく者達

言峰教会に、凛と士郎、そしてライダーとアーチャーが来た。
「アーチャーはともかく、なんでライダーが？」
「桜が心配していたので。」
「だいじょうぶだって言ったのに…。」
「念には念をです。」
「そういう遠坂は、なんでセイバーを連れてこなかったんだ？」
「桜を一人で残しておけるわけないでしょ？」
「それじゃあ本末転倒だ。」
桜のサーヴァントが来て、凛のサーヴァントが来ないのでは、ずいぶんと戦力の差があるだろう。
「今はそんなことより、綺礼を探すわよ。
言峰教会に来たはいいが、無人だった。
不気味な静けさのある教会の中を、綺礼を探して回る。
「あら？」

「どうした?」
「こんなところに…、階段なんてあったかしら?」
凛が今まで見たことがなかった階段を見つけた。
その階段は地下に続いている。
「なにかしら?　嫌な感じ……。」
「どうする?」
「……もしかしたら、この地下にいるかもしれないから、行ってみるわ。」
「分かった。」
「では、私が見張りをしておきます。」
士郎は頷き、凛と共にその地下への階段を降りていった。ライダーが見張りとして残り、アーチャーが二人の後ろについて行った。
そして、妙に長く感じられる不気味な階段を降りていった。
やがて奇妙に開けた場所、しかし壁に空いた隙間には棺のようなものが置かれており、そして奥の方に扉もないどこかの部屋へと通じる入り口があった。
「なにかしら…。薬品の匂い?　霊薬かしら…。」
「人の匂いがする…。」
「えっ?　こんなところに?」

「それも……なんか…死体っぽいような…。」
「あ、待って!」
　士郎が奥の入り口に向かって走って行った。
　そして入り口のところで士郎が立ち止まった。
「どうしたの？　……っ!?」
　追いかけてきた凛が、士郎の横から顔を出し、中を見て……、そしてヒュッと喉を鳴らしてしまった。
　そこには、棺のような石の箱がいくつも並んでおり、その中には死体のような、ミイラのような物が寝かされ、あるいは、座っていた。
「こ、れ…は…。」
　一流の魔術師である凛は、一目でそれがどういう仕組みになっているのか、そしてその棺の中の物がなんであるか理解し、口を押さえた。
「生きてる…のか?」
「…ええ。生かされてる…わ。」
「…どうして…?」
「おや、不法侵入だぞ。凛。」
「綺礼!?」

その声が聞こえたので凛が、バッと振り返る。
開けた場所に綺礼が立っていた。
「どうかね、士郎くん。同じ境遇を味わった兄弟達ともいえる者達との再会は?」
「…ま…まさか…。あんた!?」
その言葉を聞いて凛は理解した。
ここで無理矢理に生かされている者達が、かつて冬木の大災害時に生き残った生存者達であると。
「つまり、餌というわけか?」
アーチャーが眉間にしわを寄せて言った。
「その通りだ。なにせ〝彼〟はワガママで、まるで私の言うことを聞かんし、ここで搾り取った魂を餌に大人しくさせているのだ。」
「えさ…だと?」
「士郎!」
「この……野郎おおおおおおおお!!」
士郎がリミッター解除をして、ピストル拳を放った。
綺礼に当たる直後、その拳の圧を、7枚の花弁の盾が防いだ。
「ロー・アイアス!?」

アーチャーが驚き声を上げた。
それは、アーチャーが使う贋作のロー・アイアスでもなく、本物のロー・アイアスだった。
「…なにをボーッと突っ立っているのだ?」
そこへ、カツンッと音が聞こえ、階段の上から、黄金の鎧をまとった、あの男…ギルガメッシュが降りてきた。
その手に、ぐったりとしたライダーの腕を掴んで引きずっている。
「ライダー!」
「安心しろ。殺してはいない。」
そう言ってギルガメッシュが、ライダーを階段の上から士郎達の前へ放り投げた。
「うぅ…。」
「ライダー、だいじょうぶか?」
「申し訳ありません…。」
「あなたじゃ分が悪…、っ?」
次の瞬間、凛の身体にドスッと衝撃が走った。
「凛!」
「遠坂!?」

凛の腹部を貫くのは、赤い槍。
いつの間にか背後にいたランサーが凛を槍で貫いていた。
「あ……ぁ…!」
「悪く思うなよ。」
そう、すまなさそうに言ったランサーが凛から槍を抜いた。
凛が介抱していたライダーの上に倒れた。
「ランサーーーーーーー!!」
「来いよ…。坊主!」
怒りに震えた士郎がランサーに殴りかかった。
ランサーがすんでのところで拳を避け。
「ゲイ…ボルク!!」
すべての力を集約した槍の一撃が、士郎の胸に向かって突き出された。
「……ハハ…。」
少しの間を置いて、ランサーが疲れたように笑った。
「やっぱ、ダメか。」
ゲイボルクの先端を士郎が掴んで止めていた。
その手からは血がポタポタと垂れている。

「けど…やっとお前に傷を付けられたぜ。」
「そうか…。」
「殺（や）れよ。坊主。でないと、嬢ちゃんが死ぬぞ？　なにせ、因果律を死に導く槍で貫いたんだからな。」
「ああ…。」
　士郎は、そう返事をすると、拳を振りかぶった。
　そして、ランサーの身体の上半身がバラバラに弾け飛んだ。倒れた下半身が、やがて光となり、消えた。
「ごほっ…、ごほ！」
「凛！」
　凛が咳き込み血を吐く。ライダーが傷口を押さえていた。
「遠坂！　アーチャー！！　遠坂を！」
「いや、行くのはおまえとライダーだ。」
「何言ってんだ!?」
「私が足止めをする。」
「アーチャー…、おまえ…。」
「ギルガメッシュの宝具は知っている。」

「ほう？　贋作者が我にたてつくか？」
「その贋作者が宣言する。お前を倒すとな。」
「はっ…！　よくもそのようなことを言う！」
ギルガメッシュが、階段から飛び降りてきた。
「行け！」
「…くそ。」
「士郎。行きましょう。このままでは…。」
「分かってる！　アーチャー…、帰ってきたら、歯ぁ食いしばっとけよ。」
「…分かった。」
アーチャーは、静かな口調でそう言った。
凛を抱え、士郎は綺礼とギルガメッシュの横をライダーと共に通り過ぎた。
しかしその瞬間、鎖が飛んできて、ライダーの足に絡まった。
「あ！」
「ライダー！」
「行ってください！」
「けど！」
「今は生き残ることを最優先に！」

「…分かった！」
　士郎は、ライダーとアーチャーを残して凛を抱えて階段を駆け上がった。
　鎖に引っ張られ、ライダーは、階段の下の広間にたたき落とされた。
　士郎と凛がいなくなったあと、アーチャーは、ポロッと涙を零した。
「なにを泣いている？」
「いや…。これでようやくアイツと縁が切れると思うと…つい…。」
「どうしたのかね？」
「色々とあるのだ…。」
「ほっほう…。では、君が泣くほど嫌いな相手に報復をする気はないのかね？」
「残念だが、貴様らの組む気などこれっぽっちもない。腸（はらわた）をぶちまけ、そして……溺死しろ！」
　アーチャーが双剣を手に、ギルガメッシュと綺礼に襲いかかった。

＊＊＊

桜は、セイバーと共に病院に走り込んだ。
「先輩！」
「桜…。」
「姉さんは…？」
「今…手術中だ。」
そう言って、手術室のランプを見上げた。
「…アーチャーは？」
「……分からない。」
士郎はそう言いながら、自分の手ある令呪を見た。
令呪はまだ残っている。つまりアーチャーはまだ生きているということだ。
「ごめんな、桜…。遠坂を…守れなかった。」
「生きて帰ってこれただけで、十分です。」
「あ…。」
やがて手術室のランプが消えた。
そして扉が開き、搬送用のベットに寝かされた凛が運ばれていった。
「遠坂！」
「姉さん！」

「先生、遠坂は…。」
「手術は無事に終わりました。あとは麻酔が切れて意識が回復するのを待つだけです。」
「そうですか…。」
どうやら手術は成功し、凛は無事に生還したらしい。
その後、集中治療室に運ばれ、呼吸器とともに、心拍数を図る機械を取り付けられ、凛は眠りから覚めるのを待つ状態になった。
病室を出て、病院をあとにし、衛宮宅に帰った一行。士郎は、教会で何があったのか話した。
「つまり、ギルガメッシュのマスターが、言峰綺礼だったと?」
「たぶんな…。」
「おそらく、ランサーも彼の下にいたのでしょうね。でなければ、そんなタイミング良く凛を襲えません。」
セイバーがそう言った。
「……これから、どうします?」
桜が不安そうに言った。
「……戦う。」

「先輩…。」
「聖杯なんて、もうどうでもいい。アイツらを…野放しにはできない！」
「シロウ。私も協力します。」
「ありがとな、セイバー。」
「あんたらだけで、やるつもり？」
「遠坂!?」
「姉さん、どうして！」
「バカね…。仮にも私は魔術師よ。これくらいなんとかなるわよ。」
そう言って病院服のパジャマ姿の凛がドカッと座った。
「けど勝手に病院を…。」
「適当に暗示をかけてきたわよ。」
「おまえ……。」
士郎は、呆れて言った。
「それに、私が近くにいないと、セイバーは全力を出せないわ。」
「すみません。リン…。」
「……あっ。」
「どうしたの？」

「……ライダー…。」
桜は、自分の手から令呪が消えたのを見た。
すると、そこへ、足を引きずる音が聞こえた。見ると、アーチャーだった。全身ボロボロの。
「アーチャー！」
「……すまん。ライダーは…。」
「…分かってます。」
残るサーヴァントは、アーチャー、セイバー、そして、……ギルガメッシュのみとなった。

ＳＳ２２　ギルガメッシュとの戦い（？）

その後、アーチャーは、霊体化して治療する前に、綺礼達の目的を聞いたことを話した。

簡単に言えば、選別と、そして、１０年前に起こったあの災厄の再現だった。

選別は、ギルガメッシュにとって支配するに値する人間だけを選び、それ以外を滅ぼすこと。

災厄の再現は、綺礼の目的だった。

彼は、価値観が完全に破綻しており、人の不幸をこの上ない幸福としているのだと。

「っというか、それを私達に伝えさせるために生かされたんじゃないの？」

「違うな。奴ら、俺が死んだと思って去って行ったのだ。」

「よく生きてましたね。」

「死ぬつもりだったが…、ここにいる筋肉バカのたわけの魔力によって、余計なほど耐久力が強化されていて、奴のエヌマ・エリシュでも、完全には消滅せんかったのだ。」

「あんな物を喰らってよくぞ…。」

「エヌマ・エリシュってどんな攻撃なんだ？」

「強いて言うならば、乖離剣エアによって、空間ごと敵を切り裂き消滅させる対界宝具だ。あまりの威力に、抑止の力が働くほどの代物だ。」
「空間ごと切り裂く…。」
「おい…。まさかその身で受けようなどと考えるな…。」
「何も言ってないだろ?」
「お前の考えそうなことだ。」
「あんたの規格外な筋肉でも、さすがにそんなものを喰らったら死ぬわよ?」
「シロウ。お願いですから、やめてくださいね。」
「先輩…。」
「あー、分かったよ。絶対に喰らったりしないから安心しろって。」
全員に心配され士郎は、参った降参だと手を上げた。
全員が安堵のため息を吐くと、アーチャーが、しかし…っと言った。
「どうやら、奴らは、私とライダーを同時に殺すことで、聖杯を降臨させる予定だったようだ。おそらく、予定を変更し、こちらに攻め入ってくる可能性もある。」
「私か、アーチャーを殺せば、それで聖杯は降臨するからですね。」
「そうなのか?」
「ええ。聖杯は、６つの英霊の魂を捧げることで降臨するの。生き残った7人目のマ

スターとサーヴァントがその聖杯を手に入れて、願いを叶えるのよ。」
「……なあ、遠坂。」
「なに？」
「それだけの残酷な儀式をやって、本当にちゃんと願いが叶うのか？」
「それは…、でも聖杯戦争は、数百年の歴史があるのよ？」
「俺と同じ立場の人達を、あんな場所で、あんな状態にしていた奴らが監督なんだぞ？……俺、ユーリ兄ちゃんに会いたいからって、全然気にしてなかった。こんなことまでやって、慎二やイリヤ達も死んで、そこまでしてやって願いを叶えたって……。」
「先輩…。」
「シロウ。私は…、過去の聖杯戦争で、聖杯を破壊しました。」
「えっ？」
「その後のことは分かりません。しかし、もしかしたら冬木の大災害は…、そのせいで…。」
「セイバー…。」
俯き、ギュッとスカートを握りしめるセイバー。
「過去のことを悔いても戻らない。今は、今のことを考えようぜ。な？」
「シロウ…。」

「今のまま、アイツらを放置してたら、ユーリ兄ちゃんに顔向けできない。だから、俺は戦うよ。そのために…力を貸してくれないか?」
「…はい!」
「ちょっと、私のことも忘れないで。」
「遠坂。いいのか?」
「遠坂の悲願はあるけど、それが昔に起こったあの惨劇と引き換えだというなら話は別。」
「…ふっ…。よくぞ言ったな。」
「アーチャー、いいか?」
「もちろんだ。」
「先輩…、私…。」
「桜。俺達は、必ず勝つ。勝って、桜のところに必ず帰ってくるからな。」
「私…、先輩の力になりたかったな…。」
「もう十分だ。桜は頑張ったよ。」
士郎はそう言って微笑み、桜の頭を撫でた。

＊＊＊

決戦前に、腹ごしらえをした。
アーチャーは霊体化して、急ピッチで治療に専念。
「おー…、吸われてる感じがあるな。」
居間で座布団の上に座っている士郎が、宙を見上げてそう呟いた。
「なんだかんだで、アーチャーも先輩のこと嫌いじゃないんですね。」
隣に座る桜がそう言った。
「そうかな？」
「じゃないと、自分から足止めして先輩を助けたりしませんよ。」
「そうなのかなぁ？」
「ねえ、先輩…。もし……、この聖杯戦争が終わったら……。」
「桜。その先は、帰ってからだ。」
「先輩…。」
「分かってる。桜。」
士郎が桜の肩を抱き寄せた。

「……先輩。必ず、帰ってきてください。美味しいご飯用意して待ってますから。」
「ああ。楽しみだ。」

「……いつものように邪魔をしないのですか?」
「今くらいいいわよ。こんな時ぐらい、邪魔するような人でなしじゃないし。」
廊下から見ていたセイバーが、隣にいる凛に聞くと、凛はそう答えた。
「ふふ…。」
「なに笑ってるのよ?」
「いえ、やはり、お二人の幸せを願っているのですね?」
「……本当はね…。内緒よ。」
凛は、プイッとソッぷを向いてそう言った。
その時、セイバーが笑みを消し、ハッと空を見上げた。
「リン!」
「うあ!」
セイバーが凛を庇い、廊下を転がった。
直後、外に面した廊下に、無数の武器が着弾した。

「久しいな、セイバー。」
「ギルガメッシュ！」
ギルガメッシュは、空飛ぶ黄金とエメラルドの舟に乗ってやってきた。
「あの贋作者はどこだ？」
「狙いはアーチャーですか？」
「もとより貴様だけは残す予定だったのだ。我と共に、ひとときの生を享受しようではないか、我が花嫁よ。」
「誰が！」
「遠坂！」
士郎が駆けつけた。
「来たか、雑種。そういえば、お前の名を聞いていなかったな。名を名乗ることを許可する。我に名を聞かせよ。」
「…士郎。衛宮士郎だ！」
「お前の肉体は、実によく出来ているな。美しくすらある。」
「うぇ…、あんた、変な趣味してるわね。」
凛が心底嫌そうに言うと、ギルガメッシュは、フンッと腰に手を当てて、鼻で笑った。

「肉体の美とは、すなわち人たる生命が持ちうる美しさにして力よ。だが…、我が肉体の美と力には敵うまい！」

「なに!?」

次の瞬間、金ぴか鎧を消し、生まれた姿となった…まあようするに全裸になったギルガメッシュがまるで美術彫刻のようなポージングを取った。

士郎のリミッター解除をして筋肉とは違う、細いようで無駄のない美しい筋肉が、黄金に輝いているように見えた（おそらく背景にしている太陽のせい）。

「ふはははは！　我が肉に酔いしれるがいいわ！」

「うわぁ…、最悪…変な意味で士郎と似通った趣味持ってる奴だったなんて…。…士郎?」

「うっ！　なんという美しさだ！　さすが、人類最古の王！　モノ（筋肉）が違う！」

「しろーーーーーう!!」

「ハーハハハハ！　もっと言うがいい！」

「だが、隙だからけだぞ。ピストル拳！」

「はっ？　うおっ!!　貴様!!」

ヴィマーナをピストル拳によって打ち砕かれ、ギルガメッシュが庭に頭から落ちた。

すぐにボコッと頭を出したギルガメッシュが、怒りに顔を歪める。
「土郎！　貴様！　我がせっかく貴様の土台で戦ってやろうというのに、それを無下にするとは…。」
「えっ!?　そうだったのか!?　それは悪かった！　心の底から謝る！」
「ふっ、分かれば良いのだ。」
「許しちゃった!?」
「なにがしたいのです!?　英雄王！」
思わずツッコむ凛とセイバーだった。
「見て分からんか、セイバー?」
「分かりません！　裸でなにを!?」
「この生命の美にして、力たる肉が分からんとは、お前もまだまだよのぉ、セイバー！」
「なに!?」
「セイバー！　真剣に問答しちゃダメ！」
「よっしゃぁ。じゃあ勝負だ、ギルガメッシュ!!」
「むっ、来るか！」
『体は筋肉でできている
血潮はタンパク質　心は不屈

幾たびの苦痛を超え強化
ただの一度の満足もなく
ただの一度の慢心もなし
担い手はここに1人極限の地へと至らんとする
ならば、我が生涯に一片の悔いは残さず
この体は無限の筋肉でできていた！
「アンリミテッド＝ハードワークス（無限の筋トレ）」』
　すべての詠唱が終わった瞬間、あの…世界が広がった。
「いやあああああ！　またこの固有結界！」
「シロウ！　この固有結界の効果はまだ…！」
「じゃあ、勝負だ！」
「来るがよい！」
　その後始まるのは、士郎とギルガメッシュによる、ポージング合戦。
「……ちょっとぉ、二人とも～。」
「全然聞いてませんね。」
　凛とセイバーがあきれ返ってしまった。
　しかし二人は気づいていなかった。

空に、幻のように存在する筋肉神のような存在が、ゴゴゴゴッ…とゆっくりと動き出していることに。

「衛宮士郎の寄る辺として判定します…。」

「桜ぁ!?」

そこへ部屋の奥に避難していた桜が、あの花嫁衣装で出てきた。

そして、スッと片手をあげる。

「勝者…。士郎。」

まるで何か見えない力に操られているように、単調な口調で勝者の名を言った。

「ぬっ!? 我が負けただと!」

「これより、敗者に、鉄槌を。」

「なっ!?」

「我らが神の鉄槌は下る。」

桜が上げた手を、ギルガメッシュに向けた。

その瞬間、空に存在する幻であるはずの筋肉神のような存在の手のひとつが実体を持ち、巨大な拳となってギルガメッシュに振り下ろされた。

「馬鹿なアアアアアアアアアアアア!!」

ギルガメッシュは、筋肉神のような存在の拳によって潰された。

そして、世界が元に戻る。そして桜も元に戻り、力尽きたようにペタンッと座り込んだ。

「?　私…。何を?」

「桜!　よかった!　元に戻ったのね!」

「えっ?　ね、姉さん、痛い…。」

凛が泣きながら桜を抱きしめた。

ギルガメッシュは、地面にうつ伏せで倒れ、深くめり込んでいた。

あまりのことに、セイバーは、絶句していた。

固有結界：『アンリミテッド・ハードワークス（無限の筋トレ）』

効果：発動者、または相手の筋肉の鍛え方の成果によって、勝負に負けた相手が受ける筋肉神のような存在からの鉄槌の威力が変化する。

補足：発動者、または相手が勝負を捨てた場合、有無を言わさず勝負を捨てた側に鉄槌が下る。

勝負の内容は、発動者が決める。

普通に戦うも良し。

鉄槌が下った後、反動により固有結界そのものが解除される。

発動者である士郎の消耗が激しいため連続は使えない。

士郎とギルガメッシュの戦い（？）は、士郎の勝利で終わった……。

ＳＳ２３　未来のため

「…い。おい。」
「……むっ…。」
ギルガメッシュは、目を覚ました。
まず目に映ったのは、赤土色の短髪。
士郎だった。
「我は…。」
「お前の負けだ。ギルガメッシュ。」
「……そうか。我は貴様に負けたのだな。ふっ…、こうも清々しいのはどれぐらいぶりだろうな…。」
「浸ってるところ悪いが、言峰は、どこだ?」
「綺礼は……。っ!?」
「ギルガメッシュ?」
「き…綺礼め…!!　この我を…!!」
次の瞬間、黄金の鎧を纏ったギルガメッシュ。そして空間が歪み、凄まじい数の武

器が出現した。
　ギルガメッシュは、耐えるように歯を食いしばる。
　武器の矛先は全てギルガメッシュに向けられていた。
「ふ…、フハハハハ、これが我の最後となるか…。セイバー、笑うがいい…。」
「英雄王!」
「貴様の純血を味わえなかったことがせめてもと心残りよ……。綺礼は、柳洞寺なる、霊脈の集まる場所にいる。…さらばだ。」
「ギルガメッシュ!!」
　そして幾多の武器が、ギルガメッシュの全身を貫いた。
　幾多の逸話を持つ伝説の武器に心臓を貫かれ、ガクンッと地面に縫い付けられたギルガメッシュの身体が、武器と共にやがて光となって消えた。
　そして…。
「空が!」
「まさか…、ギルガメッシュの魂を受け止めて、聖杯が完成したの!?」
　空が不気味に歪み、黒い孔が開いたのを見て、士郎達は愕然とした。
「なるほど…。奴(ギルガメッシュ)も腐っても英霊。綺礼にしてみれば、我々を討とうが、ギルガメッシュが倒れようがどちらでもよかったのだ。」

ようやく復帰したアーチャーがそう言った。
「もしかして…、監督役の権限である、予備令呪を使って重ねがけしてギルガメッシュを自害させたのかしら?」
「おそらく、そうだろうな。あれほど我が強い英霊だ。それだけしないと言うことを聞かせられんだろう。」
「予備令呪?」
「監督役の教会には、戦いを放棄したりして自分から脱落したとかで回収された令呪が伝わっているのよ。つまり、三回以上の令呪を常に持ち歩いていると考えていいわ。そういう令呪を、何かあった時とかにその時の聖杯戦争で他のマスターに配布したりもするの。」
「それ結構反則じゃないか?」
「それを言っちゃ、監督役じゃないわよ。そういう権限があるから、教会は偉かったの。」
「けど、今、その教会の奴が悪いことをしようとしてるんだぜ?」
「……このことは、生きて帰ったら、正式に魔術協会と、聖堂教会に通達するわ。」
凛は、そう言うと、空に空いた孔を睨んだ。
「きっと、あの孔の真下ね。」

「たしか、柳洞寺って……。」
「前にキャスターと戦ったところね。」
「行くんですか？」
桜が立ち上がって言った。
「ああ。」
「……必ず…、帰ってきてください。」
「もちろんだ。」
「先輩…。」
「桜…。」
「……。」
「…止めないのか？」
いつもこういう時には止めに入ってくる凛が動かないので、思わず士郎が聞いてしまった。
「バカね。こんな時に止めるほど人でなしじゃないわよ。で？　後悔の無いようにしないの？」
「いや…今更ながら人目があると気になるもんだな…。」
「今まで人目を気にしなかったバカップルが言う台詞？」

「……すまん。」
「今更謝るな。」
「時間も無いのだ。さっさとしろ。」
アーチャーが急かした。
「えっ…あ、…う…、さ、桜！」
「は、はひぃ！」
緊張のあまり噛んだ桜。
「……この戦いが終わったら…、いや、高校を卒業したら…、結婚しよう。」
「……はい！」
桜はたっぷり間を置いて、涙ぐみつつ、これ以上ない笑顔で返事をした。
「……いいのか？　凛。」
「……誰が…。」
凛の背後にゴゴゴゴッ…っという音と共に黒いオーラが出始めているように見えた。
「誰が、プロポーズしろって言ったのよおおおおおおおおおおおおおおお!!」
「なんだよ！　やっぱり、怒るんじゃねぇかよ！」
「それとこれとは話が別うううううう!!」

「やはりこうなりますか…。」
「いや、この方がいつも通りでいいかもな。」
セイバーがため息を吐き、アーチャーが腕組みして頷いていた。
怒った凛に追いかけ回される士郎。桜は、そんな二人を見ていても、士郎からのプロポーズに酔いしれてほわ～っとなっていた。

＊＊＊

空に空いた、黒い孔。
その真下にあるのは、柳洞寺。
冬木の霊脈が集まる場所のひとつであるこの場所は、今や神聖な空気などどこへやら。
山は不気味に胎動しているように見え、まるで山そのものが生き物のような空気をはらんでいた。
「これは…。」

「完全にヤバいわね。」
「しかし、行くしかありません。」
「分かってるわよ、セイバー。今更引き返すことなんてしないわ。」
凛がキリッと表情を引き締め、そう力強く言った。
「！　セイバー！」
「えっ？」
次の瞬間、アーチャーが反応し、セイバーの前に腕を伸ばした。
その瞬間、ズバッとアーチャーの腕の一部が抉れた。
「アーチャー！」
「チッ……、よくぞ気づいた。」
「誰だ！　姿を見せろ！」
「我は…、アサシン。」
「アサシン!?　けど、声が…。」
「我は、…真なるアサシンなり。」
木の上に、長く伸びた腕をヒラヒラと揺らしている白い仮面を付けた黒い人物がいた。
「ハサン・サッバーハね！」

凛がその正体を看破した。
「その心臓…もらい受ける。妄想心音（ザバーニーヤ）。」
その瞬間、長く伸びた右腕が見えない速度で伸びてきた。
「ふっ！」
アーチャーが、双剣を手にそれを弾いた。
「アーチャー！」
「行け！　こいつは私が相手をする！」
「ほう…、我が宝具の速度に適応するとは…。なかなかの使い手とみた。」
「不本意だが、俊敏性が大幅に上がっているのでな。」
「頼んだぞ、アーチャー！」
士郎達は、アーチャーを残し石階段を駆け上がっていった。

＊＊＊

石階段を登った先で、待ち受けていたモノは……。信じがたいモノだった。

「嘘でしょ…？」
「ライダー…、ランサー…。」
しかし待ち構えていた二人は答えない。
その身体には、黒い筋のような赤っぽい光も纏っており、血管を思わせる筋が全身に走っていた。そしてその目には正気の色がない。
「これが……聖杯の力？」
『これは、オマケだよ、凛。』
「綺礼!?　どこにいるの！」
『彼らは、聖杯からこぼれ落ちた膨大な魔力から再構成し直しただけの存在に過ぎん。だが…、魔力の供給元は聖杯だ。ゆえに魔力は無限…。どうかね？　君も仲間入りする気はないかね、セイバー。』
「彼らにこのような仕打ちをして…!!　許しません！」
『ふふふ…。だが君だけで、彼らを倒せるかね？』
「ふざけるなよ!!」
『そうか、君がいたね。衛宮士郎。だが相手は聖杯の魔力の塊。何度でも蘇らせられる。つまり…。』
「聖杯さえ破壊すれば、消せるってことよね！」

「遠坂、セイバー！　行け！」
「いいえ！　行くのは、あんたよ、士郎！」
「でも…。」
「綺礼ほどの使い手には、あんたが相手をするのが一番よ！」
「彼らの足止めにとどめ、聖杯を破壊するだけの力を残しておきます！　行ってください！」
「……分かった！　死ぬなよ！」
「誰に向かって言ってるのよ？」
士郎の言葉に、凛は不敵に笑った。
そして士郎が走って行くのを、黒化したライダーとランサーが止めようと襲いかかろうとしたが、それをセイバーが剣で、凛が魔力の弾を飛ばして止めた。
「邪魔はさせないわ！」
「行きます！」

それぞれの戦いが始まった。

過去話　士郎と桜

切嗣が死んで数週間だろうか…。
それほど経たない頃であった。
「えーん、えーん…。」
学校が終わり、いつものランニングをしていた士郎は、女の子の泣き声を聞いた。
声が聞こえたのは、路地の間だった。
覗くと、そこには薄紫色の髪の毛少女が、両手を目において泣いていた。
「どうしたの？」
「っ！」
声をかけると、少女は酷く過剰反応した。
「こんなところで、一人で何してるの？」
「…えっ…あの…。」
「あ…。」
見ると、アスファルトに置かれたランドセルがボロボロになっていた。

「誰にされたの？」
「えっと…あの…。」
「だいじょうぶだよ。僕は味方だ。ねえ、誰がやったの？」
「あっ！　間桐の奴、まだあそこにいるぜ！」
「やーい、お化け屋敷～の子！」
「…お前らか!!」
「うわっ！　なんだお前！」
　道路側からからかう男の子達の声が聞こえ、士郎は彼らが原因だと理解して、殴りかかっていった。
　その後、いじめっ子達を懲らしめたが、士郎は彼らの保護者に呼ばれ、後見人の藤村が頭を下げに行き、士郎は意地でも謝らなかった。

　後日……。
「あ、あの…。」
「あ、君。よかった、ランドセル新しくなったんだね？」
　いつものランニング中に、あの時の少女に会い、士郎は少女の新しいランドセルを見て笑った。

「えっと…あ、あ、ああ、ありがとう……ございます…。」
「別にいいよ。俺ああいういじめっ子って嫌いなんだ。ねえ、よかったら名前教えてよ。俺、士郎。衛宮士郎っていうんだ。」
「…あ……あの、わ…私…桜…。」
「桜か…、いい名前だね。」
「そ…そんなこと、ない…。」
少女は泣きそうになりながら、けれど赤面してボソボソと言った。

その後、ランニング中に、何度も会うことがあった。
その都度、たわいもない話をしたりして、士郎にとってはとても楽しかった。
どもりぎみだった桜も、徐々に慣れ、普通に喋れるようなった。

小中ともに違ったが、そうやって同じ道を通るようになり、一緒に帰るようなった。

「士郎くん…、私より一年上だったんだね。じゃあ先輩だ。」
「そっか。そういえばそっか。」
「じゃあ…、先輩って呼んでいい？」

「うーん、俺としては名前でもいいけど、しょうがないか。」
「おい、ガキ。」
「あっ？」
「彼女なんて連れていい身分だねぇ？　俺達にもいいも思いさせろよ？」
まあいわゆる不良集団であった。
桜は、怯える。すると士郎が桜を背に隠した。
「お？　いっちょ前に彼氏面かよ！」
「お嬢ちゃん、俺達と遊ぼうぜ？」
「い、いや…。」
「まあ、そう言わずに…。」
「桜に触るな。」
桜に手を伸ばそうとした不良の腕を士郎が掴んだ。
「うっ！　いてぇぇぇ！」
「おいおい、大げさだぞ？」
「ま、マジいてぇぇ！　なんちゅうあくりょ…！　ぐえっ！」
士郎は掴んだまま不良を放り捨てた。

「お前ら…、俺が誰か知らないって事は、この地区の奴らじゃないな？」
　士郎はバキボキと拳をならした。
「えっ…、まてよ…。その赤土色の髪の毛…。」
「おまえ知ってんのか？」
「き、筋肉バカの衛宮って奴じゃねぇか？　ほら最近この辺りの不良チームをのしたって…。」
「ま、マジ!?」
「そ、そんなはずねぇだろ。第一、ただの筋肉バカなら、俺達が負けるわけ…、ぐぇっ！」
「バカ、バカ…言うな！　っていうか、お前ら鍛え方がたんねぇんだよぉおおおおおおおお!!」
「ぎゃあああああああああああああ！」
　その後、不良達は、筋肉という悪夢を見せられた。（強制筋トレ的な意味で）
「ち、ちくしょう！」
「！」
「先輩、あぶな…。」
「ふんっ！」

「うそおおおお!?」

ぐったりしていたが、起き上がった不良の一人がナイフを取り出し、士郎に襲いかかったが、筋肉を固めた士郎の筋肉に弾かれ、ナイフが落ちた。

そうして、不良達を撃退した士郎だったが…、まだ筋肉魔法が未完成だったため、ナイフが僅かに士郎の身体に傷を付けていた。

「ダメだな…。俺もまだまだだ。」

「あの…手当を…。」

「あ、こんなのツバつけこきゃ…。」

「ダメです！　ちゃんと治療しないと…。そ、そうだ…。この近くなら…、私の家…来ますか?」

「ん?　いいのか?」

「はい…。」

「分かった。じゃあ、ちょっとお邪魔するよ。」

そうやって、始めて間桐の家に入った。

入った瞬間、士郎は感じた。

「桜…。」

「えっ?」

「この家…、どういうことだ？」
「あの……。」
「ほほう？　蟲の存在を感じるか？　小僧よ。」
「お、お爺さま！」
　そこへ現れたのは、とてつもない高齢であることを感じさせるしわくちゃな老人だった。
「あんたは？」
「わしは、この家の当主じゃ。主は、何者じゃ？」
「俺は、桜の……。」
「ほう？　おまえが近頃桜に近寄っておる男か。見たところ魔術師と見える。」
「まじゅつし？　俺は筋肉魔法を使うが、魔術を使った覚えはねぇ。」
「ふん。その身流れる魔力と、魔術回路を隠し通せるとでも？　しかし…嘘は言っておらんようじゃな。気づいておらんだけか？」
「あ、あの…！　先輩は…！」
「面白い体質をしておるようじゃのう。よくぞ連れてきた、桜。これなら蟲共もさぞや喜ぶじゃろうな。」
「い、いや…。そんな…。」

「桜、わしに逆らうのか?」
「ひっ…。」
「あんた…、桜に何を?」
　士郎が桜を背に隠し、老人を睨んだ。
「簡単な話じゃ。桜は、我が家をつなぎ止めるための母胎。そして、貴様はこれから、わしの蟲共の餌となるのじゃ。」
「はん。誰が…。」
「死ぬが良い。」
　次の瞬間、無数の巨大な蟲が襲いかかってきた。
「いやあああああああ!」
　桜が悲鳴を上げる。
　しかし、士郎は顔色ひとつ変えず。
「あたたたたたたたたたた!」
　連続パンチで蟲を潰していった。
「なに!?」
　今度は老人が驚く番だった。
「初級、ピストル拳!」

小さめに放たれた、拳の圧が、老人に命中した。
その瞬間、老人の身体がバラバラの蟲になり、潰れた。
『驚いたのう…。間桐臓現の蟲を潰せる輩が、このような若造とは。』
「こいつ…！　身体が蟲で…。」
『その通り！　わしを殺すことはふかの…。』
「そこだ！」
『なに!?』
周りに蠢く蟲の中から一匹の虫を掴んだ士郎。
途端、臓現が焦った声を上げた。
「これが本体か…。聞かせて貰おうか…。あんた…桜に何をしていた?」
『そ、それは…。』
そして、臓現は、桜にやってきたことをすべて話した。
「なるほど…。」
『わ、わしは、すべてを話したぞ！　わしを…かいほ…、っ！』
「許さねぇ。」
「先輩！」
「桜…、まさかコイツを許すのか?　おまえにそんな…酷い仕打ちをずっと続けてき

たやつを！」
「でも…そんなことしたら、先輩が人殺しになる…。それは…。」
『桜！　こいつを止めろ！』
「桜……、俺は…桜が好きだ。」
「えっ？」
「ずっと…好きだった。あの時、初めて会ったときから、ずっと。だから俺は桜を助けたい。俺が言うのも何だが…、コイツはもう人間じゃない。」
「先輩…。」
『桜！　何を惑っておる！　早く！　早く、わしを！』
「私…綺麗な身体じゃありません…。」
「それがどうした？」
『桜？』
「十にもならない頃から、ずっと、蟲に侵され続けた…。全身…くまなく…。汚いです。」
『桜!!』
「どこが汚いんだ？　桜はずっと昔から綺麗だよ。」
「先輩…、私…そんな私でも…いいんですか？」

桜は泣いていた。
「バカだな…。俺にとって、桜だけが好きなんだよ。」
「じゃあ…。私も…背負います。罪を。一緒に！」
桜が近寄り、臓現の本体である蟲を掴んでいる士郎の手を両手で握った。
『やめろ、やめろ…！　桜あぁぁあああああああああ!!』
「地獄に。」
「落ちてください。」
そして二人の手が、臓現の本体である蟲を握りつぶした。
「先輩…。」
「桜…。」
「私も…あの時から、ずっと、先輩が大好きでした！」
「桜！」
二人は抱き合った。

それが、二人の絆の始まりの話であった。

ＳＳ２４　苦難と幸多き未来と…

柳洞寺には、聖なる池が存在する。
しかし、その池と周辺は、今や聖なる姿を完全に失い、孔から垂れたであろう黒い泥によって満たされていた。
「よくぞ来た。」
「言峰綺礼！」
「見たまえ、空を。あの孔を。」
綺礼が空に空いた黒い孔を示した。
「あれこそ、聖杯の中身。この世全ての悪によって染め上げられた、すべてを呪い、死に至らしめ、そして悪意によって願いを叶える力そのもの。どうかね？　これを使えば、君の願いは叶うが？」
「もう…聖杯なんていらない！」
「つまり、君が会いたいと願っていた人物に会う機会を永遠に失っても良いということかね？」
「あの災禍のことを忘れた日なんてない…。それと引き換えにユーリ兄ちゃんに会え

たとしても…！　ユーリ兄ちゃんはそれを許しはしないだろう！」
「……私は正直…、君に期待していたのだ。」
「なに？」
「君が衛宮切嗣に育てられ、その志を受け継ぎ、愚直にそれを実行しうる人間に育ち、そして私と…こうして対決することになる日が来るのを。しかし…、実際の君にはすでに、起源（オリジン）となる人間がすでにいた。ユーリと言ったか？　その人間の在り方に、切嗣は敗北した。あの災禍を招いた、まっすぐすぎた己が正義の在り方に従う生き方を受け継がせられなかった。」
「な……。」
　士郎は、綺礼の口から吐き出された真実に顔色を変えた。
「セイバーから聞いていないのか？　あの日…、この冬木の地を焼いた災厄を起こしたのは、衛宮切嗣がセイバーに聖杯を破壊させたからだ。」
「……セイバーが破壊したのは聞いている。」
「君は恨まなかったのか？　あの災厄を招いた者達を。」
「……何も思わなかったと言ったら、嘘になる。けれど、それはもう過去のことだ。俺は、今（現在）を生きている！」
「なるほど。決して過去にとらわれず、まっすぐ前を向いて、今（現在）と未来を見据

えるか…。それが君の言う筋肉魔法の本質なのだろう。そして、ユーリという人間の在り方だな。ならば、その重たい過去のすべてを背負って生きれるというのか？」

「もちろんだ！　生きてやる！　例えこの足が折れそうになろうとも…、それならばそれを支え、背負えるだけ鍛えに鍛えて背負って生きてやる！　桜と一緒に!!」

「そういえば、遠坂には、次女がいたな…、確か間桐に養子入りさせたとか…。その次女か。……分かった。君の生き方はとてつもないものだ。認めよう。」

「てめぇは、さっさと降参しやがれ!!」

「そうだ。良いことを教えてやろう。イリヤスフィールの心臓…すなわち聖杯だが…、それは私の中にある。」

「なっ！」

「つまり、これから起こる災いを止めたければ、私を殺すしかないのだ。…君に、出来るのかね？」

「やってやるさ！」

士郎に迷いは無かった。

リミッター解除をして筋肉を膨張させ、綺礼に殴りかかった。

「…ふっ。」

次の瞬間、士郎の左肩の肉が抉れた。

「なっ!?」

「君は最初に出会った時、私を強者だとみていたようだが…。その通りかもしれんな。こうは見えても教会の代行者として人ならざるモノと戦うため、鍛えに鍛えてきたこの身は……。」

スッと綺礼がまっすぐに伸ばした手を見えないほどの速度で突き出した。

そして、次の瞬間、士郎がハッと反応し、横へずれる、その瞬間、胸の横が抉れた。

「こ、これは!?」

「君の筋肉が〝面〟の力なのだしたら…、私が今繰り出しているのは、〝点〟の攻撃だ。一点に力を集約させ、その一点のみを打ち、貫く。いかなる強度を誇る宝石でも、その一点を突かれれば、脆い!」

綺礼が、右手から繰り出す〝点〟の攻撃を連続で繰り出した。

士郎は腕を組んでガードするが、たちまち身体のあちこちが抉れ、激痛に歯を食いしばった瞬間を狙ったのか、綺礼の片膝がガードを下から弾き両腕が上に跳ね上がった。

がら空きになった胸に向かって、綺礼が右手を突いた。

「筋肉ううう!!」

「!」

分厚い胸筋に突き刺さった指が根元辺りまで埋まったところで筋肉を固めて辛うじて止めた。もう少し遅かったら、心臓を貫かれていただろう。

筋肉に固められ、押すことも引くことも出来なくなった綺礼に向け、士郎は拳を振るった。

動けぬ綺礼に拳が決まり、士郎の胸に刺さっていた指が千切れ、綺礼が吹っ飛んでいった。

綺礼は、血をまき散らしながら吹っ飛んでいったが、やがて体勢を整え、片膝をついて止まる。

「実に面白い芸当をするのだな。本当にデタラメな身体をしている。」

綺礼のまだ余裕のある口調に、士郎は歯を食いしばった。

一撃で殺す気で殴ったはずなのだ。

すると綺礼は、傍にあった、黒い泥に指が無くなった手を浸けた。

そして手を抜くと、そこには黒い泥によって再形成された指があった。

「おまえ…！」

士郎は直感した。

綺礼は、すでに人間ではないのだと。あれは、人間ではないモノがなせる業だと。

「ふっ…、私が再契約した相手である、アヴェンジャー（復讐者）は、そう簡単には私

を死なせんようだ。」
　綺礼は口元から流れた血を腕で拭った。
　どうやらほとんどダメージになっていないらしい。
　……っとなれば、っと士郎は考える。
　おそらく綺礼が言う、アヴェンジャーとは、聖杯と深く関わっているのだろう。ならば、綺礼の体内にある聖杯をどうになかすれば…っと考えていると。
「私の中にある聖杯をどうにかすれば、確かに私を殺せるだろう。しかし、どこにあるのか分かるかね？」
　見透かしたように綺礼が口元を歪めて笑う。
　綺礼がそう言ってくるということは、聖杯がイリヤの心臓だけに、胸の中にあるとは限らないということだ。
　頭かもしれない…。しかし、足という可能性もある。
「くそ…。」
「辛かろう。血もだいぶ失われているのだろうし、そろそろ終わりにしてあげよう。」
　綺礼が歩み出した。
　士郎は身構えながら、考え続けた。
　聖杯はどこだと。

その時だった。

『ユーリさんって常識がおかしいですからね。見習っちゃダメですよ?』
『なんでだ? 逆に考えてるんだぜ? ほら、逆に考えてハンカチはいつも持ち歩いてる。』
『だって、『常識にとらわれるな 一般常識なんてクソくらえ』なんて本を参考に生きてたんでしょう?』

「……とらわれるな…、か…。」
「?」
「ピストル…。」
士郎は拳を握りしめ、構える。
綺礼が、ハッと表情を変えた。
「貴様!」
そして。
「拳!」
士郎がピストル拳を放った。

……黒い泥が溜まった池に向かって。
「ぐ…お…!!」
途端、綺礼が胸を押さえて膝から崩れ落ちた。
「やっぱりか。」
強大な圧を受けた泥が凄まじく蠢き、そして中心から、黄金に輝く杯が、飛び出してきた。
「言峰綺礼…。お前を狙う限り、絶対に目が行かない場所……。そう逆に考えて、思い付いたのがココ（池）だ!!」
士郎が弾け出てきて宙を舞った黄金に輝く杯を跳んで、掴んだ。
「それと…、お前の企みも分かった。」
「…なにかね?」
「お前を殺したら、その瞬間…、あの十年前の時のように、あの孔から災いの元が流れ出て来るんだってな。なぜなら、この黄金の杯は、その災いの元をせき止める制御装置に過ぎないんだ。つまりそれと繋がったお前を殺すって事は、この杯をぶっ壊すのと同じ事だってな!」
「……そこまで見抜くとは…、君は本当に…何もかもが切嗣を越えている…。」
「逆に考えてただけだ。常識にとらわれるなってな。」

「それも…、君の起源（オリジン）となったユーリからの教えか？」
「……だいたい合ってる。」
　すると士郎は、杯を横にし、その中に指を突っ込んだ。
「なにを!?」
「出てこい…。アヴェンジャー!!」
　筋肉に血管を浮かせ、凄まじい力を持って何かを引っ張り出そうとする。
　すると、ズルズルと、何か黒く染まった何かが杯の中から引っ張り出され、ついに地面に引きずり出された。
　それは、泥よりも黒く、けれど、奇妙な呪文を思わせる模様が赤黒く光った何かであった。
「コイツが…、聖杯を汚染していた元凶だろ？」
「馬鹿な……。力業でこの世全ての悪（アンリマユ）を引きずり出しただと!?」
「いいや…違う。コイツは、そう定められただけのただの凡人だ。必要悪として決めつけられ、そうあるべき存在としてこの世の地獄に落とされただけの人間だ！」
　すると、ピクピクと動いているだけだった、アヴェンジャーが、見えない速度で、士郎に飛びかかった。
「くっ！」

「ソレは、実体を欲しがっているのだ。君の肉体ならば、これ以上ない〝殻〟となろう。」

　士郎は、膝をつき、聖杯を落としそうになりながら、自分の身体に染みこんでくるアヴェンジャーからの苦痛に耐えた。

　だが、ただの苦痛ではない。

　まさにこの世全ての悪たらしめる、あらゆる苦痛を孕んだこの世の地獄の歴史そのものを体感しているような苦痛が脳を駆け巡った。

「彼にすべてを委ねたまえ。さすれば…、その苦しみから解放されるであろう。」

「……いいや…。」

「むっ?」

「俺は……、背負う!　例え、どんな重い過去だろうが、なんだろうが、この足が折れるなら、それ以上に鍛えて背負って生きてやる!!　アヴェンジャー!　いや、この世全ての悪（アンリマユ）!　お前を俺の中で受け止め、背負ってやるよ!!」

　士郎がアヴェンジャーを抱きしめるように腕を組んだ瞬間、黄金の杯が凄まじい輝きを放った。

「ば…、馬鹿な…。」

　綺礼が愕然としながら、その光景を見た。

黄金の輝きの中。士郎は倒れた。

＊＊＊

「……い…、おい。シロウ。」

懐かしい……、青年の声が聞こえた。

「ちょっと見ない間に、大っきくなったな…。見違えそうになったぞ。」

「……ユーリ…兄ちゃん?」

ソッと目を開けた士郎の頭に、ポンッと優しく手が置かれた。

黒い髪の毛と、茶色が入った瞳…。そして、鋼をも越えるような筋肉の身体。

忘れもしない…。自分の起源（オリジン）。

黄金の光が舞う、不思議な空間の中で、士郎とユーリ、二人だけだった。

「まったく…、こんなムチャしやがって。俺に追いつきたいからって、何もかも背負って…それで死んじまったら、意味ないだろ? シロウが待たせてる女の子がいるんだろ?」

「ああ……、桜…。俺、ユーリ兄ちゃんに紹介したい人がいるんだ。でも、ここにはいないんだ…。」

「可愛くて綺麗な女の子だろ？　知ってる。というか、今知った。聖杯が俺に教えてくれたよ。やるじゃねえか、シロウ。このこの。」

「へへへ…。」

「……頑張ったな。シロウ。よくやった。お前のおかげで、お前の世界は救われたんだ。」

「そうなの？」

「ああ、そうだ。……俺もあの時からずっとシロウにまた会いたいって思ってたんだ。再会を願ってくれてありがとな。」

「…うん。俺も、会いたかった。ずっと、ずっと…、ユーリ兄ちゃんを追いかけてたんだ。」

「そうか。……ごめんな。そろそろ帰らないとならなさそうだ。次…、いつになるか分からねぇけど、また会おうな！　そんときゃ、俺の筋肉魔法と対決するぜ!!」

「うん！　今度は、桜と一緒に会いに行くよ！」

「待ってるぜ。……じゃあな。」

そして黄金の輝きが、消え失せた。

＊＊＊

士郎は、ボーッと孔が消えた空を仰向けで倒れた状態で見上げていた。

「ふふふ…、ハハハハハハ！　負けた…、完膚なきに負けたぞ!!」

綺礼のその声で、士郎はハッと我に返った。

そして起き上がり、綺礼を見ると、綺礼の身体がボロボロに朽ちて、塵になろうとしていた。

「この世全ての悪（アンリマユ）を、己が中に溶かして、封じるとはな…。それで、君は、これより先…、魂が朽ちる時まで、この世全ての悪（アンリマユ）と運命を共にするだろう。その先に待ち受ける苦難は想像を絶するだろう。その行く末を見てみたいところだが…、残念ながら私にはもうこうして会話する時間すら残されていないらしい…。」

「言峰綺礼…。」
「衛宮士郎……。君の未来に……苦難と幸が多からんことを…。」
首にかけている、十字架に口づけた綺礼の身体が、ついに塵となって風に乗って、消えた。
残されたのは、彼が首にかけていた、十字架の首飾りだけだった。

「士郎！」
「シロウ!!」
そこへ、凛とセイバーが走ってきた。
「遠坂…、セイバー…。」
「綺礼は？」
「……もういない。」
そう言って士郎は、目線を先ほどまで綺礼が座り込んでいた場所…、十字架に向けた。
凛は、綺礼が身につけていた十字架を見つけ、一瞬目を見開いたが、やがて落ち着こうと深呼吸して。
「そう…。」

っと、短く言った。
「シロウ…？　あなたの中から、何か邪悪な気配を微かに感じます。」
「分かるか？　……なんでも、この世全ての悪（アンリマユ）って奴らしい。」
「あんた、なにしたのよ!?」
「いや…その…。」
怒る凛に、士郎を目を泳がせた。
その後、アーチャーとも合流し、何があったのか話した士郎は、三人からメッチャ怒られたのだった。

最終話　今（現在）を生きる

士郎は、いつもの朝の鍛錬のあと、いつものようにシャワーを浴びてタオルで頭を拭きながら台所の方に来た。
「おはようございます。せんぱ…、し、士郎さん…。」
台所で朝ごはんの支度をしていた桜が赤面しながら、士郎のことを先輩ではなく、『士郎さん』と呼んだ。
「おう、おはよう。桜。」
「あっ。」
桜に近寄った士郎が、ん～、チュッっと桜のほっぺたにキスをした。
「ひゃあああ！」
「桜が可愛いのがいけないんだぞ～？」
「もう！　朝からやめてください！」
「イヤだったか？」
「……イヤじゃないです。」

桜は俯き、ボソボソと小声で言った。
「聞こえないぞ？」
「い、イヤじゃないです！」
「じゃあ、もう一回しちゃうぞ。」
「いやああん。」
「味噌汁が噴くぞ。お前ら。」
「あ、やべ。」
アーチャーの言葉でハッとした士郎が、噴きこぼれかけた味噌汁の鍋の火を止めた。
桜は、士郎に見えないよう、一瞬だけ、ギッとアーチャーを睨んだ。
アーチャーは、士郎に悟られぬよう、ため息を吐いたのだった。

あの壮絶な戦いから、数週間……。
第五次聖杯戦争は、士郎の勝利で終わった。
そして、汚染が除去された聖杯により、士郎の願いは叶えられ、異世界の住人であるユーリとの再会が果たされた。
これにより、第四次で消費されることなく残っていた大聖杯の魔力がすべて消費さ

れ、次の聖杯戦争の開催は、少なくとも百数年後と見積もられた。（※だいたい６０年ぐらいの周期）

単にこの世界にいる人間（あるいは死人）との再会ではなく、異世界の人間との再会を願うため、異世界との境界を繋ぐために普通に願いを叶えるより多くの魔力が消耗されすぎてしまったためだと、遠坂凛は見ていた。

そして、士郎の中に封じられたアヴェンジャー…、この世全ての悪（アンリマユ）であるが…。意外にも士郎の魂の中がお気に召したのか、実に大人しかった。

聖杯を穢し、汚染し、最悪の形で願いを叶えるモノになってしまった件について、アヴェンジャーを自らの魂に封じた士郎が、夢で、その原因となったのが、第三次聖杯戦争における、アインツベルンのルール違反によるアヴェンジャーの召喚と、その後間もなく敗北したことにあると知り、それを冬木の地を管理する凛に伝えたところ、アインツベルンに対し、聖杯の汚染への責任追及がなされたとか？

ルール違反により召喚されたうえに、何の力も無かったために四日で敗北し、最初に聖杯に入ってしまったことがアヴェンジャーの身に宿る呪いの力と、聖杯の魔力が深く結合。そしてなによりこうなった原因が、アヴェンジャーの基になった人間がこの世全ての悪として人々から願われたために、万能な願望器である聖杯が合致してしまい、その後、聖杯の中のこの世全ての悪（アンリマユ）の母胎となったこと。

それが、聖杯が汚染されてしまった真相だ。

それらの真相は、すべてアヴェンジャー本人から士郎が魂を通じて、夢の中で知ったことである。

そして、凛が、魔術協会と、聖堂教会に、聖杯戦争の監督役であった言峰綺礼の所業と、アヴェンジャーの存在と、それによる聖杯の汚染を伝えた。

魔術協会と、聖堂教会の使者が来て、アヴェンジャーの存在を確認するために、ちょっと士郎の魂を調べたりもした。そしてその存在が確かなことを確認すると、新たな監督役を寄越し、そして聖杯戦争そのものの見直しと共に、開催を無期延期とした。

アヴェンジャーの処分については、冬木の管理者である凛に追々伝えられることになり、それまでの封印についても、実質凛に任された。

なお、アヴェンジャー（この世全ての悪（アンリマユ））を自らの魂に封じた士郎を実験材料にしようとする動きがあったらしいとかなかったとか……、それを知った凛と、第四次聖杯戦争を経験していたロード・エルメロイ二世が必死に止めて事なきを得たとか……。なにせ士郎の意思（魂）による封印そのものが破綻すれば、再び聖杯にアヴェンジャーが入ることになり、また汚染されるからだ。そうなれば、せっかく汚染が除去された聖杯が、今度こそ世界に災いを振りまくかもしれないのだ。

こうして、士郎の日常は保証された。平和であることが、もっとも魂に負担をかけないからだ。

「遠坂には、でっかすぎる借りができたな…。」
「なーに言ってんのよ。」
学校への登校中に凛とそんな話をした。
「あんたが平和な状態じゃないと…、世界がヤバいのよ？　分かってる？」
「ああ…。分かってる。アヴェンジャーも、とりあえず大人しくしてくれてるしな。」
「士郎さん…。本当にだいじょうぶなんですか？」
「ああ、だいじょうぶだいじょうぶ。なんともないから。」
「それならいいですけど…。」
「ねえ？　ところで、いつから〝士郎さん〟なんて呼ぶようになったかしら？」
「姉さんには関係ありませーん。」
「桜！　まだ認めたわけじゃないわよ！」
「いいもーん。二十歳になったら、身内の許可が無くても法的に結婚できますし。」
「くーー！」
フッと笑う桜に、凛は悔しそうに地団駄を踏んだ。

桜も、なんだかんだですっかり強くなった……（？）。

ところで、臓現が死んだことが発覚し、間桐の家は正式に魔術師としては完全に潰れた。

家そのものも、桜の身の上話を聞いた凛が、怒りのままに処分して、住むところが無くなった桜は、そのまま衛宮家に居候することになった。

遠坂の血縁ということで、魔術的に特異体質で魔道な加護がなければならない桜は、凛の情報網操作によりアヴェンジャーの封印を見守る役として士郎の傍に置かれることになったのだ。実際は、魔力の魔の字も使えない素人なのだが……。まあ、なんとかなった。

「私も、姉さんには大きな借りができちゃいましたね。」

「なーに言ってんのよ。そうでもしないと、あんたは……。」

「分かってます。でも…、本当にありがとう。姉さん。」

「バカね…。世界に一人だけの私の実の妹なんだから。当たり前じゃない。」

「じゃあ、結婚も認めてください。」

「ソレとコレとは話は別よ。」

桜のついでの言葉を、速攻で否定する凛だった。

キャスターによる魂食いの犠牲者も社会に復帰していき、決して表沙汰にならない聖杯戦争の爪痕は少しずつ癒えていく。

けれど、戻らないモノもある。

慎二の死は、表面上は事故死だし、葛木は行方不明扱い。イリヤについては、墓すらない。（※後々、士郎がアインツベルン本拠地に殴り込んでイリヤの墓を作らせる）

「忘れないようにしよう…。」

「はい。」

「痛みも苦しみも、俺達を形成する今（現在）と、未来に繋がる土台なんだ。絶対に、忘れちゃいけない。」

「はい。」

「なあ、桜。」

「はい。士郎さん。」

「一緒に、生きていこうな。」

「はい！」

「しろーう。ご飯まだー？」
「シロウ、アーチャー。今日の献立は？」
「サケの照り焼きと、アスパラとパプリカのサラダ、厚揚げとタケノコの煮物と、あと麩の味噌汁だ。それと、お隣からのもらい物で、サクランボがある。」

「あー、はいはい。もうちょっと待っててくれ。」
「……もう。」
いつもの邪魔を受け、桜は、プウッと頬を膨らませたのだった。
「…桜。」
「ふぇ？」
士郎が桜の耳元に口を近づけて囁いた。
「……結婚すれば、いつでもどこでもできるからな？」
「！」
その瞬間、桜は、ボンッと赤面した。
「あ～ら？　な～にをする気なのかしら？」
「えっ？　そりゃあ…。」
「お前ら…、このバカップルが…。」

「仲が良いですね。」
「もーーーー!!　邪魔しないで!!」
桜が爆発した。

今日も今日とて、平和。
この平和が長く続くことを願った。

ＩＦ　もしも他のサーヴァント達が復活したら？　あと死人無し（臓現などは例外）

「ぼーずーー！　しょう…、グハッ！」
「うっせぇよ、ランサー。今、空豆剥いてんだよ。」
いつものランサーの襲撃を、いつものようにデコピン一発で撃退する士郎であった。
「懲りないですね…。いっつも士郎さんに負けてるのに。」
縁側で一緒に空豆剥いてた桜が呆れてそう言った。
「こ、この命ある限り…、絶対に坊主に勝つ！」
「そうか…。じゃあ、また粉々にしてやるよ。」
「そりゃ勘弁…。」
拳を握って見せた士郎のマジ顔に、ランサーは、即座に降参だと手を上げた。
第五次聖杯戦争。
その勝者となった士郎。
士郎の願いは、叶った。

異性界の住人であるユーリとの再会は果たされたのだ。
しかし、ただ再会だけを望んでいた士郎の願いは、聖杯が勝者の願いを叶えるために蓄積させていた魔力を余らせてしまい、ついでという形で士郎の願いを叶えることとなった。
それが、サーヴァント達との再戦だ。
結果……、サーヴァント達がマスター無しで受肉することとなり、おかしな、ドタバタな日常が始まることとなったのだ。

毎日懲りずに勝負しに来るランサー。
筋肉魔法の強化のため、戦いに付き合わされるバーサーカー。
柳洞寺に料理のお裾分けに行くたび、大魔法を放ってくる筋肉嫌いのキャスター。

最終的にセイバーともに生き残ったサーヴァントとなり、そして受肉したアーチャーは、そんな士郎の日常にめまいと頭痛を感じていた。
しかし、彼にとって頭痛のタネは、上記の者達だけではない。おそらく一番の頭痛のタネは……。
「士郎！　貴様、ますます肉体に磨きがかかっているようだな！　さあ、我にその成果

をみせるがいい！」
「お前も好きだな…。」
「何を言うか、たわけ！　この我を負かし、そして魅了しておいて、おいそれと逃げられると思うてるのか!?」
筋肉に力と美を見出せる価値観の持ち主だった、ギルガメッシュ。コイツも生き返った。
毎回、衛宮家に押しかけてくるたびに、士郎の筋肉を見せろと言ってくるのだ。コイツ…。
その都度、結構危ないラインの言葉を吐くのだから、聞いてる側はゾワゾワもんだ。
（※好きな人は好きだろう）
終いにゃ…。
「触らせろ！」
などと言い出す始末だ。
「やめろ。」
「っ！　士郎、貴様、王の手をたたき落とすな！」
「お前のさわり方は変なんだよ。」
「士郎さん…。士郎さんの身体は…、全部私のです！」

「いいや、小娘！　此奴の肉は我のモノだ！」
「アホ。桜のだ。」
「士郎さん！」
「チッ…。」
桜が涙を飛ばしながら士郎に抱きつき、ギルガメッシュは、舌打ち。
……なんだ、この図？
アーチャーは、頭痛のあまりに屋根の上で黄昏れながら、士郎の令呪からのパスを通じてイヤでも入ってくる情報に、いっそ狂ってしまいたかった。きっと今なら、バーサーカークラスで召喚できそうなぐらい、気を狂わせたい。
そんな時、家のチャイムが鳴った。
見ると、お皿の束を持った葛木と、葛木の後ろでガタガタ震えているキャスター（私服）がいた。
「宗一郎様…、宗一郎様ぁ…、どうしても来なきゃいけなかったんですか？」
「いつもおかずを持ってきて貰っているので、皿を返しに来ただけだ。」
「でも宗一郎様…！　アイツ（士郎）、絶対目的はおかずのお裾分けじゃなくって、私の魔術の攻撃だと思うのです！」
「そうだとしても、衛宮からのお裾分けはありがたい。」

「そうですけど…。」
「なんだ…。皿を返しに来ただけなら、玄関先にでも置いていけばいいだろ。」
「アーチャー!」
アーチャーが玄関先に飛び降りた。
「手土産あるのでな。」
「わざわざすまんな。」
「さ、さあ！　もう用事も済ませましたし、帰りましょう!」
「いや、まだ衛宮に挨拶をしていない。」
「いやですぅううう!」
「お前はここにいろ。」
「宗一郎様！　置いていかないでぇぇ!」
「何の騒ぎだよ?」
「いやあああああ!!」
「そして、会っていきなり悲鳴かよ。キャスターか。」
「衛宮。いつもすまない。皿を返しに来た。」
「あっ、そうなのか?　ありがとうございます。」
「あと、手土産も持ってきた。」

「焼き菓子だ。」
　アーチャーがさっき受け取ったケーキ箱に入った物を見て言った。
「わざわざどうも。なんだったら、夕飯食べて行きます？　空豆が安売りしてて、大量にあるんですよ。今日は、空豆パーティー。」
「ふむ…。ならごちそうになろうか。」
「宗一郎さまあああああああああ!!」
「うるさいわねぇ、おばさん。」
　そこへ、バーサーカーと共に、衛宮家に遊び来ていたイリヤがやってきた。
「おば…、い、イヤアァァア！　筋肉ダルマぁぁぁ!!」
「私のヘラクレスになんてこと言うの？　ねえ、シロウ、酷いよこのおばさん。」
「おばさん言うな！」
　怒られても動じないイリヤに、キャスターがギャイギャイ怒った。
「ひでぇな、坊主！　俺も誘えよ！　ビール買ってくるのに！」
「じゃあ、ランサーも食ってけよ。」
「よっしゃあ！」
「ふん、駄犬が。」
「ギルガメッシュはどうする？」

「豆ごときで動く我ではないが、たまには良いだろう。味わってやる。せいぜい王の舌を満足させる品を用意せよ。」
「んじゃ、決まりだな。」
「なーによ、なんかいつも以上に賑やかね。」
「ランサーに、英雄王…、そしてキャスターまで…。」
「なんだ、遠坂か。どうした?」
「何って、いつも通りよ。」
「で、セイバーが持ってるソレは?」
「いつもご馳走になってるので、凛が腕によりをかけておかずを作ってきてくれました。」
「ば、ち、違うわよ! 私は、士郎の中に封印したアヴェンジャーの封印の確認もかねてね…。」
笑顔で言うセイバーに、気恥ずかしくなったらしい凛が、慌てて建前となる言葉を吐こうとした。
「おい、キャスター。令呪使ってアサシンも呼べよ。」
「…仕方ないわね……。小次郎!」
「ーーーはい。おや、士郎殿。」

「飯食っていけよ。」
「では、馳走になります。」
「アーチャー！　今日はメッチャ人いるから、手伝えー。」
「そんなことは言われんでも分かっている。」
「じゃあ、私も手伝うわ。セイバーは、出来た料理を運んでくれる？」
「はい。」
「ライダーも手伝ってね。」
「はい、桜。」
「おい、桜、いつまで衛宮の家に…、ってなんだ!?　この大所帯！」
　そこへ慎二。
「あら、あんたも来たのね？」
「よかったら、慎二も食っていけよ。ついでだから。」
「ついでとはなんだ、ついでって！」
「兄さん、今日はご馳走ですよ。」
「…そうか。べ、別に良いぞ。食べて行っても。」
　コホンッと咳払いした慎二がそう言った。
「うひゃ～、今日はすっごい大所帯ね！」

「お帰り、藤ねえ。」
「士郎～。お腹すいた！」
「今から作るから待っててくれ。」
「……はあ……、なんだこの日常は？」

アーチャーは、割烹着を着ながら、ボソッと呟いたのだった。

これは、そんな日常。
あり得たかも知れない、世界線。